



始



時 228
19

中里介山著

大菩薩峠

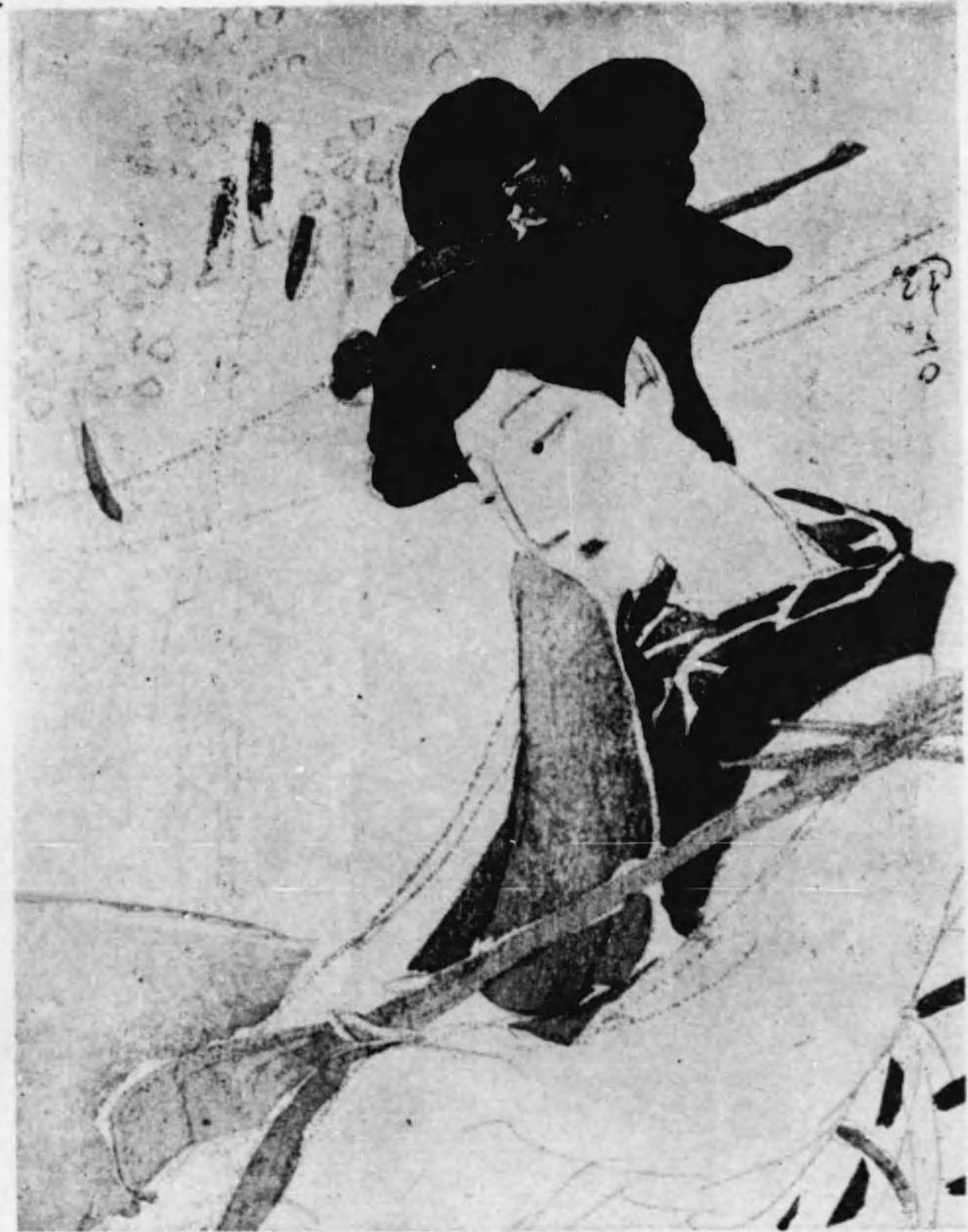
大菩薩峠刊行會





筆 匡 洗 川 井

演 方



筆方輝田池

君 抄

大菩薩峠

第四册

本册内容

黒業白業の巻
安房の國の巻
小名路の巻
禹門三級の巻

序 文

大菩薩峠は明治の末に起稿し大正の初に發表し昭和の今日に至りて猶ほ未だ完結せず、實に人類あつて以來の長篇小説也、抑も著者がこの尨大なるカンバスを用ひて描かんとする處の本意は「衆生業相ノ展開ヲ曲盡シソノ遊戯神通ヲ寫シテ入曼陀羅ノ實相ニ歸スル」にあり、この故に世の所謂藝術文學並に大衆文學とは根本に於てその性質を異にす。

新定版緒書

大菩薩峠は従来菊半截形の普通本が定本のやうになつてゐたが、長い間に形がチグハグになつたり、巻数が缺けたりして、折角の注文に間に合ひ兼ねたりした事もある。今度、形装を改めて十五冊を一度に揃えて、此の「新定版」を出すことになつた。この機會に組直しその他大革新を行ひたかつたが、何を云ふにも今日の非常時局の統制時代であるから、用紙その他以前よりも劣るものあるは已むを得ないけれども、これでも讀者諸君に奉仕し得る最良を盡したものであるといふことを御諒察願ひたい。なほ、その折々の巻頭言や、巻末に附した「是非」の類は此の際一切取り除いたが、これは別冊にまとめて世に頒つつもりである。なほ今までの菊半形のものも引續き讀者諸君の爲に備へて置く筈である。それから従来大菩薩峠刊行會の經營には變化もあり行違もあつたけれども、この時局に鑑みて舊縁を復し、著者と神田豊穂君と融和の下に野口兵藏君が事務に當ることになつたことを書き添えて置く。

昭和十四年四月

同人

一七 黒業白業の巻

八幡村の小泉の家に隠れてゐた机龍之助は、ひそりで仰向けに寝ころんで雨の音を聞いてゐました。雨の音を聞きながらお銀様の歸るのを待つてゐました。お銀様は昨日、そつと忍んで勝沼の親戚まで行くさ云つて出て行きました。今宵はいやでも歸らねはならぬ筈なのに、また歸つて来ないのであります。

お銀様は龍之助を連れて江戸へ逃げる事の爲に苦心してゐました。勝沼へ行くさ云つたのも恐らくは親戚の家を訪はんが爲ではなくて如何にして江戸へ逃げようかといふ準備の爲であつたかも知れません。

斯うして心ならずも小泉の家の世話になつてゐるうちに月を踰えて梅雨に打ち込むの時となりました。昨日も今日も雨であります。明けても暮れても雨であります。たださへ陰鬱極まる此の隠れ家のうちに腐るやうな雨の音を聞いて龍之助は仰向けに寝ころんでゐるのであります。雨も斯う降つては夜の雨といふ風流なものにはなりません。龍之助はたゞ雨の音を聞いて

二
ゐるのだが、一步外へ出ると、そのあたりの澤も小流れも水が溢れて田にも畑にも、今、自分の
寝てゐる様の下までも水が廻つてゐることは知らないであります。

梅雨になるまでには、花も咲きました。木の葉も青葉の時となつた事がありません。野にも山に
も鳥のうたう時節もあつたのだけれどそれも見ずに雨の時節になつてその音だけが耳に入るので
あります。龍之助とお銀様との間は、何だか無茶苦茶な間でありました。それは濃烈な戀であつ
たかも知れないし、自暴自棄の怖ろしい打着かり合ひであるやうでもあるし、血の出るやう
な膿の出るやうな熱苦しい物凄じい心持が、までつゞいて、お互にざろ／＼に溶け合つて、の
たり着いて来たやうなものであります。お互に光明もなければ前途もあるのではありません。
今、お銀様に離るゝことはし、斯うして雨を聞いてゐる龍之助の心も亦淋しくなります。こ
の人の心が淋しくなつた時は、世の常の人のやうに道心が萌す時ではありません。むら／＼とし
て枕許に投げ出してあつた刀を引き寄せて、ガバガバ身を起しました。例によつて蒼白い面であり
ます。龍之助が引き寄せた刀は、神尾主膳の下屋敷にゐる時分に貰つた手柄山正繁の刀でありま
す。それをまた燈火に引き寄せては見たけれど、さて如何しようといふのではなし茫然として坐
り直して刀を膝へ置いたばかりであります。
その時に家の外で急に人の聲が噪がしくなりました。

「危ねえ、土手が危ねえ」

といふ聲。

「旦那様、笛吹川の土手も危ないさうでございます、山水も險呑でございます、水車小屋は浮き
出しさうでございます、あらくの材木は荒かたツン流されてしまひました。今にも山水がドーツ
と出たら大變な事になりさうでございます、誰も今夜は寝るものは一人もございません」

小泉の主人に斯う云つて注進に來たのは小前の百姓らしくあります。洪水の出る時としてはまた
早い、龍之助は思つたけれど、此の降では如何なるか知らんと思ひました。

笛吹川は、これよりやゝ程遠いけれど、それへ落つる澤や小流れの水が決して侮り難いもので
あることは龍之助も推量しないわけではありません。

殊に山國の出水は耳を蔽ひ難き程の疾風迅雷の勢で出て來ることをも聞いてゐないではありません
ん。不幸にして山國さだけは心得てゐても此の邊の地形に就て丸きり觀測の餘地のない龍之助は
果して出水がドノ邊に當つて起りドノ邊に向つて來るんだか充分に呑込めてゐないのでありまし
た。白刃の來ることゝ、天災の來ることゝは豫め測る事が出来ません。今出水の危険を外に聞い
た龍之助が其れと共に自分の立場を考へ出したことは、さうあるべき事でありませぬ。

併し、それはたゞ立場を考へただけに過ぎませぬ。盲目的に考へて見ただけに過ぎませぬ。こゝ
に引き寄せた手柄山正繁の刀が其れに向つて何の役に立つものでないことはよくわかつてゐる筈
であります。この時に外で殷々半鐘を撞き鳴らす音がしました。人の騒ぎ罵る聲は、いよく／＼

喧ましくなりました。思ふに蓑笠を着けた幾多の百姓連が獲物を携へて出水出水の警戒に當るらしくあります。村の中心さもいふべき此の小泉家へ、それ等の百姓が皆んな一旦は集まつて、それ／＼部署に附くものゝやうであります。この家では一人残らず起きて其等の百姓達の差圖や焚出なごをはじめて上を下へ騒いでゐるのが龍之助には手に取るやうにわかりますけれど、誰も龍之助の處へは面を出すものがありません。手を貸せよ云つて来る者もなければ御心配なさいますなご云つて見舞うものもありません。この二人の事は、もう此の頃では小泉家の誰にも此の急に當つて思ひ出されないほかに、交渉が少いかゝり人でありました。

「この水で、お銀は道を留められた、それで歸られないのじや、して見れば……」

龍之助は、はじめてお銀様の事を思ひやりました。外の騒ぎは益々大きくなつて、氣のせいか轟々として水の鳴り動く音さへ聞えて来るのであります。龍之助は刀を其處へ置いて立ち障子を開けて椽側へ出て雨戸を少しばかり開けて外を見ました。外を見た處で、此の人の眼には内と同じことに眞暗な闇の外に何も見えるものではありません。併し乍ら、外はド／＼と雨が降つてゐます、風はあまりないやうでありましたけれど、何處かの山奥で海嘯のやうな音が聞えないではありません。その近いあたりは何んでも一面の大湖のやうに水が張りきつてしまつたらしくその間を高張提灯や炬火が右往左往に飛んでゐるのは宛がら戰場のやうな光景でありました。その戰場のやうな光景はながめる事は出来ないながら、その間

り合ふ聲は明瞭に龍之助の耳まで響いて来るのであります。

その騒がしい聲と、穩かならぬ光景とを聞いたり想像したりして見ても空しく氣を揉むばかりであります。

龍之助は雨戸を立ち切つて、また前の處へ歸りました。この出水も氣になるしお銀の歸りも氣になるけれど、何とも詮術はありません。龍之助は一人で蒲團を取り出して荒々しく其れを展べて横になりました。外では半鐘の聲がしきり無しに聞えるのに、内では、これもまた早からうのに一二匹の蚊が出てぶ／＼と耳許で唸りました。それを掌で發止まハタいて打ち落し、うつら／＼と枕に親しみかけました。

けれども、外はその通りに騒がしいのに、今や全村の犬も鶏も聲を揚げて泣き出しました。人畜共に寝ることの出来ない晩に龍之助とても安々と眠るわけには行きません。たゞ横になつたといふだけで外の騒ぎを聞き流してゐやうといふのであります。

此の東山梨といふ處は、云はゞ全體が笛吹川の谷であることは龍之助もよく知つてゐました。三面から翻倒して来る水が此の谷に溢れ返る時の怖ろしさも、相當に峽東の地理の心得のある龍之助に取つては理解が出来ないでもありません。

併し、この時分になつては龍之助は、天災の来る事を怖れるよりは寧ろ、山が大きな口を開いて裂け我も人も家も獸も悉くブン流されて見たら面白いたらうといふ空想に驅られて、却て外の騒

きを痛快に思ふやうな心持でゐました。外の騒ぎも漸く耳に慣れた時分に龍之助は眠りに落ちました。

「もし、お客様」

龍之助が眠つた時分になつて誰やら家の外から叫びました。

「もし、お客様」

見舞に来るならば、もつと早く、また眠らない時分に来て呉れたら宜かりさうなものを、いくら食客だから云つて、今迄一人で抛つて置いて、漸く眠りに着いたのを起しに来るさは大人けな

いと思へば思へないでもありませんでした。

「あ、誰だ」

と眠りかけてゐた龍之助は其の聲で直に呼び醒まされました。

「御用心なされませ、今夜はお危なうございます」

「危ないさは」

「此んなに水が出て参りました、山水がドツと押し出すとお危なうございますから、本家の方へおゐでなさいまし、お待ち申して居りまする」

「それは御苦勞」

「如何か直にお出で下さいまし」

と云ひ捨て、其の者は行つてしまひました。餘程あわてゝゐると思つて家の外から此れだけの言葉をかけて其の返事も碌々聞かないで取つて返してしまひました。

龍之助は敢て其の言葉に従つて本家の方へ避難をしようといふ氣は起しませんでした。寧ろ起き直つて見るこゝさへも億劫がつて、折角破られた夢を再び結び直すのに長い暇を要する事なく、村の有ゆる人々の恟々たる一夜を兎も角熟睡に落ちてゐた龍之助の安樂も長くはつゞきませんでした。

不意に夥しい叫喚が耳に近い處で起り、つゞいて雷の落つるやうな音がして家も疊も一時に震動するゝ氣がついて、手を伸ばして枕許の刀と脇差を探つた時に、手に觸れたものはヒヤリとして、然も手答への乏しいもの。

「水だ！」

疊の上を水が這つてゐます。

刀と脇差を抱えて立ち上つた時に、水は戸も障子も襖も一時に押し破つて此の寢室へ瀧の如くに亂入しました。

「あつ」

さといふ間もなく其の水に押し倒された龍之助の姿を見ることが出来ません。

山水の勢は迅雷の勢と同じことであり、あつさといふ間に耳を蔽うの隙もありません。

裏の山から此の水を眞面に受けた此の家の一部をメリ／＼と外から裂いてゐる中に餘の水は、もう軒を浸してしまひました。水が軒を浸す時分には家の全體が浮き出さない限りはありません。この水は漫々と遠寄せに来る水ではなく一時にドツと押し寄せた水ですから、土臺の腰も亦一時に碎けて、碎けた處を只押しに押したものでだから家はユラ／＼と動いて流れ出しました。四邊は滔々たる濁流であります。高い所には高張や炬火が星のやうに散つて人の怒聲が耳を貫きます。

「助けて！」

さいふ悲鳴が起るこ。

「おい！」

と答へる聲はあるけれど、何處で助けを呼んで何處で答へるのたか更にわかりません。

避難すべき人は背のうちから避難し盡した筈であるのに、猶ほ逃げ残れた者がある。見えて彼處の屋根の上や、此處の木の枝で悲鳴の聲が連續して起ります。多くの家や小屋が見る／＼動き出して徐に流れて行きます。

其の中の一つの屋根の破目が此の時中から押破られて其處に姿を現したのは一旦水に吞まれた机龍之助でありました。破風を押破つた龍之助は屋根の上へたり出たものゝやうです。それでも刀と脇差だけは下け緒で帶へしかと結んでゐたものらしくあります。屋根へ出るさ菖蒲の生ま

てゐた棟へ取りつきました。其處でホツと息をついて自分の面を撫で、見ました。頬のあたりから血が流れてゐる、何かのはずみに怪我をしたものらしい。手足も身體中も頻りに痛むけれども、今何處にドレたけの怪我したものでかわらないのであります。

兎にも角にも屋根の棟へ取りつた龍之助は其處でホツと息を吐いて面を撫で、見たが、其の削の大したものではない事を知り、水に浸つた我身を身ぶるひしたのであります。四邊の光景が如何であるかといふ事は一向にわかりません。また何處に向つて助けを呼ばうとするものとも見えません。たゞ自分を載せてゐる此の家が徐々として動いてゐることがわかります。出水の勢ひは急であつたけれど家の流される勢ひは其れと同じではありません。

續け打に打つ半鐘の音は相變らずけた、ましく聞えるけれども、さき程まで遠近に聞えた助けを求むる聲と、それに應ずる聲とは此の時分は、もうあまり聞えなくなりました。而憎い事は、この時分になつて雨の歌んだ空の一角が破れて幾日の月か知らないけれども月の光が其處から洩れて強盜提灯ほごに水の面を照らしてゐることであります。

その月の光に照された處によつて見れば机龍之助は、屋根の棟に取りついたまゝ、さも心地宜さうに眠つてゐました。月の光に照された蒼白い面の色を見れば、眠つてゐるのではない、こゝまでやつこのたり着いて此處で息が絶えてしまつたのかも知れません。屋根は其のまゝで流れては留まり留まつては流れて箆吹の本流の方へさ漂うて行くのであります。

屋根は洪水の中を漂つて行くけれど、それは他の家につかり、大木の幹に遮られ、山の裾に
腰き留められ、或は暗くなり或は明るくなり、或時は全く見えなくなつたりして極めて緩漫に
流れて行くのであります。

二

一夜のうちに笛吹川の沿岸は海になつてしまひました。家も流れる大木も流れる、材木や家財道
具までも濁流の中に漂つて流れて行くうちに夜が明けました。

人畜にどの位の被害があつたかはまたわかりません。救助や焚出で兩岸の村々は引つゞいて戦場
のやうな有様であります。

惠林寺の慢心和尚は法衣の袖を高く絡めて自身真先に馬して、大小の雲水を指揮して百姓や見
舞人やを叱り飛ばして丸い頭から湯氣を立てゝゐます。

雲水共は土地の百姓達を併せて、濁流の岸へ沈め棒を入れたり川倉を築いたり火の出るやう
な働きです。この手を切られると水は忽ち下部や鹽山一帯に溢れ出す。此處の手だけは死力
を盡しても防がなければならぬ。すでに日頃から堅固な堤防があつて、昨夜來の不眠の警戒で
したけれども、水の破壊力は人間の抵抗力を愚弄するものゝ如でありました。棒を沈めるに浮き
出し、木牛を入れるに泳ぎ出し、築いた川倉が見る間に流されて行き、あとから土俵を運ん

たり石を轉がしたり無用にひさしい努力を昨夜から寝すにつゞけてゐるのであります。和尚が
雲水を叱りこはしてゐる其の傍には珍らしやムク犬が其の侍者でもあるかのやうに神妙に控へて
ゐます。

この時のムク犬は、最早お寺へ逃げ込んだ時のやうに瘦せて險しいムク犬ではありません。火水
になつて働く大勢の働き振さ、漲り返る笛吹川の洪水を見比べては自ら勇みをなして尾を振り
立てながら時々何をか促すやうに慢心和尚の面を仰ぎ見るのであります。

「和尚様、何か御用があつたら及ばずながら私をお使ひ下さいまし」

ムク犬は和尚に自分の爲すべき事の命令を待つてゐるかのやうでありました。
其のうちに何を認めたか此の犬は岸に立つて流れの或處に凝り目を据ゑました。

堤防の普請にかゝつてゐた慢心和尚をはじめ雲水や百姓達が

「あ、あの犬は如何した、此の水の中へ泳ぎ出したわい」

さすがに働いてゐた者共も一時手を休めて舌を捲いてながめるに滔々たる濁流の真中へ向つて矢
を射るやうに泳いで行く一頭の黒犬、申すまでもなく其れはムク犬であります。

ムクが此の場合何で此んな冒険をやり出したのか其れは誰にも合點の行かない事です。その濁
流の中を泳いで行く目あては今しも中流を流れ行く一軒の破ら家の屋根のあたりであるらしく見
えます。

草屋根の流れて行く方向へ斜に、或時は濁流の中にはさんご上半身を現はして尾を振り立て、乗り切つて行くのが見えました。或時は全身が隠れて首だけが水の上に見えました。また或時は身體も首も盡く水に溺れたかと思ふと、またスツクと大きな面を水面に擡げて、やはり全速力を以て其の屋根を追ひかけて行くのであります。やがて流れて行く屋根に追ひついた時分は、こゝに堤防を守つてゐた人々とは相距るこゝが餘程遠くなつて、屋根の蔭に隠れてしまつたムク犬の姿は見ることが出来ませんでした。併し、屋根だけは相變らず浮きつ沈みつして、下流へ押し流されて此れも漸く眼界から離れるほどに遠くなつてしまひました。無論、屋根の處へ泳ぎついて、屋根の蔭にかくれてしまつてから後のムク犬の姿は、その首でさへも再び水面へは現はれませんでした。

ながめてゐた沿岸の人達は、犬の事を中心にして様々な評議です。あの犬は人を助けに行つたのたらうと云ふ者もありました。水を見て興を抑へる事が出来ないで自ら飛び込んだものであらうといふ人もありました。いづれにしても此の水の中へ飛び込むとは思慮の無い事、それが畜生の淺ましき、あたらしい一匹の犬を殺してしまつたといふやうな話でありました。慢心和尚は其の評判を聞きながら此んな事を云ひました。

「昔、淡路國岩屋の浦の八幡宮の別當に一匹の猛犬があつた、別當が泉州の堺に行く時は、いつも其犬をつれて行つたものぢや、其の犬が行く土地の犬共が怖れ縮んで動くことが出来なかつ

たといふ事じや、さて其の猛犬は、單獨で海を渡つて堺へ行くことがある、犬の身で如何して單獨で海を渡るかといふに、先づ海岸へ出て木を流し見るのじや、その木が堺の方へ流れて行くのを見て、犬はよい潮時じやと心得て、己れが載れるほどの板を引出して來て其れに乗る、さうする潮の勢がグン／＼と淡路の瀬戸を越えて泉州の堺まで犬を載せて一息に板を持つて行つてしまふ、そこで板から下りて身ぶるひをして泉州の堺へ上陸するといふ段取じや、その潮の流れ條さといふのは其れほど急な流れで至つて勢が強い、この潮へ引き込まれた船は帆を張つても力が及はないで、すん／＼と一方へ引かれて行くのじや、それほどの潮條があることを、犬はちゃんこ心得て、先づ木を流して潮時を見て置いて、それから筏をこしらへて載るといふのが感心ではないか、それ以來この潮時を別當汐と名づけるやうになつたといふ話がある」

お前達より犬の方が思慮もあり勇氣もあるから心配するなといふやうにも聞えました。

三

それから三日目の朝の事、笛吹川の洪水も大部分は引いてしまつた荒れあこの岸を彷徨つてゐる一人の女がありました。

面は固く頭巾で包んだ上に笠を深くかぶつてゐましたから、何者とも知ることは出来ません。岸を彷徨つて何かを頼りに求めてゐる容子であり、或時はまた濁つてゐる川の流れをながめてそ

こから何か深ひ着くものは無いかと見てゐるやうであり、或時はまた岸の石ころや、砂地の間を仔細に見て其處に埋もれてゐる何物かを探すやうにも見えませんでした。

岸を上つて見たり下つて見たりする此の女の舉動は外目に見れば、物狂はしいもの、やうにも見えません。

差出の磯の龜甲橋も水に流されて、蒲杭だけが、また水に堰かれてゐる處へ来て女は不圖何物をか認めたらしく、あたりにあつた竹の小片を取り上げて岸の水を此方へ掻き寄せました。掻き寄せたものを手に取つて見ると、それは白木の位牌であります。位牌の文字をながめると意外にも

「悪女大姉」

悸ましたお銀様は——この女はお銀様であります——やがて紙を取り出して此の位牌を包んで懐中へ入れましたが、

「此んなものは要らない、わたしは此んなものを探しに來たのではない」

と云つて、一旦懐へ入れた悪女大姉の位牌を荒々しく懐中から取り出してそれを振り上げました。

「此んなものは要らない！」

お銀様は水の面を睨んで突立つてゐると其處へ不意に物の足音がしましたから、お銀様はあわて

「おや」

驚いて振り返つたお銀様は

「見たやうな犬だ」

見たやうな犬も道理。何時の間にかお銀様の背後に近いてゐたのは自分の實家、有野村の藤原家へ雇はれてゐた召仕への女、お君の愛するムク犬であることは、その家のお嬢様であつたお銀様が見れば見違へる筈はない事であります。惠林寺から程遠からぬ此の邊にムク犬が現はれることは不思議はないが、三日前のあの大水の中で溺れることなく斯うして健在であることが不思議であります。

お銀様はあの時、お君について駒井家に赴くべく我が家を去つて以來ムク犬の身の上は知りませんでした。

今こゝに偶然めぐり合つて見るに不思議に堪へないながらも、さすがに懐しい心持が湧いて來ないでもありません。

「おや、お前はムクではないか」

と云つた時に、ムクの後から少し離れた土手の上に人の影が一つ見えることに、はじめて気がつきました。

お銀様に取つてはツイぞ見たこゝの無い人、然も其れは年増盛りの水氣の多い女の人、この邊で

は餘り見かけない肌合の小またの切れ上つた女の人が餘念なく自分の方を見てゐたからお銀様もまぶしさうに其の年増の女を見返してゐると、向うから叮嚀に腰をかがめて笑顔を見せました。お銀様もそれに返しのお辭儀をしました。

「ムクや、ムクや」

その年増の女の人が柔しい聲をして犬を呼びました。果して此の犬の名をムクさといふ、ムクの名を知つてゐる上は、お君に縁ある人に違ひない、と思つてゐるうちに其の年増の女は土手を下つて、お銀様に近い川の岸の蛇籠の傍へやつて來ました。

この年増の女、お銀様にはまた知己のない人でしたけれども、これはお君のもさの太夫元、女輕業の親方のお角であります。こゝでムク犬がお銀様とお角を引合せの役目をつとめました。

「丁度一昨日の夕方でありました。内の男衆が此の出水で雑魚を捕るに申しまして四つ手を下して居りますと、其處へ此の犬が流れたのでございます、吃驚してよく見ると、この犬が人間の着物をくはえて其處まで泳いで來てゐたものでございますから驚いて人を呼んで其の人をお助け申して家へお連れ申しましたけれど、何處のお方やら一向にわかりませんので……幸に呼吸は吹き返しまして只今、宿に休んでおゐるでございませぬがまだお口をお聞きなされるやうにはなりません、さうするに此の犬がまた、わたしを引張り出すやうにして外へ連出しましたから、若しや其のあそをついて來て見るに惠林寺様へ入りました、惠林寺へ入りますと、彼處では、

ソレ黒が來た、黒が來たに大勢して此の犬を迎へて皆さんがお悦びになりました。やがてまた此の犬がわたくしを川の方へ川の方へ連れて參りますから、若しや、これはも此の犬の主人であつた女の子が川へ陥つて死んでゐる處へ、わたくしを連れて行くのではないかと胸騒ぎがしながら、そこをついて行つて見ますと、お君ではなくて、あなた様にお目にかゝる事が出來ました。ムク犬が洪水の中から救ひ出して來たといふ人、それが龍之助であつたといふ事がわかつて狂喜したのは、や、話が進んだ後の事であります。

四

宇津木兵馬には如何しても神尾主膳が机龍之助を隠してゐるとしか思はれません。

神尾の屋敷は種々雑多な人が集まるさうだから其の中に机龍之助も隠れてゐるに相違ないと思ひてゐました。

けれども、甲府に於ける兵馬は破牢の人であります。罪のあるに無いに拘はらず、浮きは其の町の中へ足の踏み込めない人になつてゐるから長禪寺を足がかりにして、僧の姿をして夜な／＼神尾の本邸と別宅との兩方に心を配つて、附け焼つてゐました。

先づ見つけ次第に神尾主膳を取つて押へて、直接に詰問して見よう、神尾を討つて捨て、も構はないと思ひました。彼、神尾は自分に取つて恩義のある駒井能登守を陥れた小人であつて敵の片

割れといへば云へない事もない、その非常手段を取らうとまで覺悟を定めて容子を伺うと、この頃神尾は病氣になつて寝てゐるといふ事を聞き込みました。その病氣といふのは犬に噛みつかれた創が元たといふ事までも聞き込むことが出来ました。

よし、その醫者を一つ當つて見よう、兵馬は例の表だけの僧形で神尾の屋敷の前まで来かゝると、門前に人集りがあります。穩かでないのは、これが城下の人ではなく養堂をつけ獲物を取つた百姓一揆とも見れは見られぬこともない人々であります。

「お願ひでございませう、神尾の殿様」

「お願ひでございませう」

と彼等は口々に罵つて居る。

「退れ、退れと申すに、殿は只今御病氣じや、追つて穩便の沙汰を致すから今日は此のま、引取れと申すに」

門番は斯う云つて叱りつける

「如何か、殿様にお目にかゝりてえんでございませう、殿様にお目にかゝつて、その申譯がお聞き申してえんでございませう」

「聞き分けのない者共だ、強いて左様な事を申すを爲にならん」

「其んな事を仰有らずに、殿様に取次いでお呉んなさいませう、その御返事を聞かなければ歸れぬ

えのでございませう、御病氣でもお口位はお利きになるでござえませう、さうか、神尾の殿様にお願ひ申して、長吉と長太を返して戴きてえんでございませう、それが爲に仲間のものが斯うして揃つて参りましたんでございませう」

「其のやうな者は主人は御存知が無い、他を探して見るがよい」

「駄目でございませう、他を探したつて他にある筈のもんでござえませせん、此方の殿様にお頼まれ申して参りましたのが今日で廿日になるけれども、また歸つて参らねえのでございませう」

「左様な事は此方の知つた事ではない、それしきの事に斯様仰々しく多勢が打ち連れて参るのは上を怖れぬ振舞表沙汰に致すに其の分では濟ませられぬ今のうちに歸れ」

「此方様の方では、それしきの事でございませうが、私共の方には中々の大事でござえませう、長吉にも長太にも女房もあれは子供もあるでござえませう、亭主を亡くした女房子供が泣いてゐるのでございませう」

「諄い奴等じや、左様な事は當屋敷の知つた事では無いと申すに」

「お前様には判らねえでござえませう、殿様で無ければ判らねえでござえませう、殿様にお目にかゝつて、長吉の野郎と長太の野郎が生きてゐるのか死んでしまつたのか、其處んところをお伺ひ申してえんでございませう」

「黙れ、穢多非人の分際で」

「黙らねえでございます、穢多非人で結構でございます、穢多非人だからさういって、さう人の命を取つてい、譯のものではござえますが、長吉長太は犬を殺すのが商賣でございます、それで頼まれて来たもんでございます、殿様に殺されに来たもんでねえのでございます」

「御主人に對して無禮な事を申すぞ、奉行に引き渡すぞ」

「引き渡されて結構でございます、眼の開いたお奉行様にお願申して長吉長太の野郎を歸して戴きませう、長吉長太を歸して下されば、わし等は牢屋へブチ込まれても構はねえんでござえます」

「よし一人残らず引括るからさう思へ」

「おい、皆んな一人残らず引括りなさるさよ、随分引括つてお貰ひ申すべえじやねえか」

「さうたく、引括られるもんなら皆んな一度に引括つてお貰ひ申してえもんだ」

「引括られるとしても、薪ざつぼうや藁藁は違つたから、たゞで引括られても詰らねえじやねえか、少しばかり手足をバタ／＼させ其れから引括られた方が宜かんべえ」

「其の方がい、さうしてゐるうちには殿様が出て来て、長吉長太を返してお呉んなさらねえものでもあるめえ、さあ、皆んな一度に引括られて見ようでは無えか」

「此奴等、人外の分際で武士に對して無禮を致すか」

門の中から數多の侍足輕の連中が飛び出しました。

その時代に於て人間の部類から除外されてゐた種族の人に、四民の一番上へ立つやうに教へられてゐた武士たる者が、こんなにして其の門前に騒がれることはあるまじき事でありませう。非常を過ぎた非常であります。兵馬は其れを見て、よく／＼の事で無ければならぬと思ひました。此の部類の人々を斯くまでに怒らせるに至つた神尾の仕事にたしかに、大きな亂暴があるものと想像しないわけには行きませぬ。

見物の中の噂による、事實は斯うたさうです。即ち神尾主膳が此の部落のうちで皮剣の上手を二人雇うて、犬の皮を剣がせようとした處が、やり損じて犬を逃がしてしまつた。それを神尾主膳が怒つて無慘にも二人共に槍で突き殺してしまつた。それが遂に此の部落の者を怒らして、再三掛け合つたが埒が聞かず、遂に今夜は手詰の談判をする爲に斯うして大擧してやつて来たのである。

穢多非人の分際として、苟くも士人の門前に斯かる振舞をする事は、大抵ならば同情が寄せられない筈でありますけれども、見物の大部は、やゝもすれば

「あれでは、この殿様が無理だ、穢多が怒るのが道理だ」

さういふやうに聞えるのであります。聞いてゐた兵馬も、成程さう云へばさうだ、多寡が犬一疋の爲めに二人の人間を殺すさは心なき仕業である、こゝでも神尾の亂暴を憎む心になりました。

そのうちにバラ／＼と石が降りはじめました。メリ／＼と長屋敷の一部や、門の扉が打ち壊され

はじめたやうであります。

「始まつたな——」

片唾を吞んでながめてゐる見物の中にも石を拾つて投げはじめる者もあります。

そのうちに、群集がわーつと鬨の聲を揚げて、いよ／＼屋敷へ乗り込んだかと思ふと、さうでなく、雪崩を打つて逃げ出すと、その煽りを喰つて見物が雪崩を打つて逃げ惑ひました。見れば神尾の門内から多くの侍が白刃を抜いて切先を揃へて打つて出でた處で、その勢に怖れて群集が、一度にドツと逃げ出したものゝやうでありました。白刃の切先を揃へて切つて出でたのは神尾の家來ばかりではあるまい。この近い處に住んでゐる勤番のうちから加勢が盛んに來たものと見えます。

群集のうちには切られたものも二人や三人ではないらしい。さすがに白刃を見るに彼等は膽を奪はれ、バツと逃げ散つてしまつたが、切つて出でた侍達は長追をせず、其のまゝ門の中へ引込んでしまひました。一旦、逃げ散つた群集は、また一團になつたけれども、今度は別に文句も云はずに、門前に斬り倒された數名の手負を引擔いて、そのまゝ何處にもなく引上げて行く模様であります。

兎も角、この場の騒動は是れだけで一段落を告げましたけれど、彼等の恨みがこれだけで鎮まるべしとも思はず、神尾の方でも亦、所謂穢多非人風情から斯様な無禮を加へられて其の分に済ま

して置くべしとも思はれないのであります。

その翌日、聞いて見ると、果して昨夜の納まりは容易ならぬことでもありました。何でも一旦、神尾の門前を引上げた彼等の群は荒川の岸に集まつて、手負を介抱したり善後策を講じたりしてゐる處へ、不意に與力同心が押寄せて、片つはしからヒシ／＼繩にかけたといふ事でありました。繩にかけられないものは命辛々何れへか逃げ散つてしまつたといふ事でありました。

それだけの評判が長禪寺の境内までも聞えたから兵馬は、また急いで例の姿をして町の中へ立ち出でました。

右の風聞のなほ一層委しき事を知らうとして町へ出て見ると、町では三人寄れば此の話であります。それを聞き纏めて見ると長禪寺で聞いたよりは一層慘酷なものでありました。

神尾の門前を引上げた彼等が集まつてゐたのは下飯田村の八幡社のあたりと云ふ事であつたといふ事で、そこへ踏込まれてヒシ／＼と繩をかけられた數は二十人といふ者もあるし、三十人といふものもあり、或は百人にも餘るなんぞ話してゐる者もありました。

その繩をかけられた者共の處分に就て、随分烈しい噂が立つてゐました。一人残らず其の場で弄殺しになつてしまつたといふのが事實に近いやうに聞きなされます。兎も角も、牢内へ繋いで置いて相當の處分をするといふ手段を取らずに其の場で首を抜き手足を斬り散々の弄り殺しを試みて四肢五體を荒川の流れへ投げ込んでしまつたといふ事です。

さいふ事が言ひ嘘されるのであります。兵馬はありさうな事だと思ひつゝ、ドノ道、神尾の身の上にも何か變事があるたらうと豫期しながら其の晩は鹽山の惠林寺へ歸つて泊り翌日、早朝に立つて、また甲府へ歸つて見るに昨夜——さいふよりは今曉に近い時、神尾主膳の邸が何者かによつて焼き拂はれたさいふ事でありませぬ。兵馬は其の委しきを知るべく、わざと僧形を避けて徳興館へ通ふ勤番の子弟に見えるやうな意匠を加へて、ひざり長禪寺を立ち出でました。

兵馬が何心なく通りかゝつたのは、例の折助共を得意とする酒場の前であります。この夜も亦、戀の勝利者たの賭博の勝利者たのが集まつて、太平樂を並べてゐる、兵馬が前を通り過ぎた時分に、酒場の繩暖簾なほのれんを別けて、ゲーブさいふ酒の息を吐きながら、咬くはへ楊子で出かけた男がおりました。それは縞の着物を着て、縮緬の三尺帯か何かを、ちよつと氣取つて尻のあたりへ締めて、兵馬の前を千鳥足で歩きながら鼻唄をうたひ出しました。

それを後から兵馬が見ると、何さなく見た事のあるやうな男だ、鼻唄の聲までが聞いた事のあるやうに思はれてならぬ。

「はッ、はッ、はッ、何が幸になるものたかわからねえ、また何が間違へになるものたかわからねえ、人間萬事塞翁が馬よ、馬には乗つて見る、人には添つて見るだ」

其の途端に兵馬は漸く感づきました、これはいつぞや龍王へ行く時畑の中の木の上で犬に逐ひかけられて狼狽してゐた男。

其の男の名前も金助と呼ぶ事まで兵馬は覚えてゐました。この男を捉まへて見るに面白からう。
「金助さの」

「おや、誰方でございます」

振返つて金助は怪しい眼を闇の中に光らせました。

「拙者じゃ」

兵馬が、わざと名乗らないで慣々しく傍へ寄る。

「あ、鈴木様の御次男様でございますね、徳興館へお出でになるのでございますか、大層御勉強でございますね、お若いうちは御勉強をなさらなくては可けません」

金助は心得面にこんな事を云つて委細自分で呑み込んでしまつたものらしく、兵馬は却て其れがいゝと思つたから、自分も鈴木様の御次男様さやりに成り済まして、

「金助さの、昨夜の火事は驚いたでござらうな」

「驚きましたにも何にも、あんな處へ赤い風が吹いて來ようとは思ひませんからな」

「お前の家には別に怪我もなかつたか」

「へえ、難有うございます、私の家なんぞには怪我なんぞはございません、よし、怪我があつて見た處で、私なんぞは知つた事じゃあございません」

「それは何しろ宜かつた」

「鈴木様の御次男様、いや辰一郎様でございますね、何でございますか、あの徴典館は昨夜の火事で、屋根へ飛火があつてお家が大幅痛んでおゐるさうでございますが、それでも今晚、學問がおありなさるのでございますか」

「大した處も無いから今晚も集まるつもりだ」

「それは結構でございます、お若いうちは御勉強をなさらなくてはなりません、私共見たやうになつては追付きませんから、只今何を御勉強でございますか、論語でございますか、孟子であらうでしょうか、子曰はく君子は器ならずと云うのでございませう、子曰はくは結構でございますね、十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はずとありましたな、貴方様は丁度その志學のお年頃でございます、處が私なんぞは三十にして立たず四十にして腰が抜けさうな處なんでしょう、さうも可けません、併し辰一郎様、人間は學問ばかりしたからと云つて其れでいゝといふわけではありませんね、青表紙を澤山讀んで、活字引になつて見た處で一向つまりません、活字引はまた可いけれども、腐れ儒者となつた日には手もつけられませんが、學問は實地に活用しなければつまらねえんでございます、いかがでございます時々は狂歌、都々逸、柳樽の類をおやりになつては、あゝいつたものをやりますと、自然に人間が碎けて参りますな、人間に其れたけユトリが出来て参りますな、人間は朝から晩まで子曰はくではやり切れませんが、風流といふことは大切なものでございますよ、ちと、その方を御指南致しませうかね、は、は、

は

「金助どの」

「はい」

「お前は、これから何處へ行く」

「私でございますか、私はこれから少しはかり淋しい處へ行くのでございます、淋しい處と云つたからとて、別に幽霊やお化の出る處ではございません、古城の方へ参るのでございます、古城は歸國ヶ崎は神尾主膳様のお下屋敷まで、これからお見舞に上らうといふんでございます」

「左様か」

金助は言はでもの事まで云つてしまいました。兵馬は計らず都合の宜い事を聞いてしまいました。

「ねえ鈴木様の御次男様、昨夕の火事は、お驚きなすつたでございませうね」

金助は同じやうな事を繰り返しました。

「驚いたさも」

「私も驚きましたよ、まさか、彼處へ、あれほご思ひ切つて赤い風が吹かうとは思ひませんからね」

「金助どの、あれは一體、放火か、それとも粗忽火か」

「放火……いや御冗戯を仰有つちや可けません、この御城下の然も、當時、飛ぶ鳥を落すほどの

神尾主膳様のお邸へ、何處の奴が放火をするもんですか、粗忽火に定まっていますよ、誰が何と云つたつて、粗忽火でございます、放火たなんといふ奴があつたら此處へ件れてお出でなさいまし」

「其れは左様であらう、して、神尾殿や御一族は何れに避難をしてゐらつしやる」

「神尾様のお立退先でございますか、それは判りませぬね、よし、判つてゐても其れはつかりは申上げられませぬ、それを知つてゐるのは大方、この金助ぐれえのもので……おつこ危ねえ、そりや嘘でございます、神尾の殿様は躑躅ヶ崎のお下屋敷へお立退でございますよ、え、く、御無事でゐらつしやいますとも、お怪我などは些とも有りなさりやしません、若しお怪我があるといふ者があつたら此處へ件れてお出でなさいまし」

「拙者も、その神尾殿に會つてお見舞を申上げたいと思つたが、何所にお立退たかわからない」

「其れはさうでございます、躑躅ヶ崎にお出でになる事はおゐでになるに違ひないのでございませぬ、當分は誰方にも決してお目にかゝる事はございませぬ、それは御病氣なんですよ、前から御病氣でもつて休んでおゐでになつたのでございませぬ、此の御病氣がお癒りなさるまでは決して、それは御支配様になつてお目にかゝる事ではございませぬ」

「金助どの、それをお前が如何して知つてゐる」

「如何して知つてゐるぞ仰有つたつて、そこは此の金助でなければ判らないのでございませぬ、其處が金助の價値ちやうどなんぞでございます」

酔つてゐることは云ひながら、此の金助の云ふ事は何か心得面でありました。だから兵馬はいよく好い獲物と思つて、

「處で金助どの、お前に折入つて頼みたいのだが、特別に拙者だけを神尾殿に引合せて呉れまいか、内々では是非共お話を申上げねばならぬ事があるのじや」

「へえ、それはまた如何いふ事でございます、併し、それは折角でございますが、さうも其のお頼みばかりは駄目でございますよ、エ、そりやもう」

「左様な事を言はずに會はして呉れ」

「會はして呉れと仰有やつた處で居ねえ者はお會はせ申すことは出来ねえではございませぬか」

「ナニ、神尾殿は居らぬと、では、躑躅ヶ崎におゐでになるといふのは嘘か」

「エ、何でございます」

「今、お前は神尾殿は躑躅ヶ崎の下屋敷に立退いておゐでになるぞ云つたではないか」

「左様申しましたよ」

「そんなら、拙者は會ひたいのじや、會つて直々にお話し申したい事があるから、それをお前に頼むのじや」

「成程」

「さあ、お前が躑躅ヶ崎へ行くといふなら、拙者も鐵血館へ行くことをやめて、お前と一緒に躑

「獨ヶ崎へ行く、案内して呉れ」

「そいつは困りましたな、そんな駄々を捏ねて下すつては困ります、お歸りなさいまし、此處からお歸りなすつてお呉んなさいまし」

「金助！」

兵馬は金助の手首を取つてグツと引寄せました。

兵馬に強く手首を取られたものだから金助は狼狽へました。

「ナ、何をなさるんで」

「拙者を獨ヶ崎まで連れて行つて呉れ」

「そりや可けません」

「何故可かんのた」

「そりや可けません」

「神尾主膳殿に會ひたいのだ」

斯う云つて引き寄せた兵馬の言葉が餘りに鋭かつたから金助も激昂して、

「おやく、お前様は、私を如何しよう云うんで、おや、お前様は鈴木様の御次男様では無えのたな」

「金助、他に見覚えはないか」

「知らねえ」

「よく考へて見る」

「何だか知らねえけれど、放してお呉んなせえ、放さねえと爲になりませんが、それこそお怪我をなさいますぜ」

金助が振り切らうとするのを兵馬は地上へ難なく取つて押へました。

「金助」

「ア痛い、この野郎巫山戯やがつて、餓鬼の癖に」

「金助、痛いか」

「痛！」

「いつぞや、龍王へ行く途中、貴様が犬に追はれて木の上へ登つてゐたのを助けてやつた其の時の事を忘れたか」

「エ、エ」

「その時のが拙者じや、鈴木次男さやらでも何んでもない」

「ア、左様でございましたか、その時は、さうも飛んだお世話様になりました、さういふ事は存じませんものでございますから失禮を致しました、さうかお放しなすつて下さいまし痛くて堪らねえんでございますから」

「金助、お前は神尾家の容子をよく知つてゐるやうじや、拙者は其れをよく聞きたいのじや、包まず話して呉れ」

「へえ、知つてゐるだけの事はお話し申しますから、此處を放して載せてゐて下さいます」

「斯うしてゐるうちに話せ、神尾主膳は、獨ヶ崎に居られるか居られぬか、先づ其れを申せ」

「へえ、それは……獨ヶ崎におゐでの筈でございますが……」

「居るならば此れから直に拙者を案内致せ」

「何うも、さういふわけには参りませんで……」

「いや、貴様の口ぶりによれば、神尾家の内狀をよく知つてゐるらしい、隠し立をすれば斯うじや」

兵馬は上にのしかつて、金助をギウ／＼云はせませす

「ア、痛ッ、面の皮が摺り削けてしまひます、さうか御勘辨なすつて下さいまし」

「早く云つてしまへは、無事に放してやる、云はなければ命を取る」

「あ、申上げます、實は其神尾の殿様は獨ヶ崎におゐでなさるんでは無えのでございませす」

「それでは何處に居られるのじや」

「それがその……」

「眞直に言つてしまへ」

「ア、痛ッ、ではお前様に限つて申上げてしまひます、神尾の殿様は生捕られておしまひなすつたのでございませす、あの晩放火に來た奴等が神尾の殿様を生捕つて何處へか連れて行つてしまつたのでございませす」

「それは本當か」

「本當でございませすとも、けれども神尾の殿様ごもあるべきお方が、織多の爲に生捕にされたさあつては、御一統のお名前にも障りますから、それで、あゝして病氣お引籠りさいふ事になつてゐるんでございませす、それも生捕られたのは殿様ばかりではございませせん、あの御別宅におゐでなるお絹様さいふお方も、やつぱり織多に生捕られてしまつたんでございませす、その行先でございませすか、それはわかりませせん、いづれ山又山の奥の方へ連れて行かれたんでございませう」

金助の白狀は嘘か眞實か知らないが、神尾主膳が恨みの者の手によつて生捕られた事は信じ得べき根拠があるやうです。

けれども、それは兵馬が強いて突き留めたい事ではありません。神尾が果して机龍之助を隠匿つてゐるか否かといふ事を知りたいのが兵馬の唯一の望みであります。併し、不幸にして其れは金助が全く知らない事でした。兵馬の失望したのは、全く龍之助は神尾の屋敷にゐなかつたことを見るより外は仕方が無いからであります。少くともあの火事の晩に避難した者の中には机龍之助があつたと思像する事は出来ませんでした。

「さういふわけでございますからね、私共は實は金の蔓を失つたわけなんでございますよ。神尾の殿様を種無しにしたんじやこれから先が案じられるのでございましてね、山人中へ探しに行かうかと思つてゐるんでございます」

金助は漸く起してもらつて、こんな愚痴を云ひました。

「お前は今何處に奉公してゐるのだ」

「私でございますか、私は今は何處と云つて奉公してゐるわけでは無えのでございます、神尾の殿様のお出入で如何やら斯うして氣儘に飲食が出来てブラ／＼遊んでゐるのでございますよ、當分は、鷹岡ヶ崎のお下屋敷の片つ端をお借り申して彼處に住んでゐるのでございます」

「如何だ、その鷹岡ヶ崎の屋敷さやらへ、拙者を案内して呉れないか」

「そりや宜しうございますけれど、お前様は一體何方のお方で何の爲に、其んなに神尾様の事をお聞きになるんでございます」

「其んな事は尋ねなくとも宜い、今晚は拙者を其の鷹岡ヶ崎へ案内してお前の寢る處へ泊めて貰ひたい」

「そりや差支へはございませんがね、何だか氣味が悪いやうでございますね」

兵馬は斯うして金助を嚇かしながら先に立て、鷹岡ヶ崎の下屋敷へ案内させました。それから屋敷のうちを、やはり金助を嚇かして案内をさせて調べて見たけれど、神尾の家來が數人詰めてゐる

だけで、別に主人らしい者もありは見えられず、また自分の目ざしてゐる人が隠れてゐるらし、と思はれませんでした。この上は詮ない事と思つて兵馬は、最早金助と一緒に泊つて見る必要もないから、尚ほ金助を嚇して置いて一人だけで引き上げました。

して見れば机籠之助は既に此の甲府の土地にはゐないらしい、眼の不自由な彼が、それは、敏捷に處を變へ得る筈が無い。と云つて神尾が隱匿はなければ其外に、龍之助を世話をする者がありさは思はれない事があります。甲府にゐないとするは何處へ行つたらう、誰が介抱して何處へ連れて行つたかといふ事を考へ來ると、兵馬は例のお絹といふ女の事を思はないわけには行かないのであります。

「あー、あの女が世話をしたまた江戸へ落してやつたのたらう」

其れに違ひない、ハタと膝を打つたけれど、其のお絹といふ女も主膳と一緒に彼等の仲間に浚はれてしまつたとして見ればまた握まへ處が無くなつてしまふのであります。

兵馬は茫然としてその夜は長禪寺へ歸つたけれど、斯うなつて見ると此處にも安閑としては居られないのであります。

表面は病氣で引籠つてゐるといふ神尾主膳。内實は穢多に浚はれたといふ神尾主膳。其の内々の取沙汰には、甲州や相州の山奥には山窩といふもの、一種があつて、其の仲間に引渡された時は

生涯世間へ出ることは出来ないといふ事、主膳もお絹も其の山窩の者共の手に捉へられてゐるのたらうと云ふ説もあります。そのうちに神尾主膳は病氣保養お暇といふやうな事で、江戸へ歸るさいふ噂がありました。その前後に神尾に召し使はれたものは散々になつて、いつか知らぬうちに神尾家は全く甲府から没落してしまひ、郷獨ヶ崎の古屋敷も賣物に出てしまひました。駒井能登守が甲府を落ちた時は兎も角も明確に甲府を立退いたけれど神尾の家が甲府から消えたのは行燈の立消したやうなものであります。

駒井能登守の屋敷あそこには草がいや高く生え、神尾主膳の焼け跡ではまた煙が燻つてゐる時分、甲府の町へ入り込んだ二人の旅人が神尾の焼け跡を暫らく立つて見てゐたが、

「神尾の屋敷もあゝしたものだらうよ」若い方がいひました。

「あゝしたものだらう」やゝ年老つた方が答へました。

「駒井能登守の方は瀧の川で兎も角も落着きを確かめたが、神尾主膳は如何してゐるんだ」

「病氣でお暇を願つて江戸へ歸つたさいふ事だ」

「そいつは表面の事なんだ、内實は穢多の爲に生捕られたさいふ評判よ」

「それも裏の裏で、おれが思うには、また裏があると思ふんだ」

「して見ると神尾は江戸へも歸らず、穢多にも捉まらずに、無事に何處かに隠れてゐるさでも云うのか」

「さうよ彼奴は如何見ても、あの奴等に取捉まるやうな男でねえ、あの奴等にしたからつても、何ぼ何でもお組頭のお邸へ火を放つて大將を凌つて行くなつて、それほどの度胸があらうとは思はれねえじやねえか」

「成程、さういへば其んなものだが、それにしちやあ狂言の書き方が拙いな、拙くねえまでもあんまり綺麗じゃあねえ」

「ドノ道、あの大将も破れかぶれたから、トても上品な狂言を擇んじやあゐられねえ、そこで病氣を種につかつて見たり、穢多を玉にして見たり、さうやら此れで一時を切り抜いたものらしいよ」

「ふむ、さうするさ皆んな狂言の種かい」

「あの火事までが狂言ださ斯う呪んでるんだが、そんなものだ、あの大将、いよく尻が割れかかつて、如何にも斯うにも始末がつかねえから、それで奴等にかこつけて、自分で屋敷へ火を放けたんだ」

「成程」

「火を放つて罪は奴等へなすりつけて置いて、帳尻の合はねえ處は焼いてしまつた……おい、向ふから役人見たやうなのが来るぜ、氣をつけなくつちあ可けねえ」

道を外らして行く二人の旅人、その若い方はが、んりきらしく、やゝ年老つた方は七兵衛らしくあ

ります。

この二人は何の爲に、また甲府までやつて来たのたらう、こゝには駒井能登守もぬないし、神尾主膳もなくなつたし、宇津木兵馬も、机魁之助も、お松もお君も米友も、ムク犬も去つてしまつたのに、なほ何かの執着があつて来たものさ見なければなりません。

いつぞや、持ち出した安綱の刀それを何處ぞへ隠して置いたのを、取り出しに來たものかと思へば、さうでもなく、二人は其の足で直ぐに甲府を西へ突き抜けてしまひました。

それから例の早い足で瞬く間に甲信の國境まで來てしまひ、山口のお關所さいふのは別に手形入らずに通るこゝが出来て、信州の諏訪郡へ入りました。諏訪へ着いたら止まるかと思つて其處でも止まりません。一體、何處へ行くつもりたらうさいふことは其の日のうちにもわからず、その翌

日もわからず三日目になつて、漸く二人の姿を見出すこゝが出来ました、三日目に二人の姿を見出した處はもう甲州や信州ではなく其れか云つて碓氷峠からまた江戸の方へ廻り直したものでもなく、京都の町の真中へ現はれたことはやゝ飛び離れて居ります。

何時、如何して木曾を通つたか不破や逢坂の關を越えたのは何時頃であつたか其んな事は目にも留まらないうちに早や二人は京都の真中の六角堂あたりへ身ぶるひして到着しました。この二人が何の目的あつて京都まで伸したものは一向わかりません。上方の風雲は以前に見えた時よりも此の時分は一層險惡なものになつてゐました。例の近藤勇の新選組は此の時分が其の得意の絶

頂の時代でありました。十四代の將軍は長州再征の爲に京都へ上つてゐました。その中へが、りき七兵衛が面を出したさいふこゝは可なり物騒な事のやうだけれども、その物騒は天下の風雲に關するやうな物騒ではありません。

この二人が徳川へ加擔したから云つて、長州へ味方をしたから云つて、天下の大勢には幾らの影響もあるものでない事は、二人共よく知つてゐる筈であります。二人も亦決して尊王愛國の爲に京都へ面を出したのではありますまい。思ふに、甲州から關東へかけては二人の世界が漸く狭くなつて來るし、丁度幸に、公方様は上方へお出でになつてゐるし、江戸はお留守で上方が本場のやうな時勢になつてゐるから、一番、此方で、またいたづらを始めやうさいふ出來心に過ぎますまい。

「兄貴、上方には美しい女があるなあ、随分美しい女があるけれど齒ごたへのある女はぬえやうだ、口へ入れるさ溶けさうな女はかりで食つて旨さうな奴は見當らぬえや」

また宿へ着かない先に町の中でが、んりきが此んな事をいひながら町を通る京女の姿を見廻しました。

「この野郎、よく／＼食意地が張つてゐやがる」

七兵衛は斯う言つて苦笑ひをしました。

この二人が京都へ入り込んだのさ前後して甲州から江戸へ下るらしい宇津木兵馬の旅装を見ることになりました。

惠林寺へも暇乞ひをして、勝沼の富永屋へ着いた兵馬は別に一人の件をつれてみました。その件さいふのは、この間まで躑躅ヶ崎の神尾の古屋敷にゐた金助です。して見れば、金助も頼む神尾の殿様なるものはなくなるし、あの古屋敷も賣物に出るさいふわけで、甲府住居も覺束なくなつてゐた處へ、兵馬に説かれたものか、兵馬を説きつけたものか、此の人の件となつて江戸へ脱け出さうとする者らしくあります。

この俄ごしらへの主従が富永屋へ草鞋を脱いた時分に、富永屋には例のお角もゐませんでした。

机龍之助もゐませんでした。お銀様もムク犬も亦姿は見えません。

兵馬は翌朝、宿を出て笹子峠へかゝるご金助が、

「これから私も心を入れ替へて随分忠義を盡しますよ、お前様もこれからズン／＼御出世をなさいますし、まあ、私が考へるのにこれからは學問でなくちや可けませんな、お前様は腕前はお出来になつて結構でございます、學問の方も御如才はございますまいが、學問も、さうやら今までの四角な學問よりも、横の方へ讀んで行く毛唐の奴の方が、これから流行りさうでございますぜ、

今、鐵砲にして見た處が、さうも彼方の奴の方が素敵でございますからね、お前様もこれから學問をおやりになるならば毛唐の奴の方を精出しておやりなさいませ、あれが當世でございますぜ」
金助は、よくこんな巧者な話をしたりがります、さうして高慢面に忠告めいた事を云つて納まりたる人間であります。

「私なんぞは、もう駄目でございます、これでも小さい時分から學問は好きには好きでございます、した。けれども他の道樂も好きには好きでございました。親譲りの財産がこれでも相當にあるには有つたんでございますがね、皆んな下らなく遣つてしまひましたよ、これを云つて取り留まりが無く遣つてしまひましたよ、なかに、今考へても惜しいさも何さと思ひませんがね、可なりこれでも遊んだものでございますよ、だから江戸を食ひつめて甲州まで渡り歩いてゐるんでございます、江戸へ歸つたら、また病が出るたらうと思つて其れが心配でございますよ、でもまあ、昔と違つて今は丸つきり融通さいふものが利きませんからね、これで融通が利き出すと随分危ねえものでございます、危ねえと云つたつて、斯うなれば、痲疹も麻疹も濟んだやうなものでございませう、生命にかゝるやうな眞似は致しません、何しろ、まあ、これを御縁に江戸へ歸つたら落着きませうよ、末長く貴方様の御家來になつて忠義を盡して往生すれば、それが本望でございますよ、お江戸の土を踏んで疊の上で往生が出来ればそれで思ひ残すことはありません、貴方様は、さうか私の分までみつしり出世なすつてお呉んなさいまし、出世をなさるには、酒と女……」

これが一番毒でございますからな、この金助が見せしめてございますよ、あの神尾の殿様も見せしめてございますよ、と云つて駒井の殿様も、あんまりいゝお手本にはなりませんな、何方へ轉んでも樂は出来ません、やつぱり酒と女で器量相當に面白く渡つた方が得かも知れませんが、して見るご器量相當以上に道樂をして来た私などは此の世の世の仕合せ者でございます、下手に立身出世をして窮屈な思ひをするよりは金助は金助らしく道樂をしてゐた方が勝でございます、貴方様の前だが、私しやあ江戸へ着いたら早速に吉原へ行つて見てえと斯う思ひます」

金助は、べら／＼と兵馬の前も憚らず、こんな事を云ひました。これから心を入れ換へて忠義を盡しますといふ口の下から、もういゝ氣になつて吉原の話であります。

兵馬が其れを黙つて聞いてゐると、金助は自分の放蕩した時代の事を得意になつて喋り立てました。その揚句に、

「貴方様は吉原へお出でになつた事がございますか、大門をお潜りになつた事がございますか」

「また行つた事はない」

「では、一度お件を致しませう、ナニ一度は見てお置きにならなければ出世が出来ないといふ壁がございます」

「其んな壁は聞いた事がない」

「一度は見物にいらつしやいませ、私は江戸へ着きまして、この荷物を宿へ置いたら其の足で吉原へ行つて見るつもりでございます、こんな事を申上げるさいかにも馬鹿野郎のやうでございます、すけれど、正直の處、私共などは其れでございますよ、英雄豪傑になれるさいふわけのものはなし、また大した金持になれようさいふ見込もあるのじやありませんですから、いゝ加減の處で胡麻かしてしまふんでございますよ、何樂しみに此の世に永らへてゐるんでございませう、たゞ残念な事には小遣がありませんな、江戸へ着きましたら、少しばかり小遣に有りつくやうな仕事をお世話をなすつてお呉んなさいませ、まあ、私共の望みとしては其の位のものでございませぬえ」

兵馬は聞いてゐるうちに、この野郎が可なり下らない野郎であると思ひました。けれども此んな事を云ひ／＼、自分の心を引いたり目つきを見たりする舉動に多少油断のならない處もあるやうに思ひながら、

「金助、お前が、あの神尾主膳の在所をさへ確かめて呉れたら、相當のお禮はする」

「それは中々大役でございますねえ」

金助はわざ／＼と大仰に云ひ、

「併し、あの神尾の殿様は、さすがに苦勞をなすつたお方だけに届く處は中々届くんでございませぬから、あそここの處だけは感心でございますがね、あれがまあ苦勞人の取柄でございますな」

「苦勞したさいふのは如何いふ事なのた」

「如何してあの方は中々遊んだお方でございますよ」

「苦勞したさいふは遊んださいふ事か」

「さう貴方様のやうに生真面目に出られては御挨拶に困ります、苦勞にも幾通りもあるのでございます、日なしの催促で苦勞するの苦勞でございます、大八車を引つはつて苦勞するの苦勞でございますけれど、その苦勞とは違ひまして、酸いも甘いも噛み分けた苦勞でなくては苦勞とは申されないのでございますな」

「神尾主膳さいふ人は其んなによく物のわかる人か」

「それは人によつて随分悪く云ふ者もございませけれど、私なんぞに云はせるさ、よく分つた殿様でございますね、何かさいふを首をギウと取つたり首筋をグウと押へたりして白状しろなんぞさ、そんな野暮な事はなさらずに、金助これで一杯飲めなんか云つて下さるのが嬉しうございませぬ、あの呼吸は中々生若い世間知らずのお方にな出来ませぬ、やはり苦勞人でないござ……」

「成程」

兵馬は苦笑ひをしました。

「その位ですから錢は残りません、いつでも貧乏をしてゐらつしやるが、あゝいふお方に金を持たして上げたいものでございます、ほんごに金が生きるでございませけれど、使ひ道を知つてゐる處へは金さいふ奴は廻つて参りませぬ、因業な奴でございませぬえ」

六

その後暫らくあつて、染井の廳堂の屋敷と染井稻荷との間にある旗本の屋敷の久しく明いてゐたのに人の氣配がするやうです。

「あゝ、化物屋敷に買ひ手がついたな」

酒屋の御用聞の小僧なんぞが早くも氣がつかしました。

地所が廣く家が大きく、さうして人の住みてのない處は化物屋敷になる、化物が出て出なくても化物屋敷であります。さうしても化物が出なければ人間の口が寄つて集つて化物をこしらへてしまひます。

先代の殿様が、醜男であつたにも拘はらず、美しいお女中を口説いた處が、そのお女中には別に思ふ男があつて靡かない、それで殿様が残念がつて、あの土蔵の中で弄り殺しにしてしまつたさういふ、あんまり新しみのない筋書の化物が出されてから、久しいこと、漸く此の頃人の臭がするやうになつたらしいが、土地柄だけに、それほごに新たに移つて來た主人の好奇を注意して見ようといふ者ありません。

「小僧、酒屋の小僧」

「へえ」

閉ざしてある裏門の中から、御用聞の小僧が不意に呼び留められたものたかも仰天して、

「あ、お化……」

と云つて立ち竦んで終ひました。

「明日から酒を持つて来い、一升づゝ上等の奴を」

「へえ、畏まりました、毎度有難うございます」

御用聞の小僧は丸くなつて駆け出して駒込七軒町の主人の店まで一散に逃げて来ました。

「大變……化物が酒を飲みたいつてやがらあ」

唇の色まで變つてゐたから、番頭や朋輩の小僧共も氣味悪く思つたりヲカしく思つたりして、

「如何したんだ、如何したんだ」

「あの化物屋敷で、明日から一升づゝ上等のお酒の御用を仰付かりました」

「化物屋敷で御酒の御用」

次に廻るべき小僧が再び確めに行つた時に、ほど其の要領を得て歸りました。それは化物屋敷ではあるけれども酒の御用を云ひつけたは化物ではない、前に云ひつけた事が確であるやうに再び念を押しに行つた時も確に注文したに相違ないのであります。

然も最初に御用を云ひつけたのは大風な侍の云ひぶりであつたのに、二度目に確めに行つた時の

返事は、なまめかしい女の聲であつたといふことが、此の酒屋の者の話の種でありました。それから毎日一升づゝの酒が此の屋敷へ運はれたけれど、御用聞の小僧は、主人らしい人も奥様らしい人も、また家來衆、雇人達のやうな人の面をも、また見かけた事がありません。

「毎度有難うございます……」

と云つて酒を其處へ置くと、

「如何も御苦勞様、それから明日はお醬油に波の花を……」

さういふやうな注文が臺所の中から聞えて、其は女ではあるけれども、さつぱり面を見せないのが變だといへば變であります。賣掛も如何かと思つて其の月の半端の分を纏めて書付けにして出すと其の翌日は綺麗に拂つて呉れました。支拂の信用と共に化物の疑念は取れて、それより以上に此の屋敷を怪しがるものはありません。

この屋敷の一間で庭をながめながら、晩酌を試みてゐるのは化物でも何でもない正眞の神尾主膳であります。甲府を消えてなくなつた神尾主膳が此處へ来て浴衣がけで酒を飲んでゐる處を見れば、格別病氣であつたことも見えないうし、また穢多に浚はれてこゝへ流されたものとも見えません。それと面白いことは、神尾の前に晩酌のお相手をしてゐるのが勝沼の宿屋にゐた、もその兩國の女輕業の親方のお角である事であります。

「お角、お前は其んなに金が欲しいのか」

神尾は盃を置いてお角の面を見ました。

「御前、ほんごに、わたしは今となつてお金があつたらと思ひます、何をしようにもお金が無くては動きが取れません、全く水氣の切れたお魚のやうなものでございます」

「それは御同前だ」

と云つて神尾は苦笑ひをしました。

「殿様などは失禮ながらお金をお持たせ申せば、直ぐに使つておしまひなさるけれども、わたしなんぞは、左様ではございません、それを資本に一旗揚げて見よう云ふのでございますから、全く心掛が異ひますよ」

「全く頼もしい、お前に金を持たせれば、何か一仕事やるたらう、そこは拙者も見えてゐるけれど残念ながら金は無い、拙者は金がない上に世間に面向けも出来ん、浮かりするご命まで無くする」

「それでございますからね、わたしが少し資本を工面さへしますれば、殿様にも御不自由をおさせ申さないやうに上げて上げますし、その他、困つてゐるお方には相當に貸いでお上げ申すのですけれど」

「して其の資本の工面がつけは何をして見ようといふのぢや」

「それは、やはり太夫元をやつて見たうございます、今でも兩國のあの株を買ひ戻して看板を換へて花々しくやつて見る分には其んなに、骨の折れた事ではございません、輕業を土臺にして目

新しい處を二三枚買ひ込んで一やま當てるには今が時機なんでございます、その道にかけては、わたしも昔取つた杵柄で、今の人達がやるのを見てゐるご間緩くて腹が立つて堪まりません、この間も兩國へ行つて見ましたら、やつぱり昔のまゝの輕業や力持でお茶を濁してゐるものでございますから、今時、あんまり智慧の無い人達だと、ひさり齒きしりをして歸りました、わたしがやつてゐた時分には輕業や力持は、ほんの前藝にして置いて、眞打には人の思ひもつかないものを買ひ込んで、仲間をあつご云はせお客を煙に捲いて人氣を獨り占にしたものでございます、印度から黒ん坊の槍使ひを買ひ込んで、彼處で打ちました時などは、毎日／＼大入客止めで、大袈裟のやうですけれど、江戸中の人氣を吸ひ取つたやうな景氣でございました、そんな事で随分儲けもしましたけれど、使ひも使ひました、一つ當りさへすれば、皆様を五年や十年遊ばしてお置き申すほどのお金は何でもない事でございます、今となつて見るご、あの仕事を手放したのが惜しくて堪まりません、ほんのひよつごした意地で、只見たやうに人に株を譲り渡したのが此方の抜かりでございました、ナニ金さへあれば何時でも買ひ戻せると思つたのが、あんまり多寡を括り過ぎました」

お角が、もこの仕事に充分の自信と未練を持つての話を主膳は首を捻りながら聞いてゐたが、

「絶つて其の資本が欲しいならば、一つ其の秘策を授けてやらうか」

「お心あたりがございませぬなら是非伺ひたい物でございます」

「化物はゐるか、あの化物は」

と云つて主膳は荒れた庭の彼方に大きな土蔵の鉢巻のあたりの壊れた處を見上げました。

この二人が、可なり下腹に毛のない連中と見えるのに、この外にまた此の屋敷に化物がゐるのか知らん。

主膳は化物と云つて土蔵を見ながら、

「は、は、は」

と笑ひました。

「可けません」

お角は自分の口を袖で押へながら主膳を叱るやうに云ひました。

「聞えやせぬよ、大丈夫」

「御前が左様な事を仰しやるのはお悪うございます」

「もう云はん、併し、お前が云はせるやうに仕向けるから、つい口が辻つたのじや、悪い心持で云つたのではない」

と主膳は申譯のやうな前置をつけて、それから此んな事を云ひました。

「あれはお前も知つてゐるか如何か知らん、あの實家は素晴らしい物持で田地も金も喰るほどある、然も其の家の一人娘じや、あの娘の實家を説き立てさへすれば、少々の金を引出すのは何でも無

い事だ、お前、その氣があるなら一番やつて見たら如何じや、甲府から三里離れた有野村の藤原といへは直ぐわかる、其處へ行つて主人の伊太夫に會ひ、これくのわけでお嬢様をお連申したといへは其れこそ謝禮は望み次第じや、若し常人を連れて行くのが面倒ならばお前だけ行つて、お嬢様は只今これくの處に居りますと注進さへすれば宜い……併しあの娘を歸すと、拙者の足許が危なくなる、其處は豫め仕組んで置かないと」

「其んな事は出来ません、わたしは其れほどに計略をして迄お金を借りたいとは思ひません、よし借りられるものにしてしましても、もう二度と甲州の山の中なんぞへ入つて見ようといふ氣にはありませんから」

「いや、甲州の山が寶の山なのじや、全く以てあの女の實家といふものゝ富は測り知る事が出来ない程じや、惜しいものよ、あれをあのみゝ寝かして置くのは」

「心からでございますね、幾らおすゝめ申してもお家へお歸りなさるお心持になれないのでございいますから」

「家へは歸られない譯もあるが、あゝ選上ても恐れ入る、悪女の深情さはよく云つたものじや」
「わたしは、あれこそ何かの因縁だと思ひますね、たゞ惚れたさか睡れたさかかいただけの事ではありませんね」

「因縁かも知れん、この頃拙者もあの女の面を見ると、何だかゾクゾクと怖いやうな心持になる

「わい」

「あのお嬢様は、隨に御前を恨んでおゐてになります、御前とお面をお合はせになると、きつこ横を向いておしまひになりますけれど、御前のお後姿や、横面を御覽になつた時の眼付は別段でございませう、全く取り殺してしまひさうな怖い眼つきをなさるのは如何いふものでございませうか、わたしには合點が参りません」

「それは大きに、さう有りさうな事じゃ、随分恨まれて宜い筋がある、思へば此の屋敷は化物屋敷に違ひない、この神尾主膳とあの藤原の娘のお銀とが落ち合つて睨み合つてゐるのさへ空怖ろしい悪戯であるのに、業の盡きない机龍之助といふ盲目があれが難物じゃ、それにお前たてて生やさしい女ではあるまい、あのお絹殿……といふ女、あゝ、忌やになるゝ、悪因縁の寄り集まりだ、前世の仇なら宜いが此の世からの餓鬼畜生に落ちた敵同志が三すくみの體で一つ屋敷に睨み合つてゐるといふのは悪魔の悪戯のやうなものだ、酒が苦い」

斯う云つて神尾主膳の眼が怪しく輝きました。

神尾主膳の眼が怪しく輝いたのをお角は變たさと思ひました。併し、この女は主膳に怖るべき酒亂のあることを知つてはゐませんでした。主膳も亦、こゝへ來てから酒亂になるほどには酒を飲んでゐませんでした。

「化物屋敷なんて、そんな事がありますものか」

お角は、主膳の怪しい眼付を見ながら其の忌やかな言葉を打ち消します。

「拙者の住む處は、いつでも化物屋敷だ、鴈岡ヶ崎の古屋敷も可なり化物染みてゐた」

と云つてゐる時に、不意に裏手の車井戸がキリ／＼と鳴りました。その音を聞くと、神尾主膳が急に慄え上がりました。

「誰か井戸で水を汲んでるな」

「左様でございませうね」

「水を汲んじや可かんぞ云へ」

「それでも、御前」

「いや、水を汲んじや可かん、拙者はあの車井戸の音が嫌ひだ」

「大方、お嬢様が水を汲んでゐらつしやるのでございませう」

お角も車井戸で水を汲んでゐる者がある事を氣がついてゐました。車井戸の音が嫌ひたといふ神尾の心理状態を怪しまないわけには行かないが、これも酒の上での我儘が出たものと思つて、神尾の云ふ事を軽く受け流してゐます。

それにも拘はらず、裏の車井戸はキリ／＼と鳴つてゐます。キリキリと鳴つてはザ／＼と水を聞ける音がします。

「また、水を汲んでゐる奴がある、早く行つて差止めてしまへ」

「水を汲んで悪いのでございますか」

「水を汲んで悪いとは云はん、車井戸を鳴らしては可かんのじや」

「それでも、車を鳴らさずにあの井戸の水を汲むわけには参りますまい」

「拙者はあの井戸の音が嫌ひじや、今時分あれを聞くに堪らん、何も拙者の嫌ひな車井戸を、ワザあゝして手繰廻すには及はんじやないか」

「それは御前の御無理でございます、何か御用があるから其れで水をお汲みなさるんでございませう、御前をお嫌がらせ申す爲に水を汲んでゐらつしやるのではござんすまい」

「あれまた廢さんな、よし、拙者が行つて止めて来る」

神尾主膳は刀を提げて立ち上がりました。その心持も舉動も、酒の上を見るより外には、お角には解釋のしようがありません。

「まあ、お待ち遊ばせ」

お角は主膳を遮つて見たけれど主膳は聞き入れずに縁を下りて庭下駄を突かけました。お角は何もなく不安心だから其れについて庭へ下りました。

化物屋敷へ人が住むやうになつたけれども、此の庭まではまた手入が届いてみません。八重蓮の茂るに任せて、池も山も燈籠も植木も荒野原の中に佇んでゐるもの、やうです。裏手の井戸へ行かうとするらしい主膳の姿が其の雑草の中に隠れるのを、お角はあごを跟いて行くと、お角の姿

も其の雑草の中に隠れてしまふほどに萩や尾花が生ひ覆さつてゐます。

「誰じや、其處で水を汲んでゐるのは」

井戸端にゐる人は返事をしませんでした、主膳は焦れた聲で、

「其處で夜さり水を汲んで可かん、この井戸は化物屋敷の井戸で曰くのある井戸ぞ知つて汲むのか知らずに汲むのか」

斯う云はれたけれども井戸端では、やはり返事がありません。隨に人はゐるにはゐるのです。それも白い浴衣を着た人が少くとも一人はしやがんでゐることは誰の眼にもわかります。

「誰じや、其處で水を汲んでゐるのは」

執漣く繰返して井戸端へ寄つた神尾主膳醉眼を見張つて、

「お銀ごのではないか」

それはお銀様でありました。お銀様は鹽に向つて何かの洗濯をしてゐる處であります。先程から神尾が再三言葉かけたのが聞えない筈はありません。それに返答をしないのみか、斯うして摺寄つて來ても見向きもせませんでした。

「洗濯をなさるか、可愛い人へ心づくし」

主膳はお銀様の面を覗きました。お銀様は、その時にツイ立つてまた井戸繩へ手をかけるぞ、

神尾主膳は慌て、其れを押へ、

「はッ、はッ、はッ」
と聲高く笑ひました。その笑ひ聲を聞くさ、お銀様は井戸繩へ手をかけたまま、で凝と神尾主膳の面を睨めます。

「蹴鞠ヶ崎の古屋敷にこれと同じやうな井戸があつた、その井戸で、和女の好きな幸内とやらに、たんと水を吞ましてやつた事があるわい、それから以來、夕方に此の車井戸の軋る音を聞くさ、拙者は胸が悪くなつて堪まらぬ、この車井戸の音が癪にさはる」

お銀様の持つてゐる井戸繩を片手でもつて主膳は横の方から引たくりました。

「何をなさる」

お銀様は強い聲でありました。

「は、は、は」

神尾の笑ひ方は尋常の笑ひ方ではありません。その笑ひ方を聞くさお銀様はブルブルと身を慄はせ、

「幸内の敵」

思はず斯う云つて齒を噛むさ、

「ナニ、幸内の敵が如何した、多寡が馬を引張る雇人の命、この神尾が手にかけてやつたのを通分さ心得る、敵呼ははりが可笑しい、あッは、は、は」

「あ、口惜しい」

「何が口惜しい、成程、幸内は拙者の手にかけて亡き者にしてやつた、お前の好きな幸内は拙者の爲にならぬ故、亡き者にしたけれど、その代り、お前には別に好きな人を授けてやつた筈」

「あ、幸内が可愛相だ」

お銀様は火を吐くやうな息を吐き、神尾の手から井戸繩を奪ひ取つて力を極めて車井戸を軋らせました。

「汝れ！」

神尾主膳は再び其の井戸繩を奪ひ返さうとして、流しの板の上によろ／＼とよろめきます。それには頓着なく水を汲み上げたお銀様は今、流しの板から起き上がりさする神尾主膳の姿を見るさ、むら／＼と堪へられなくなつたさ見えて、

「エ、如何しようか」

汲み上げた水を釣瓶のまゝザブリと主膳の頭の上から浴びせてしまひました。

「やあ、慮外の振舞」

慌て、起き上がりさする處を、お銀様は傍にあつた手桶を取り上げて、中に残つてゐた水を柄杓と諸共に、疊みかけて主膳の頭の上から浴びせてしまひました。主膳さしても不意であつたらうし、お銀様さしても、我を忘れた亂暴な仕打であります。

「あゝ、重ねぐ」

主膳が漸く起き上がった時は刀を抜いてみました。その時に後から、

「御前、お危なうございます」

抱き留めたのはお角、お銀様は此の時、もう土蔵の中へ入つてしまひました。

お角に抱き留められた神尾主膳は例の酒亂が兆して荒れ出すかと思ふと、さうでなく、

「あはゝゝ、拙者が悪かつた」

と云つて、ぐんにやりと萎れたのは少しく意外で、お角が却て力抜けがしました。そこで極めて溫和しく一旦、抜いた刀をも鞘へ納めて、

「ツブ濡れた、いやはや」

主膳としては餘りに人の宜い態度で、土蔵の前へよろ／＼と歩いて行き、土蔵の戸前から中を覗き込んで、

「机氏、机氏」

と二聲ばかり呼びました。

土蔵の二階では、何かひそ／＼と話をしてゐたらしいのが、はたと止まつて眞暗でさうして靜かで、何とも返事はありません。

「こんな濕つばい處に、此のうんきに籠つてゐては堪るまい、ちと出て來さつしやい、只今一酌

をはじめた處、相手が無くて困つてゐるのじや」

「今、行く」

二階では帯を締直すやうな音がしました。

「拙者は水を浴びせられた、其れでこの通り五體びつしよりになつてしまつた、衣裳を替へて待つてゐるから直に出て來さつしやいよ、酒もあり肴もあり、月もそろ／＼上る筈じや」

主膳は斯う云ひ残して、またよろ／＼と元の座敷の方へ取つて返します。

程なく土蔵から下りて來た机龍之助は生平の帷子を着て、兩刀を差して、竹の杖をついて、案内

知つたらしい此の荒れ處を一人で歩いて行きました。

びつしよりになつた浴衣を着換へた神尾主膳も亦、同じやうに生平の漆紋で、前の座敷に盃を手にしながら待つてゐました。

「暑いな」

龍之助が云ふと、

「なか／＼蒸す」

主膳は答へながら龍之助の手を取つて座敷へ延いて坐らせ、

「先づ、一獻」

こゝで二人は水入らずの酒盛をはじめ。主膳の機嫌は全く直つて、調子よく龍之助に酌をして

やりながら、

「何か面白いことをして遊びたいものだな」と云ひました。

「左様、面白いことをして遊びたい」

龍之助も亦同じやうな事を云つて相槌を打ちます。二人が面白いこと、いふは、さちらも其の内容が全く不分明でありました。内容が不分明ながらに、二人共に何か気が飢ゑて、酒の外に然るべき刺戟を求めてゐるもの、やうであります。

「この屋敷内には女が三人ゐて男が二人」

神尾は謎のやうな事を云ひました。

それに返答もせず龍之助は酒を飲んでゐました。

「やれく、月が出たさうな」

成程、木の間から月の光りが洩れて庭へ射し込んで来るやうであります。團扇を鳴らしながら立つて柱へ片手を置き、退屈さうに、

「いゝ風が来る」

月の上の方を見てゐた神尾主膳が急に何か思ひついたやうに坐りかけて、

「机氏、机氏、ちと思ひついた事がある、耳寄りな話」

と云つて机龍之助の耳のあたりへ面をさしつけて、何事をか囁やいて笑ひ、

「さあ、これから直に出かけよう」

「宜しい」

何を思ひついたのか、二人は其の場で話が定まつたらしく、主膳の方は急にそわ／＼と焦き立ちました。

七

それから暫く経つと吉原の引手茶屋の相撲屋といふのへ二挺の駕籠が着いて、駕籠から出た時に、

「これはお珍らしい、神尾の御前」

と相撲屋の内儀が驚くのを、

「神尾ではない、内密々々」

と抑へて先に通つたのは、やはり神尾主膳でありました。

それに引つゞいて机龍之助が、手さぐりにして駕籠を出ようとする時、神尾は自分の眼を指さしながら、

「この、が悪い、手を引いてやつて呉れ」

「畏まりました」

主膳は先に立ち、龍之助は女に手を引かれて茶屋へ通りました。

「今時分、思ひ出したやうに神尾の御前がお出ましになるのは如何したものたらう、御前は甲府お勝手へお廻りになつたぞ聞いたが……」

表向は鄭重に迎へた此の茶屋の内儀が、二人を案内したあそで眉をひそめました。

丁度、この時分に水道尻の燈明の方から馬鹿な面をして行燈の数を数へながら歩いて来る一人の男がありました。それは宇津木兵馬に伴れられて甲州から江戸へ出た客の金助で、

「ちよッ、詰らねえな、俺達はあゝして茶屋から大見世へ送られる身分さいふわけじやあなし、岡場所か錢見世が關の山なんたけれど、それも此の頃の懐工合じや覺束ねえや、斯うして吉原の真中へ入り込んで景氣のいゝ處を見せつけられながら、たそや行燈の数を数へて歩くなんぞは我ながら、あんまり氣が利かな過ぎて涙が溢れらあ、何ぞか工面はつかねえものかな」

金助は此んな事を云ひながら、髪色屋がお捻りを貰うのを羨やんで見たり、新内語りが座敷へ呼び上げられるのを嫉んだり、たまにおいらんの通るのを見て口を開いたりしながら、笠鉢の間を泳いでゐましたが、

「おやく、ありやあ、酷かに見た事のあるお侍だ、俺の見た目に曇りは無え客だが、もう一べん見直し……」

二三間立ち戻つて、今箱提灯に送られて茶屋を出た二人連の武士體の跡を逐ひました。

「そおれ見る、間違ひつこなし見覚えのあるも道理、神尾の殿様があれが甲府で鳴らした神尾の殿様だ、もし……」

金助は後から呼び留めようさ咽喉まで聲を出して引込ませ。

「向うも身分があらつしやるから、浮かり言葉をかけて失敗つちやあ詰らねえ、一體、何處の店へお入りなさるんたか、心靜かに見届けて置いての上……あ天道人を殺さずさにはよく言つたものだ、金助が斯うして詰らなく泳いでゐるのを天が哀れと思召せはこそ、あゝしていゝ殿様を授けて下さる」

金助は雀躍をして喜びながら、駆出して行く途端、たそや行燈の下で文を讀んでゐた侍に打着かちうとする、

「無禮者」

「御免下さいまし」

危なく其れを避けて今度は天水桶に突き當らうとして、それも危なく身をかはし見え隠れに神尾主膳と覺しき人のあそを追つて行きました。

神尾主膳と机籠之助とが萬字屋の見世先へ送り込まれようとする時に、

「もし、殿様、鵜飼ヶ崎の御前」

金助が斯う云つて横の方から呼びかけたので神尾主膳が振り向きましました。

「金助……」

「へえ、金助でございます、殿様さうもお珍らしい處で、エ、エ、エ、」

「貴様も此方に來てゐるのか」

「へえ、流れ〜て、またお江戸の埃まになりました、殿様には相變らず御全盛で結構でゐらつしやいます」

「好い處で會つた、貴様も此の店に馴染があるのか」

「如何致しまして、こゝは私共の入る處ではございません、こんな處へ入りますと罰が當るさうでございます、私共には私共で身分相當な氣の置けない處があるんでございますけれど、生憎さうも」

「よし、好きな處で遊んで來い、さうして暇を見て此處へ話しに來るが宜い」

主膳は紙に包んで幾干かの金をやりました、金助は崩れるほど嬉しがつて、それを幾度か押し戴きました。

「これ〜、斯う來なくつちやあならねえのだ」

さいふ面をして、お禮の文句を繰返しながら、暇乞をして一先づ別れました。天水桶のあたりへ再びうろついて來て、今神尾主膳から貰つた紙包を開いて見ると、

「一兩！占めた」

と云つて通りがりの人を驚かせました。金助は一兩の金に有り附いて有頂天になつて喜びながら、一兩あれば、可なりの處で遊べるさ一時は大成金になつた心持で、何處で遊ぼうか此處で遊ぼうかと、足を空にして歩いてゐたが、急に、

「待て〜、運の向いて來る時にはトン〜拍子に向つて來るものだ、こゝで金の憂に有りついたのを、そのまゝ使つてしまへは一兩は一兩だ、これを手繰つて見ると裏表に利札がついてゐる奴を、今まで氣がつかなくつたのが我ながらオゾましい」

と云つて萬字屋の方を見ながらニヤリと笑ひました。この時金助の心持は、今までの小成金氣分の酔から、すつかり醒めてしまつて、一兩の金に隨喜するやうな心から解放されて、もつと遠大な計畫に一步を進める事に氣がついたらしくありました、さうなるさ四百の錢見世や二朱の小見世は金助の眼中に無くなつて其の面付も幾らか緊張して來ました。

「今、さる處で神尾の殿様に會つて一兩戴きました、さ斯う云へはあちらでも一兩下さいふ事はあるめえ、初會が一兩に裏を返せばまた一兩、こいつは、もう少し仕組を換へるさ大やまが當らねえものでも無かりさうた、何しろ、神尾の殿様にした處が世間の明るい體ではなし、神尾の殿様を見つけたら知らせて呉れと頼んだお方の宇津木兵馬て人は如何やら敵持かたもちのやうだから、こゝの間で手管をするさ甘い仕事が出来さうた、本所の相生町までは可なり大儀な道だけれども、慾さ二人づれでは、さして苦にもならねえのさ、幸こゝに一兩ある、これを崩すのは惜しいけれども、

大慾は無慾に似たりといふのは、つまり此處だ、これを張り込んで景氣よく相生町まで駕籠を飛ばせる事だ」

金助は、こゝでからり心持が變つて廊をあさし大門を飛び出して、景氣よい聲で辻駕籠を呼びます。

八

その晩、宇津木兵馬は不意金助助が尋ねて来たといふ案内で何事かと思ふと、

「夜分、こんなにおそく上つて済みません、いや、驚きましたね、またお休みにならず、ちやんと袴を着けて御勉強でございますか、恐入りました」

云はでもの空口を云つて跪まり、

「誠に穢かならぬ事が出来しましたから、それで取り敢へず御注進に参りました」

と云つて金助は、吉原で見た神尾主膳の事を遠廻しに話した上に、神尾から心づけを買つたことの暗示をして兵馬から若干の小遣に有ついた上に、焦き立つ兵馬を抑へて、わざと悠くり構へ込み、

「併し、宇津木様、さうお急ぎにならずとも宜しうございます、あの里へお入りになつたものが、宵に來て宵に歸るといふやうなのはたんとございませぬ、それよりか、宇津木様お忘れ物のない

やうに呉々も御用心をしてらつしやいまし」

「これで宜い、何も忘れ物は無い」

「左様でもございませうが、他へ参るのさ違ひまして、あの里へ参るんでございませぬから御用心の上に御用心が肝腎でございます、その御用心が足りませぬと、飛んだ恥を掻くやうな事があつたり、また見すゝ大事のものを取り逃がすやうな事が無いとも限りませぬ、あの里ばかりは別な世界でございますからな」

遠廻しに云ふけれども、矢張、その歸する處は同じやうな事であります。

「成程」

兵馬は、それを覺らないほかに迂闊ではありません。そこを金助が見て取つて、

「何しろ、先方様は大層へ茶屋からお上りになつたんでございませぬからね、此方も其のつもりで廿兩や卅兩が處は用意して参りませぬ……」

金助からさう云はれて兵馬はハタと當惑しました。

兵馬の懐中には其の當座の小遣として二三兩の金を持つてゐたばかりです。

「少くとも廿や卅の金」

と云はれて兵馬は、金助の態度を憎らしく圓々しいものたと思つたが、

「其れもさういふものか知らん、暫らく待つてゐてくれ」

何を考へたか、兵馬は此の一刻を急ぐ場合に、金助を一人其處へ殘して此の間を立ち去りました。

兵馬は老女の許しを得て、お松を廊下に呼び出して、

「お松どの、誠に申兼ねたが無心がある……」

廊下で立ちながら、苦しうに斯う云ひました。

「何でございます、兵馬さん」

お松は心配さうに兵馬の面を見ました。兵馬から折入つて此んな無心を云ひかけるやうな事は今までに無い事でありました。

「申し悪い事だけれども……」

兵馬は二度まで苦しうに前置をして、

「急にさし追つた入用が起つた故金子を少々用立て、貰ひたいが」

兵馬から苦しうに斯う云はれてお松は却て安心した容子であります。安心したのみならず兵馬から此んな無心を云ひかけられた事を却つて嬉しく思ふやうに見えました。

「わたしの持つてゐるだけで、御用に立ちますならば……」

「それが大金さいふ程ではないけれど、差當り少しばかり餘分に欲しいのじや、廿兩ほど」

「廿兩」

お松は繰返して、これも當惑の色が現れました。

「わたしの持つてゐるのが、今、十兩ほどありますけれど……」

「拙者は、僅かに二三兩しか持ち合せが無いので困つてゐる」

「如何ませうね、わたしのを差上げてまた大へんに足りないでございますね、困りました」

お松は折角の兵馬の無心を充分に満足させる事の出来ぬのを一方ならず悶えるやうに見えます。

「兎も角、それだけを借用したい、あさは亦何さか工夫するから……」

「お待ちなさいませ」

お松は自分の部屋へ取つて返して紙入れに入れたまゝを兵馬の手に渡しながら、

「あさは、あの、わたしから老女様へお願ひ申して見ませうか」

「御老女へ……それは可かん」

兵馬は頭を振りました。

「でも、急な御入用ならば、わたしから御老女様へお願ひして見るのが、一番近道と思ひます、快く聞き届けて下さるに違ひありません」

「併し、この金の入用な筋道は御老女様には話せない」

「一體、何に御入用なんでしょう」

「實はそなたの前で云ふのも恥しいが、これから吉原まで行かねはなりません」

「まあ、吉原へ、あんな處へ、これから」

と云つてお松も、さすがに呆れたけれど、兵馬の吉原へ行くといふ意味は、そんなわけのものではないことを知つてゐます。さうして兎も角も、相當の大金を持つて、あの里へ行かうといふのは何か重い用向のあることを察しないわけには行きません。それを自分に打ち開けられて見ると、どうしてもお松として兵馬が望むだけの金を拵へてやらねば濟まない心持になりました。

「如何いふわけか存じませんが、あなた様が、今時分、あの里までお出かけにならなければならぬのは、定めて大事の御用と存じます、お金のお入用も一層大事の事と思ひますから、吉原といふやうな事や、あなた様の事なんぞは少しも知らないやうにして、御老女様から融通を願つて参ります、他からお借り申すのと違つて、御老女様からお借り申す分には恥にも外聞にもなりは致しませぬ」

「それが困るのじや、吉原へ用向といふのは外ではない、そなたの以前仕へてゐた神尾主膳殿が彼處にゐるといふことをたつた今知らせて呉れた人がある」

「まあ、神尾の殿様が」

「知らせて来て呉れたもの、話には、神尾殿は茶屋から上つて大籠とやらに遊んでゐるさうな、其處へ近づくには、自分も、やはり茶屋から案内を受けて其の大籠とやらへ上つて見ねばならぬといふ事じや、その時の用意に……二三十兩の金を用意して行かぬと恥を掻く事もあるさやう、恥を掻くのは厭はぬとして、萬一、それが爲に時機を失するやうな事になつては残念」

「左様でございましたか、左様でございませうとも、さういふ場合ならば、充分の御用意をなすつていらつしやらなければ、殿方のお面にかゝるやうな事もございませう、宜しうございます、わたしから、御老女様にお願ひ申しますから」

「それは堅くお断り申す、事情は如何あらうとも吉原へ行く爲に、金を借りたといふことが後でわかると、御老女にも面目ない」

「兵馬さん、少しお待ち下さいませ、お手間は取らせませぬ、わたし、宜い事を考へつきましたから」

お松は斯う云つて兵馬を引き留めて置きながら、廊下をバタ／＼と驅込んだ處はお君の部屋でありました。

お松は宜い處へ氣がつかしました。お君の部屋へ飛んで行つて手短に、金の融通を頼むとお君は何の苦もなく甘雨を用立て、呉れました。

兩女の分を合せて三十兩を借受けた宇津木兵馬は其れを懐中して、いざさばかりに金助を促して此の家を立ち出で飛ぶが如くに吉原へ駕籠を向けました。

「お松さん」

そのあとで、お君は何か心が、りがありさうにお松を呼び、

「左様いふわけならば心配する事は無いやうだけれど、何んたかわたしは氣にかゝつてなりませ

ぬ、御老女様には申上げては可けないと兵馬さんは仰有つたさうですけれど、南條様や五十嵐様に御相談申上げて御容子を見に行つて戴いたらさうでせう」
お君から勧められて、お松も其の氣になりました。

九

鐘撞堂新道に菓を食ふ大道藝人の一群。其の仲間が自ら稱して道樂寺の本山といふ木賃宿。其處に集まつた面々は御免の勸化であり、繩衣裳の乞食芝居であり、阿房陀羅經であり、假壁使ひであり、さつこい〜であり、猫八であり、砂文字であり、鎌倉節の飴賣であり、一人相撲であり、籠拔であり、デロン左衛門であり、丹波の國から生捕りました荒熊であり、唐人飴のホニホロであり、幕場の幽霊であり、淡島の大明神であり、さうしてまた宇治山田の米友であります。齒力や鎌倉節や籠拔が修行を済まして本山へ歸つた夕方、阿房陀羅經や假壁使ひの面々は山を下つて市中へ布教に出かけやうとする黄昏。

「おい〜、藝州廣島の太守、四十二萬六千石、淺野様のお下屋敷へ、俺等のお件をして行く者は無えかな」

籠拔の伊八は商賣道具の長さが六尺、口が一尺餘りの籠を右の小腕にかゝへ込んで誰を當こもなく斯う云ひ出すと、

「藝州廣島の太守四十二萬六千石、有難え、そいつは俺等が行かう」

横になつて寝てゐた丹波の國から生捕りました荒熊が答へると、

「お前じやあ駄目だ」

籠拔の伊八は言下に荒熊を忌避しました。

凡そ大道藝人のうちでも、丹波の國から生捕りました荒熊の如き無藝で殺風景なものはない。自分の身體を墨で塗り、荒縄で鉢巻をし、細い竹の棒を手につけて、人の店頭に立ち、

「ヘエ、丹波の國から生捕りました荒熊でございます、一つ鳴いてお目にかける、ブル〜〜」これが、荒熊の持つてゐる藝當の總てであります。他の藝人は、それ〜相當の苦心と思ひ付き、熟練さを持つて相當の稼ぎをするものに、此の荒熊の藝と云つては其れより外に何物もないから籠拔の伊八が一瞶に及ばず、これを忌避したのは無理もなく忌避された當人も其れで済ましてゐる。

「籠さん、あつしじやあ如何でグス」

これから夜の稼ぎに出かけやうとした阿房陀羅經の寸鏡坊が荒熊に代つて口をかけて見ると、

「おや〜お前も、四十二萬六千石といふ格じやあ無え、黙つておいで」

「おや〜」

阿房陀羅經は苦笑ひして出て行つてしまひます。

「何しろ、藝州廣島の太守、四十二萬六千石淺野様のお下屋敷から、俺等の藝をお名さして御最
 賈た、籠拔一枚でも曲が無えと思ふから、誰か此の仲間にお相伴をさせてやりてえと思ふんたが、
 いづれを見ても道樂寺育ちた、荒熊で可けず、阿房陀羅で可けず、さうか云つて細衣裳の親方
 や、假壁使ひの兄貴でも納まらねえ、何さか工夫はあるめえかな」
 籠拔の伊八はなほ其處にゴロゴロしてゐる藝人共を物色すると、
 「其れじゃあ「紅かん」さんにお頼もうしたら宜からう」

「成程」

「紅かん」さん云ひ出すものがあつて籠拔の伊八が成程と首を捻つたが、

「紅かんさんなら申分は無えけれど、紅かんさんは聞いて呉れめえよ、あの人はこちこそ等仲間の
 お大名だから」

「其りやさうたらう、そんなら新参の友兄いを一つ引張り出したら如何た」

「成程、友兄いは思ひつきたな」

籠拔の伊八は、漸く得心が行つたさ見えて急に元氣づいて、

「友兄い、友兄いはあねえか」

大きな聲をして後を顧みながら、呼んで見たが返事がありません。

「友兄い、籠さんが呼んでるよ」

集まつた者共が、聲を合せて呼んで見たけれども、友兄なる者は返事もしなければ姿も現しま
 せん。蓋し其の友兄なるものは宇治山田の米友の事です。

呼んで見たけれども、友兄なるものは返事もせず、姿も見せないし、探して見ても此の家に居
 り合せない事がわかりました。それから後、籠拔の伊八は、誰を伴れて行くことになつたか、晝
 の疲れて寢込んでしまつたのに、米友は此處へ歸つて来た模様はありません。

藝州廣島の太守も、四十二萬六千石も、肝腎の當人がゐないでは、お流れになるより外はありま
 せんでした。併し、米友は只今此處に居合せないまでも昨今この道樂寺に身を寄せてゐることた
 けは疑ひのない事の證據があります。

米友は此處へ身を寄せて、それ等の藝人の仲間に加はつて、獨得の藝當をして折々、人通りの多
 い大道に面を曝すことを、たしかに見届けた者があります。

論より證據、今宵カンテラを燈して淺草の廣小路で梯子藝をやつてゐる其の人が宇治山田の米友
 であります。

「さあ、退いてゐる、もう一遍やつて見せるからな、危ねえ、子供は遠くへ去つてる、怪我あす
 るさ宜くねえからな、さあ、これから宙乗をはじめ」

紺の股引腹掛を着た米友は例の眼をグリ／＼させて自分のまはりを取り捲いてゐる群集を見廻し
 高さ一丈二尺程ある漆塗りの梯子を大地へ押出して其れに片手をかけました。

「些さばかりこざわつて置くがね、俺等は此の通り片足が少し悪いんだ、左の足は自由が利くけさな、右の足は人並で無えんだ、其の左の一本で此の梯子へ上つて藝當をやつて見せようぞ云うんだから骨が折れらあ」

「アイ、左様でござい」

見物の中から此んな事を云ひ出すものがあつたから、見物人一同が哄々吹き出しました。吹き出さなないのは當人の米友一人だけです。

「冗戯じゃねえ、藝をやる時はこれでも俺等は眞剣なんだ、冷やかしたり、交ぜつ返したりするさ藝に實が入らねえや、藝に實が入らなければ、見てゐる奴も面白くねえし、やつてゐる當人も面白くねえや、何方も面白くねえものを遣つて見せるも詰らねえから、俺等は宙乗をやめて歸るよ」

「成程、理窟だ、怒らねえでやつて呉んな、此方も眞剣で見えてゐるんだからな、それ見さん、お志たよ」

見物の中から斯う云つて、バラリと錢を投げ込んだものがありました。

「有難え」

と云つて米友は足許に轉がつてゐた蕎麥の俵に柄をすけたやうなものを、左の手で拾ひ取る。見れば、其の投げた錢を俵に其の中へ受け入れて、右の手ではやつぱり梯子を押へてゐます。投錢

を受ける事は本來この男の本藝であるが、今はホンの前藝にやつて見せた手際、その鮮かさが、見物の氣に入つたものらしく、

「兄さん、怒つちや可けねえ、それしつかり頼むよ」

つゞいてバラリと投げる錢の音、

「有難え……」

受俵を、そつと動かす。詭へたやうに錢は其の中へザラリと落ちます。

「此方の方でも御用と仰有る」

またバラリと投げる錢の音、それから引つゞいて、前後左右から面白がつて、バラリと投げる錢を、一つ處にゐて、片手では梯子を押へながら、右に左に手を延ばし、前や後ろへ身を反して、受俵一つへザラリと受け入れて、その一錢をも土地の上へ落すことではありません。

「旨えもんだな、あれだけで一人前の藝當だ」

面白がつて投げる見物と、面白がつて米友の錢受を見て、やんやと云つてゐる見物、その中に米友は、

「もう宜い、この位ありやあ、もう澤山だから投げるのを廢して呉れ……」

錢受の俵を下に置いた米友は、片手で押へてゐた梯子の兩側を兩の手で持ち換へて、

「キ」

と氣合をかけるご、高さが一丈二尺あつて、棧が十段ある梯子の頂上まで、一息に上つてしまひました。見物が、

「アッ」

と云つてゐる間に、その一番上の棧へ打ち跨がつて尻を下ろした米友は、巧に調子を取りながら眼を圓くして見物を見下ろしました。

こゝで後見^{うしろみ}が居れば、太夫さんの爲に面白をかくし藝當の前觸をして看客を嬉しがらせるたらうけれど、米友には、さつぱり後見が附いてみません。太夫自身にも、見物を嬉しがらせるやうなチャリが云へないから、たゞ眼を圓くして見下ろしてゐるばかりです。

一番上の棧へ踏み跨がつた米友は、そこで巧に中心を取つてはゐるが、それを下から見ると可なり危なかしいもので、大風に吹かれるやうに右と左へ、ゆら／＼と揺れます。暫らく中心を取つてゐた米友は、

「エッ」

と二度目の氣合で、兩の手に今まで腰をかけてゐた棧の板をしつかと握り、其の上體を右へ捻ると見れば、筋斗^{ゆづり}打つて其の身體は棧の上へ縦一文字に舞上りました。

「アッ」

見物が舌を捲いてゐる間、米友は其の格好で梯子の中心を取りました。やはり借しいと思はれる

のは折角のキツカケに後見も入らなければ三味線太鼓も鳴らない事であります。暫らく其の恰好をつづけた米友は、

「エッ」

と氣合を抜くと、また元の形に逆戻りして棧の板に腰を下ろして崩れかゝる梯子の中心を、いゝ加減の處あたりで、バツと食ひ止めて元へ戻して納まりました。

「アッ」

其れで見物は手に汗を握る。取り敢ずこれだけの前藝は米友が「エッ」と云へば、見物が「アッ」といふだけの景物でありました。やはり、輕口を叩く後見が此の邊へ入らなければ、太夫さんも遣りにくからうし、合の手^{あて}の間が抜けるたらうといふ心配は無用の心配で、米友は米友らしい一人藝で、客を唸らす^{うな}ことが出来るものと認められます。

「さあ、これから、其方の方へ歩き出すよ、歩きながら、また些さばかり藝當をして見せる、弘法大師は東山の犬の字……」

自分で口上を述べました。今度は別段に氣合をかけないで、棧をつかまへた手と腰に力を入れると其の呼吸で、梯子は米友を乗せたままヒョコ／＼と動き出して、取り巻いた群衆の近くへのり出します。

「逃げなくつても宜い、お前達の頭の上へアッ倒すやうなブキな眞似はしねえから、安心して見

てゐるが、俺等の方は心配は無えが、後の方と前横を氣をつけて呉んな、江戸には巾着切といふ奴がある、人が井戸の中へ入つてゐる時でも何でも關あずに、人の物を盗るやうな火事場泥棒がある」

米友は斯う云つて、見物にスリと泥棒を警戒したつもりやうでしたが、井戸の中へ入つてゐる時に火事場泥棒が出るさいつた米友の論理は、見物にはよく呑み込めませんでした。たしか梯子藝をしてゐるから、それで火事場泥棒を持ち出したのたうさ察したものなさは、血のめぐりの宜い方でありました。大部分は其の口上なんぞに頓着なくこれからまた梯子の上の一番に取りかゝらうとする米友の姿を片唾を呑んで見上げました。

米友の梯子乗の藝當は大道藝としては珍らしいものであります。通りかゝるものは立ち留まり、立ち留まつたものは引つけられて、そのあたりは人の山を築きました。この後彼が如何いふ藝當をするかを片唾を呑んでながめてゐた時分に群集の一角が動揺めいて、

「お通りた、お通りた」

東橋の方から一隊の大名の行列が此方へ向いてやつて來るのであります。

「それ、お通りた、お通りた」

と云つて早く氣のついたものは動揺めきましたけれども、前の方に米友の梯子藝に見惚れてゐた者は氣がつきませんでした。

通りかゝつたのは大名のうちでも大きな大名の行列らしくあります。お供揃ひは凡そ三百人もあると見受けられます。御駕籠脇は黒臘の大小さした揃ひの侍が高端折に福草履を、九尺隔に提げたお小人の箱提灯が兩側五六十、鬼灯を棒へさしたやうに、一寸一分の上り下りもなく、靡々として練つて來ました。

この大名行列の爲に、あわてゝ道を避けた人は、遠くの方からいろ／＼と噂をはじめ。

「御定紋は、たしかに抱茗荷のやうでございましたね、抱茗荷ならば鍋島様でございます、佐賀の鍋島様、三十五萬七千石の鍋島様のお通りた」

と云ふ者がありました。

「いゝえ、抱茗荷じやござんせん、たしかに揚羽の蝶でございます。揚羽の蝶だから私は、これは備前岡山で三十一萬五千二百石池田信濃守様の御同勢たご、斯う思うんでございます」

一方からは此んな申立をするものがある。

「ナニ、さうではござんせん、たしかに抱茗荷、肥前の佐賀で、三十五萬七千石、鍋島様の御人數に違ひはございません」

「いゝえ、揚羽でございますましたよ、備前の岡山で三十一萬五千二百石……」

今まで、それさば氣がつかないであつて、不意に此の同勢を引受けた人、殊に屋臺店の商人なさは狼狽して避ける處を失ふ様でありました。この場合に邪魔になるのは、米友を中心として梯子

藝に夢中になつてゐる見物の一かたまりであります。

「叱」

先棒が叱つて見たけれど、その一かたまりを崩すには可なりの時がかゝります。後の方は氣がついても前の方は全く知らないであります。尋常ならば、強いて其の一かたまりを崩すことなくして通行にさしつかへない筈であつたのを、其のお供先は如何いふつもりか米友を圍んだ一かたまりの中へ、突つ込んで來ました。

「おやく、お通りだ」

はじめて氣のついた連甲が、驚いて逃げ出したのを、梯子の上で米友は凝まながめてゐたが何とも云ひません。遠慮して藝を中止してこのお通りなるものをお通し申して、其れから再び藝を初めるのかと思ふと、さうでもありません。

「さあ、これから梯子抜さいふのをやつて見せる……」

「控へろ」

大名のお通りには頓着なく、米友が梯子抜の藝當に取りかゝらうとする時にお供先の侍が、疋癩玉を破裂させたやうな聲で、見物は、はつこ臆をつぶしました。

大名のお供先は米友を中心として見物の一かたまりと思ふやうに崩れないのが、餘程癩に觸つた見え、物をも云はず其れを蹴散らしたから、見物のあわて方は非常なものであります。

可哀相に、其のあたりに夜店を出してゐた、こ屋は、此のあふりを食つて、煮立てゝゐた汁を焼きかけてゐた餅を載せた屋臺を引繰り返されてしまひます、沸騰つてゐる、この鍋は宙に飛んで、其れが煙花の落ちて來たやうに亭主の頭から混亂した見物の頭上に落ちて來ましたから、それを被つたものは大火傷をして、

「アッ」

と云ひながら頭や顔を押へて苦しがつて轉がり廻りました。

前の方の連中は、喧嘩でも起つたのか知らざ振り返つて見ると、

「あッ、お通りだ」

喧嘩ならば頼まれなくても彌次に飛び出して拳を振り廻す連中が、大名の行列と氣がついて、悄氣返つて逃げ出しました。

梯子に跨つて最前から、この容子を見てゐた米友は、キリ／＼と齒を噛み鳴らして、丸い眼を据ゑて、狼藉を働く侍——いくら人集りがあるに云つたからとて、遠慮すれば、その外を通れない道では無いのに、斯うして人間を蹴散らし、踏倒して通る大名行列といふ奴の我儘と、その我儘を助けるお供の侍共の狼藉を見るに口惜しさに五體が慄へました。

一體、此の頃の米友は、殿様とか大名とかいふ者を心の底から憎み出してゐるのであります。殿様とあがめられ、大名と立てられる奴等、其の先祖が、ドレだけ國の爲に盡し、人の爲に働いた

か知らないが、今の多くの殿様といふ奴は薄馬鹿である、その薄馬鹿を守り立て、そのお扶持を載いて土農工商の上にあると自慢する武士といふ奴等が癩にさはつてゐるのであります。米友の眼には一人の殿様とやらが歩くのに、二百人も三百人も、大の男が其のまはりに食付いて歩かねはならぬ事の理由がわからないのであります。その上に斯うして折角、市民が面白く見物をしたり、遊樂をしたりしてゐる最中を、大手を振つて押し通り、押しが利かないと、この通り亂暴狼藉を働いて突破する、その我儘が通ることの理由もわからないのであります。そのみならず、此の我儘と亂暴狼藉を加へられながら、平生は人混で足を踏まれてさへも命がけで争ふほどの彌次馬が、意氣地なくも、それお通りた、鍋島様だ、三十五萬石だ、池田様だ、三十一萬石だ云つて恐れ入つてしまふことが分らないのであります。

い、この鍋を覆へされて面や小鬢に夥しく火傷をしながら苦しみ悶えてゐる光景を見た時に米友の堪忍袋が一時に張り切れました。

「馬鹿にしてやがら」

梯子の上から一足に飛び下りました、飛び下りるご共に、人の頭を渡つて行つて、拳を固めて手あたりの近い處の侍の頭を續げさまに三ツはかりガンと撲りました。

「手向ひするか、無禮者」

其の侍が膽をつぶした時分には、米友はつゞいて二人三人目位の侍の頭を片つ端から、ボカク

と撲つて歩きました。その舉動の敏捷な事。

アツと云ふ間に、物の十人も、つゞけてお供先の侍を撲つた時に此の大々名の行列は、

「狼藉者、お供先を要撃する賊がある」

と聞いた時は米友の姿はもう見えません。

水瓜を並べて置いて其中を見つゝつて撲つたつもりで米友は、少しばかり溜飲を下けて、行列の崩れたのを後に、今度は群衆の足許を潜つて元の處へ走り込むと、その梯子を傾にして肩にかけ、錢受の糸を腰に差し、

「態あ見やがれ」

と云つて、一散に其の場を走せ出しました。

「あれだ、あれだ、あれが行列へ無禮を加へた奴だ、狼藉者を取押へる」

後から米友を追ひかけて来るものがあるやうです。

「何方が無禮で、何方が狼藉なんだ、取押へるも出来が、い、や」

米友はせ、ら笑ひながら、それでも取押へられては話らないと思つて一散に逃げました。彌次馬といふ者は變なもので、今、鍋島様やら池田様やらのお通りへ無禮を加へたものがあつて、それが逃げ出したと聞くと、纏まつて米友を目あてに追蒐けて来るらしいのであります。それが爲に竹屋の渡しの方へ逃げようと思つてゐた米友は傳法院の前に逃げ込んで其の扉に突き當りまし

た。彌次馬はワイ／＼云つてあさから追ひかけて来るもの、やうです。

其處で米友は突き當つた傳法院の塀へ肩に引かけてゐた梯子をかけてスル／＼と上りました。米友が傳法院の塀へ上り終つた時分に彌次馬が其の塀の下へ押しかけて来てワイ／＼と云つて噪きます。

塀へ上るに米友は、其の梯子を上からグツと引上げて、また肩にかけて塀の上をトットと駆出しました。

「それ其方へ行つた、此方へ来た」

彌次馬は誰に頼まれて何の爲に米友を追ひかけて来たのたかわかりません。

米友は追ひかける彌次馬を尻目にかけて、塀の上をトットと渡つて歩いたが、やがて塀から蛇骨長屋の屋根の上へ飛びつりました。長屋の屋根の下のは驚いて外へ飛び出して彌次馬と一緒になつて騒ぐ時分には米友は其處から飛び下りて淡島様の方へ一散に走つて行きます。

そこで彌次馬に彌次馬が重なつて来るに、米友を追ひかける事の理由がいよくわからなくなつてしまひました。たゞ追蒐けるが爲に追蒐ける人聞が雲のやうに米友のあさを慕つて来るのであります。

「何でございます」

「泥棒でございませうよ」

「何の泥棒でございます」

「梯子を持つてゐるから半箇の泥棒でございませうよ」

さいふのはまた出来のよい方でありました。この非常の場合に於ても、梯子を抱へて走るさいふのは、米友が商賣道具を大切に心がけ、それから證據を残しては後日の爲に悪いさいふ用心の外の、これを持つてゐることが逃げるのに却て都合がよいからであります。

追はれて行き詰まつた時は、其の行詰まつた塀なり軒なりへ其れを倒しかけてスル／＼と上つて行きます。彌次馬が追ひついた時分には上から其れを引き上げて裏へ飛んで下りたり横へ走つたりします。斯うして米友は淡島様から淺草寺の奥山へ逃げ込み、奥山から裏の田圃へ抜けました。田圃へ来て見ると、もう追蒐ける人もあさが絶えたやうであります。

さの道、本所の鐘撞堂へ歸るべき身であるけれども、遠廻りをして歸らねばならぬと思つて、四方を見廻して突立つてゐました。米友はまた此んな處へ来た事は無いから其處で暫らく方向を考へて立つてゐました。

田圃の真中に立つて米友は此處で梯子の必要が無くなつて見ると、さう處分するか、それは心配するほどのものはなく、無難作に梯子の一端に手をかけるに其れを二つに折つてしまひました。それは本来折れるやうに出来てゐる梯子で、二つに折つたのをまた四つに裂きました。何でもない事で斯うして米友の梯子は折變みが出来るやうになつてゐる、四つに裂んでしまつた後に、拵

は桁、棧は棧で取り外して、それを一まきめにして懐中から麻の袋を取り出して、それで包んで脊中へ無難作に投げかけました。物事は他で見るほど心配になるものではなく如何するかを見て

みた梯子の問題は、米友の一存で手もなく片づけてしまひました。その疊梯子を脊中に存負つた米友は、手拭を出して煩悶りをして、尻を引からけてスタクスタ田圃道を歩き出しました。

こゝで地の理を見ると、右手は畑、左は田圃になつてゐました。右の方は畑を越して武家屋敷から町家につゞいてゐるものらしく、左の方を見ると、其處に一廓の人家があつて、あたりの淋しいのに其處ばかりは晝のやうにかゞやいてゐるのを認めます。

「おい、駕籠屋」

後から呼びかけたものがあります。

「駕籠屋」

米友は振り返ると、二三人づれの侍らしくあります。

「やあ、駕籠屋ではなかつたか」

米友の姿を見て行き過ぎてしまひました。米友は自分が駕籠屋に間違へられたと思つて怪訝な面をして、それをやり過ごしてしまふ。

「もし、旦那、吉原までお伴を致しやせう、大門まで御奮發なせえまし戻りてございやす、

其の聲は駕籠屋であります。前には駕籠屋と間違へられて、今度は駕籠屋から呼び留められました。

「おやく、子供か、お客様じやあ無えんた」

駕籠屋は斯う云つて米友を通り抜いてしまひました。

此處を何れとも知らず、わざとウロウロ歩いてゐた米友、今の駕籠屋の間違つて動めた言葉によつて、

「あ、さうか、あれは吉原だな」

と感づきました。吉原の名は、さすがに米友も國にゐる時分から聞いてゐない事はない。幸道草を食つて行くには、あの吉原を一見物して来るに越した事はないと、こゝで米友は、その明りのする一廓を目あてにして進んで行きました。

十

宇津木兵馬は萬字樓の東雲の部屋に東雲を相手にして碁を打つてゐました。

兵馬の此處へ来た目的は此の花魁を相手に碁を打つことではありません。萬事は金助の取計らひであります。

脚尾主膳は同じ家の唐歌といふ遊女の部屋に納まつて、太夫と禿を侍らせて、朱い羅字の長い

煙管で煙草を吹かしてゐるさ慌しく、

「白妙さんのお客様が御急病であらつしやいます」

「ナニ、藤原が急病」

神尾主膳は、其の急報を聽いて煙管を投げ捨て、立ち上りました。新造を先に立て、白妙の部屋へ駆けつけて、

「藤原、如何した」

神尾は人を掻きのけて中へ入つて見るに、夜具の上に俯伏しに倒れてゐるのは胤龍之助であります。さうして蒲團の敷布の上には夥しい血汐のあとがありました。

神尾は、それを見るに、あゝ、此の男は此處で自殺したのかと思ひました。

「これ、氣を確かに持て」

近寄つて其の脊に手をかけた時に、それは決して自殺したものでないことを知りました。そこに迷つてゐる夥しい血汐はその鼻口から吐いたものであつて、刃を己の身に當て、切つて出したものでないことは直にわかりました。

「うむ、神尾殿」

「病氣か、苦しいか」

龍之助の横面を見るに、死人のやうに蒼ざめてゐました。

「水を飲まして呉れ」

「うむ、水か、そら、水を飲め、確かりと氣を持たなくては可かん」

「いや、もう大丈夫」

龍之助は落着いたらしいが、神尾は焦立つて、

「これ、貴様達は何をしてゐるのだ、早く醫者を呼ばんか、醫者を呼べ」

「醫者は宣しい、醫者を呼ぶには及はない」

と苦しい中から龍之助は醫者を呼ぶことを断ります。

「併し……」

「醫者は要らぬ、たゞ静かな處で暫らく休ませてもらひたい、誰も來ない處へ入れて置いて呉れさへすれば、やがて癒る」

龍之助の望む通り静かな一室へうつされ、醫者も固く断るから、強いて呼ぶこともしませんでした。花魁も禿も誰も來ない中に、ゆつくりと休みたいといふ事であつたから、これも其の意に任せました。

部屋のを差圖して、龍之助を介抱させた神尾主膳は、自分の部屋へ引き返したが、浮かぬ面色であります。親の敵呼ははりをする者が來てゐるさ云つて、自分に不快の思ひをさせた金助の告口さといひ、此の場の急報さといひ、何さなく不安の思が満ちて、部屋へ歸つても四邊が白けてなり

ません。已むなく酒を煽りはじめました。多く酒を飲めは酒亂に落ちることを知つて居りながら、何さなしに酒を飲みたくなりました。

「白妙も一座へ招いて、藝者を呼んで、もう一騒ぎしよう、そして今夜は程よく切り上げて拙者は歸る」

酒が進むと主膳は陽氣に一騒ぎしたくなりました。

兵馬と東雲の第二局目の碁は危ない處で兵馬が五目の勝となりました。その時分に、

「白妙さんの部屋で心中」

さいふ噂が此處まで傳はつて來る。

「心中、まあ忌な」

と云つて東雲は眉をひそめました。

「心中ではございません、白妙さんのお客様が御急病なのでございます」

そこへ新造が報告に來て呉れたから、東雲の胸も鎮まりました。

「今度は勝負でございますね、もうお一手合せお願ひ致しますせう」

東雲は惜しい處で負けたのが思ひきれないやうであります。

兵馬は、それどころでは無い。碁のお相手は、もう御免を蒙りたいのであります。けれども東雲はいよいよ熱くなつて、

「何卒、もう一石」

東雲は兵馬の心持も知らないで戦ひを挑むから兵馬も詮方なしに、

「今度は負ける」

已むを得ず碁笥の蓋を取りました。

この時に、萬字樓の表通が遽に噪がしい人聲であります。第三局の碁を打ちはじめようとした兵馬も、東雲も新造も其の噪がしいので驚きました。新造が立つて表の障子を細目に明けて、樓上から見下ろしてハタと縮切り、

「茶袋が参りましたよ、茶袋が」

「おや、歩兵さんがお出でになつたの、まあ悪い時に」

と云つて東雲の美しい眉根に再び雲がかかりました。

「茶袋とは何だ」

兵馬が新造にたづねると、

「歩兵さんの事でございます」

「あ、この頃、公儀で募つた歩兵の事か、あの仲間には亂暴者が多いさうじや」

「さうも困ります、あの歩兵さん達は弱い者苛めで困ります、わたくし共の方や、芝居町の者は皆んな弱らされてしまひます」

兵馬は往來に面する處の障子を開いて見下ろすと成程可なり酔つてゐるらしい一隊の茶袋が、この萬字樓の店前に群がつてゐる様子であります。様子を聞いてゐると、如何やら此の樓へ直接談判をして、この一隊が登樓しようとする。店では何か言葉を設けて其れを謝絶しようとするものらしく聞えます。

「我々共を何ぞ心得る、神田三崎町土屋殿の邸に陣を置く歩兵隊じや、外に客があるなら斷つて仕舞へ、部屋が無ければ行燈部屋でも苦しくない」

「如何致しまして」

茶袋は執念く談じつける、店の者は其れを謝絶るに困じてゐるらしくあります。

十一

宇治山田の米友が吉原へ入り込んだのは丁度此の時分の事であります。

米友は頬冠りをして、例の梯子くづしを脊中に背負つて、跛足を引きく大門を潜りました。土手の茶屋で腹はこしらへて來てゐるし、懐には、さきほど淺草廣小路で集めた錢が充分に入れてあるから、さのみ貧しいといふわけではありません。

米友が吉原の大門を潜つたのは申すまでもなく、今宵が初めてであります、其の見るもの聞くものが、異様な刺戟を與へ、その刺戟がまた一々米友流の驚異となり咏歎となり憤慨となるのはま

た申すまでもない事であります。米友が眼を圓くして、進んで行くさ、ふと自分の前を尖つた編笠を被つて肩に手拭をかけて、襟に小提灯をつるした三人一組の讀賣が通ります。

「エ、これは此度世にも珍らしき京都は三條小橋繩手池田屋の騒動」

「おや、地田屋騒動つて何でせう」

「稻荷町に池田屋といふ呉服屋さんがあつてよ」

「呉服屋さん、その呉服屋さんが如何したの」

「如何したんですか、繩付になつたんでせう」

「縛られてしまつたの」

「左様でせう、繩で縛られたと云つてゐるじやありませんか」

「エ、これは此度、世にも珍らしき京都は三條小橋繩手の池田屋騒動……」

「稻荷町の呉服屋さんじやありませんよ、京都三條と云つてゐるじやありませんか」

「さうですね、三條小橋繩手といふ處なんでせう、繩付では無かつたのね」

「京都の池田屋さんと云ふのでせう、京都の騒動を如何して此處迄賣りに來るんでせうね」

「如何してせう、きつと其の池田屋さんに悪い番頭があつてお駒さんのやうな綺麗なお嬢さんがあつて、それから騒動が起つたといつたやうな筋なんでせう」

「わたしも、左様思つてよ、お駒さんは可哀相ね」

「ほんまにお駒さんは可哀相よ、いふに云はれぬ譯あつて夫親しの咎人とがにんと死し恥ぢ曝ばくす身の因果、不
びんと思し一片の御回向願ひ上げまする、世上の娘御様方はこの駒を見せしめと親の許さぬ徒ら
なま必ずく遊はすな……」

「ようく」

「買つて見ませうか」

「エ、新撰組の隊長で鬼と呼ばれた近藤勇が京都は三條小橋繩手の池田屋へ斬込んで長曾根入
道興里虎徹の一刀を揮ひ三十餘人を右と左に斬つて落した前代未聞の大騒動、池田屋の頼末が詳
しくわかる」

「おやく、お駒さんじゃありませんよ、京都へ鬼が出て三十人も人を食つたんですさ」

「これく、讀賣」

「へえく」

「一枚呉れ」

「はい、有難うございます」

覆面した浪士體の二人連の侍が、讀賣を呼び留めて其の一枚を買ひました。

「エ、これはこの度、京都は三條小橋繩手池田屋の騒動、新撰組の隊長で鬼と呼ばれた近藤勇
が、京都は三條小橋繩手の池田屋へ斬り込んで、長曾根入道興里虎徹の一刀を揮ひ三十餘人を右

と左に斬つて落した前代未聞の大騒動、池田屋騒動の頼末が委しくわかる……」

「は、あ、こりや手紙のうつした、通常の讀賣とは違つて、手紙そのまゝを摺つたものじゃ、手
紙といふのは近藤勇が、池田屋騒動の頼末を父の周齋に送つた手紙じゃ、こりや却て面白い」

浪士體の二人は却て其の手紙の摺物を喜びました。
折角、買はうと思つた娘達は、鬼たの人を食つたのといふ事で怖氣が立つて、手を引いてしまひ
ました。

それを聞いてゐた米友の好奇心は、可なり右の讀賣の能書で刺戟されました。米友は新撰組たの
近藤勇たのといふことは、よく知つてはゐませんでした。併し、この時代に於て、到る處で相當
の噂になるほどの事が、丸つきり米友の耳に入らないといふ筈もありません。近藤勇といふ人は
人を斬ることが名人たといふ評判も耳にしなかりませんでした。それを今こゝで、

京都は三條小橋繩手の池田屋へ切り込んで長曾根入道興里虎徹の一刀を揮ひ三十餘人を右と左
に切つて落した前代未聞の大騒動」

とこんなに誇張されて見ると、米友も亦武藝の人であります。一枚買つて見ようと思つた時に、
右の浪士體の二人に先を越されてしまひました。

「おい、お武士さん」

今、讀賣を買つた浪士體の男を米友が呼びかける。

「何だ」

「その池田屋騒動の讀賣といふ奴を呼んで聞かしてお呉んなさいな」

「ナニ、これと呼んで聞かして呉れさ云ふのか」

子供かと思はれは子供ではなし、炭薪の御用聞でもあるかと思はれは、さうでも無かりさうだし、豆絞りの頬かぶりをしたまゝで人に物を乞うとは大膽なやうな無邪氣なやうな米友を、二人は、しはらく熟視して、

「これが聞きたいか、よし讀んで聞かせてやらう」

それから水道尻の秋葉山の常燈明の下の腰掛に二人の浪士體の男は腰をかけて、米友はそれから少し離れた處に崩し梯子を尻を仰ろして踏まつてゐました。

京都お手薄さ心配致し居候折柄、長州藩士等追々入京致し都に近々放火砲發の手筈に事定まり、其處に乘じ朝廷を本國へ奪ひたく候手筈、豫て治定致し候處、兼ねて局中も右等の次第之れ有るべきやと、人を用ひ問者三人差出置き、五日早朝怪しきもの一人召捕篤と取調候處、豈圖らんや右徒黨一味の者故、それより最早時日を移し難く、速かに御守護職所司代にこの旨御届申上げ候處、速かにお手配に相成、その夜五ツ時と相觸れ候處、すべて御人數御繰出延引に相成り移り候間局中手勢のものはかりにて、右徒黨の者三條小橋繩手に二箇屯いたし居候處へ、二分に別れ、夜、四ツ時頃打入候處、一ヶ所は一人も居り申さず、一ヶ所は多勢潜伏いたし居、

兼て覺悟の徒黨のやから手向ひ、戦闘一時餘の間に御座候……

「成程」

この二人の浪士も亦、米友並に何か、わざ／＼時間を潰す目的の爲に此處へ入り込んだものさしと思はれません。さうでなければ、幾ら物好きだからと云つて、米友を相手に斯うして摺物を讀んで聞かせる筈がありません。

……折悪く局中病人多く、僅々三十人、二ヶ所の屯所に分れ、一ヶ所、土方歳三を頭として遣はし、人數多く候處、其方には居り合ひ申さず下拙僅々人數引連出で、出口を固めさせ、打入候もの、拙者初め沖田、永倉、藤堂、伴周平、右五人に御座候、兼ねて徒黨の多勢を相手に火花を散らして一時餘の間、戦闘に及び候處、永倉新八郎の刀は折れ、沖田總司の帽子折れ藤堂平助の刀は刃切出さゝらの如く、伴周平は槍を斬折られ、下拙刀は虎徹故にや無事に御座候……

「成程」

「實にこれまで度々戦ひ候へ共二合と戦ひ候者は稀に覺え候へ共、今度の敵多勢さは申しながら孰も萬夫不當の勇士、誠に危き命を助かり申候、先づは御安心下さるべく候……」

「成程」

米友は頻りに感心して、近藤勇が遙々京都から江戸にゐる養父周齋の許へ宛てたといふ手紙のうつしを讀んでもらつて聞いてしまいました。

その途端に江戸町一丁目あたりでつゞけ様に二發の鐵砲が起りました。米友も驚いたが二人の浪士も驚いて立ち上がります。

この時分萬字樓の前で十餘人の茶袋が皆んな刀を抜いて振り廻し多數の彌次馬が、それを遠巻にして一人残さずやつ、けるご叫んで居る光景は可なり物すさまじいものでありました。

その最中取巻いた群衆の後で不意に二發の鐵砲が響きました。それと共に哄の聲を上げて一隊の歩兵が——何處に隠れてゐたものか知らん刀を抜いて群衆の後から無二無三に切り込んで來たので吉原の廓内が戦場になりました。

酒宴半しゅえんはんに此の騒ぎを聞いた神尾主膳は、さすがに安からぬ事に思ひました。

そこへ、主人が飛んで來て、

「御覽の通りの始末でございます、お客様に萬一のお怪我がありましたは、申譯のない事でございます、何卒、この間にお引取り下さいますやう、御案内を申上まする、あれは歩兵さん方でございます、はじめに参りましたのが土屋様のお邸の歩兵さん、あとから鐵砲を持つて参りましたのが西丸の歩兵さん、今にも此へ押し上つて参るごさ、思ひます、お腰の物、お懐中物錢らや次へ持參致させました。

「小頼にさはる奴共」

と憤つたけれども彼等を相手に争ふ氣にもなれません。

斯うして避難させられたお客は神尾主膳だけではなく、この夜、萬字樓に登つた客は、一々斯うして避難させられました。

相當に身分のあるものもあり、相當に勇氣のあるものもあつたらうけれど、誰一人残つて歩兵を相手に取るご頑張るものはありません。すゝめられるまゝに、裏手や非常口から避難してしまひました。宇津木兵馬も無論その一人です。

「金助」

非常口で兵馬は金助を見かけたから呼びかけるぞ。

「宇津木様、驚きましたな」

「神尾殿は如何した」

「へえ、神尾の殿様は、もう茶屋へお引取になつてしまひました」

「其の茶屋へ案内しろ」

「宜しうございます」

金助は兵馬の先に立つて走る。

「茶屋は何處だ」

「たしか此の邊でございましたつけ」

「ナニ、たしか此の邊、貴様は其の茶屋を知らんのか」

「茶屋から送られて参りますまでの途中でお目にかゝつたんですから……」

「では、確とした事は譚らんのじやな」

「何しろ此の通りの騒ぎでございますから顛倒してしまいました」

「此の騒ぎは今初まつた事だ、神尾殿を見逃さぬやう、用心を頼んで置いたのは其れより前の事
じや」

「それは、お頼まれ申したに違ひございませぬ、今、お知らせ申さうか、もう少し後にした方が都合がよいたらうかと思つてゐるうちに此の騒ぎでございましたから」

「金助、貴様は頼み甲斐の無い奴だ」

「さういふ譯ではございませぬけれど、何しろ此の通りの騒ぎで……」

「何の爲に拙者を此處まで連れて來たのぢや」

「如何も誠に相済みません」

「金助、惚けるな」

襟を取つてトンと突くと、金助は一たまりも無く引くり返つてしまいました。

「まあ、お待ちなすつて下さいまし、亂暴をなすつちや可けません、そんな亂暴をなさると茶袋
ご一所にされてしまひますから」

やつと起上がったのを兵馬が再びトンと突くと金助はまた引くり返つてしまいました。

「宜うございます、それでは、わたくしが内密で其の茶屋をお知らせ致します、お知らせ致します
すけれども、決して私が申上げたやうに神尾の殿様へ仰有つては困ります、私が恨まれますから
な、さあ御案内を致しませう、御案内は致しますけれども多分其の茶屋だらうと思ひますので……
其處におゐでなさるか如何か、若し、其處におゐでなさらなくても私のせいではございませんか
ら、それで御勘辨なすつて下さいまし」

「早く行け」

「あれでございます、慥あの相摸屋さいふのからお出でになつたやうでございます、あれを尋ね
て御覽なさいまし、私は此の天水桶の蔭に隠れて居りますから、さうぞ私の名前はお出しなさら
ないやうに、密さ當つて見てお呉んなさいまし」

「神尾殿の許まで参ります」

兵馬は相摸屋の店先へ軽く挨拶して其の足で座敷へ上がらうとする。

「はい、お二階にお休みでございます」

自分が軽く出たから茶屋の者も軽く受けました。兵馬は早速二階へ上がり屏風の中に軒を掻いて
寝てゐる人の枕許へ近寄つて、

「神尾様、主膳殿」

「う、う、うむ」

呼び醒まされた主膳は、唸るやうなことを言つて寢返りを打ちました。

「神尾主膳様」

兵馬は主膳の枕許の刀架かたがけから刀を取つて其の鑢音つばきを高く鳴らすと、

「やつ、誰じゃ」

「お目ざめでござりましたか」

「其許は誰でござる」

「拙者は番町の片柳と申すものでござりまする、ちと貴方様にお尋ね申したい儀がござりまして推參致しました」

「何、拙者に何を尋ねたいのじゃ、其許を拙者は知らぬ」

「親しくお目にかゝるは初めてながら、拙者は貴方様が甲府に御在勤の折、外まながらお目にかゝりました」

「ナニ、拙者が甲府にゐた時分、其許は甲府から何しに此の拙者を尋ねて来た」

神尾主膳は不安らしく起き直つて兵馬の面まをながめました。

「私のお尋ね申したいのは、貴方様ではござりませぬ、貴方様にお聞き申したい人がござりまして」

「ナニ、拙者に聞きたい人、それは誰じゃ、誰を尋ねたいのじゃ」

「若しや、貴方様は机龍之助といふものを御存知ではござりませぬか」

「知らぬ、左様な人は一向知らぬ」

「御存知ない、それは眞實でござりますか、眞實其の者の行方を御存知ではござりませぬか」

「全く知らぬ、知つては居らぬ」

「あの躰獨ヶ崎の古屋敷はあれは貴方様のお邸ではござりませぬか」

「躰獨ヶ崎が拙者の何であらうと、其許に尋ねられる由はない、一體、君は誰に斷つて此處へ来た」

「ひそりで參上致しました」

「斷り無しに來たか、無禮千萬な、歸らつしやい」

主膳は起き直つて刀架から刀を取りました。

「先づお控へ下されませ」

「黙れ、物を尋ねるなら尋ねるやうにして來るがよい、人の寢込へ踏込んで、吟味するやうな尋ねぶり、小癪千萬な」

主膳は甚だしく怒りました。

「そのお腹立を覺悟で参りました、貴方様が如何あつても其の机龍之助の行方を御存知ないさ仰有るならば、私にも覺悟がござりまする」

「ナニ覺悟がある、覺悟とは如何しようといふのじや、小俵の分際で」

「町奉行へ訴へて出まする」

「町奉行へ何を訴へる、誰を町奉行へ訴へるのじや」

「貴方様のお屋敷へ火を放けた穢多非人の在所を訴へて出ようと思ひまする」

「何、穢多が如何した」

神尾主膳は齒をギリ／＼と噛んで兵馬の面を睨めました。

「憎い奴、憎い奴」

神尾主膳は怒心頭に發したやうでしたけれども、その間に多少の不安もあるやうです。

「机龍之助の行方をさへお知らせ下さるならば、其の外には、貴方様に御用のない私でござりまする」

「知らん、右様な者は知らんぞ申すに」

主膳は堪へ兼ねて兵馬の隙をうかゞひ、刀の柄に手をかけました。抜打に斬つて捨てようとするものらしい。

「其れは却てお爲になりませぬ」

兵馬は主膳の手を押へました。

「放せ」

「左様にお手荒な事をなさるご場所柄でござりまする、貴方様のお名前が出まする」
「憎い奴だ」

主膳は悶撞くけれども兵馬に押へられた刀を抜くことが出来ません。

「あの机龍之助ぞ申す者は、拙者の爲には敵でござりまする、あの者を討ちたいが爲に多年、拙者は苦心致して居るものでござりまする、如何ぞ武士のお情を以て、其の行方をお知らせ下さりませ」

「知らんぞ申すに諱い奴じや」

「これほどに申上げても」

「知らぬ者は知らぬ、近頃、珍らしいほど執念深い奴じや、其の分で置くではないけれど、拙者も此の頃は世を忍ぶ身じや、今日は許して置く、歸らつしやい」

「いゝえ、斯うして參上致しました以上はお尋ね申した御返事をお聞き申すまでは此の座を立ちませぬ」

と云ひながら兵馬は右の腕を伸べて、外側から大きく神尾主膳の首を抱きました。

「汝れ、この主膳を……手込にしようとするな」

「お返事をお聞き申すまでは、斯うして居りまする」

兵馬は外から大きく神尾主膳の首を抱くと共に、力を極めて其れを自分の胸へ押しつけました。

「アツ、苦しい」

主膳は苦しがつて眼を刺きました。苦しがつたけれども、これは金助とは違ひます。たごへ、今の自分が世を忍ぶ身であらうとも、かりにも神尾主膳ほどのものを捉へて腕力で強迫して物を尋ねやうとは言語道断の無禮であるといふ怒りは、その苦しさを一緒に混み上げて來ました。況んや年も行かぬ小童、見も知らぬ推參者に斯かる無禮を加へられては、死んでも弱い音は吹けないのが神尾としての身上であります。それだから苦しいのを堪へて、ヂタバタしながら兵馬を押し退けて、刀を抜かうとするのであります。

「さあ、お聞かせ下さるか、それとも」

斯うなつた以上は、兵馬も亦力づくであります。力を緩めると、

「無禮な奴、斬つて捨てる」

主膳は直ぐに突け込んで刃上がつて刀を抜かうとしますから、兵馬は再び其の首を自らの胸へいよく強く押しつけるより外に仕方ありません。

「アツ、苦しツ、放せ」

「お聞かせ下さらぬ以上は、決してお放し申しませぬ」

「放せツ、苦しい、死ぬ」

「放しませぬ」

「く……」

「さあ、お聞かせ下さい」

「く、死……」

ほごんご死者狂ひで主膳が悶極くから、兵馬は其れに應じて満身の力を籠めて抱き締ると、やがて、急に主膳の力が抜けました、力が抜けたかと思ふと、ガツクリと其の首を兵馬の胸へ垂れてしまひました。

「や、息が絶えた、死なれたか」

兵馬も我ながら驚きました。知らず／＼自分は神尾主膳を絞め殺してしまつたものらしくあります。

十二

この場にも意外の變事が起りましたけれど、是を外の騒ぎに比べると、物の數ではありません。萬字樓の前を中心にして、吉原の廓内で市街戦が起つてゐるやうなものであります。

秋葉山の大灯籠の下で、近藤勇の手紙の摺物を讀んでゐた二人の浪士と、それを聞いてゐた宇治山田の米友の三人は、今の鐵砲の音を聞いて、すわさはかりに駆けつけて見たけれど、騒動の中心たる萬字樓のあたりは近づく事が出来ません。

吉原廓の内外の彌次馬といふ彌次馬は数を盡して集まつてしまつたから、後れ走せになつた三人は、如何しても其の人垣を破ることが出来ません。

「困つたな」

「若しや宇津木の身から起つた變事ではないか」

「如何とも判らん、兎も角、この人混を押し破つて見よう」

浪士は人垣を無理に破つて闖入しようとする時に、

「ワアッ——」

と崩れかゝる群集。その勢は大波を返すやうだから、進まうとして却て押し返される外はないのであります。

「困つた、何さかして近づいて容子を見たいものだ」

「宜い工夫は無いかな」

二人の浪士は、事を好んで此の騒動を見たのみでなく騒動の中に何か自分に利害關係のある人がゐて、その身の上が心配で堪まらないらしくあります。

この時に宇治山田の米友は路次の軒の下へ蹲まつて梯子を組立て、しまひました。

何時の間にか組立てた梯子を軒へ立てかけた米友は、

「お武家さん、一つこの屋根へ登つて見物しようぢやねえか」

「こりや梯子、時に取つての見付物だ」

この場合に於て恰好な見付物であり機敏な思ひ付でもあると感心し、二人の浪士はお辭儀なしに、梯子を登り出し垂木のあたりへ手をかけて上手に屋根の上へ芻上がりしました。

二人を先に登らせて置いた米友は、二人よりは一層身輕に屋根の上へ芻上がつてしまひ、梯子に結んで置いた繩を引くと梯子は芻橋のやうに芻上がります。廊の屋根から三階の屋根へ、もう一度梯子をかけて三人はまた相つゞいて二階の屋根へ飛び上がりました。

「は、あ、萬字樓の前に集つてゐる、あれが歩兵隊の者共だな」

「恥を知らぬ奴等ぢや、こんな處へ来て、騒がして見た處で何の功名になる」

「もごよりあれは、歩兵隊は云ふけれど、市井の無頼漢、幕府も人を集めるに困難してあんなのを集めて、西洋式の兵隊をこしらへようといふのだから窮したものぢや」

「最前、鐵砲の音がしたやうだけれど、あの連中、鐵砲を持つて來たものと見えるな」

「吉原の廓内で鐵砲を打放すといふのは恐らく前代未聞たらう」

「其にしても宇津木は一體、何處の何といふ店にゐるのじや」

「其れが譯らないから困つたのよ、あの娘達に頼まれて此處まで出向いて來たけれど、娘達はたゞ吉原さばかりで、吉原の何町の何といふ家へ行つたのたか一向知らん、吉原ささへ云へば其れで譯るやうに思ふてゐる處が娘達の身上だ」

「若し宇津木の身に間違でもあられては折角、頼まれて来た我々が娘達に對して面目がない」
 「さうかと云つて此の場合、迷子の迷子の宇津木兵馬やあいと呼ははつて歩くわけにも行かない」
 「困つたものじゃ」

二人の浪士は、下の光景を見ながら頻りに困惑してゐるやうであります。
 この二人の浪士は、さきに宇津木兵馬と共に甲府の牢を破つて出た南條と十嵐とであります。
 この時、下界の此の混乱の中へ何處を如何して紛れ込んだか一挺の駕籠がかつき込まれたのは奇
 觀さ何とも云ひやうがありません。さては如何なる勇士侠客が仲裁に來たのかと、さしもの群
 衆が暫らく鳴を静めて見つめてゐるうちに、

「ナーンたお醫者さんか」

と呆れ返つたのは其れが普通の駕籠ではなく切棒の駕籠であつたからです。本來吉原へは醫者の
 外は乗物では入れない事になつてゐます。

「おい、道庵がやつて來たぞ、萬字樓に病人を一人取り残して置いたから、先生、せひ一つ行つ
 て助けて來てお呉んなさいと頼まれたから、道庵が向いて來たんだ、馬鹿にするない」

切棒の駕籠即ちあんぼつの中で頻りに怒鳴つてゐるのが道庵先生です。

酔つはらつてゐることは云ひながら先生飛んでもない所へ出て來たものた見物の中にはハラ／＼
 する者が多かつたけれど、先生自身も酔つてゐるし、駕籠昇にもした、か飲ませてゐるものたか

ら、見てゐられない恰好をして此の騒ぎの中へよた／＼と昇き込んだものです。

それが忽ち茶袋に取つ、かまつたのは當り前です。取捉まつて引出されるまで道庵は氣焔を揚げ
 てゐましたけれど茶袋は取り上げる限りではない、引き出して天水桶の水をぶつかけて弄り殺し
 にも仕兼ねまじき處を、屋根の上にながめてゐた宇治山田の米友が、

「あつ、ありや長者町の先生だ」

斯う云つて叫び出す例の梯子を小脇に掻い込んで二階の屋根の上からヒラリと身を躍らして其
 の騒動の中心へ飛び下りたものです。

「やい／＼、そりや、おれの恩のある先生だ、その先生に指でもさす承知しねえぞ」

人の頭の上を刎ね越して行つた宇治山田の米友が、例の二間梯子を小車のやうに振り廻して茶袋
 を二三名振り飛ばしたから騒ぎがまた湧き上がりました。

宇治山田の米友は今やこの梯子一挺を武器に有ゆる茶袋を向うに廻して大捲鬨にうつらうとする
 時、遽かに群衆の一角が崩れました。

「酒井様のお見廻りがお出でになつた、それ御巡邏隊がお出になつた」

それを見るに、茶袋の歩兵隊の中から、又しても鐵砲の音が聞え、樓々店々の疊を擔ぎ出して、
 それを往來の真中へ積んで櫓を築くの有様でありました。併し乍ら此の騒動はやがて靜まつて酒

井の巡邏隊が、萬字樓の前を固めた時分には、もう米友の空に舞はしてゐた梯子も見えなくなつたし、道庵も倒れてはゐないし、あんぼつも何處へか取片づけられてゐました。

萬字樓の前が人の出入が出来るやうになつた時分に、例の「あんぼつ」がまた家の中から昇き出されたが、それを擔ぎ出したのは前の酔つはらひの駕籠昇とは違つた屈々な駕籠昇で、其の駕籠わきに附いて行くのが宇治山田の米友で、さういふ積りか、例の二間梯子を其のまゝにして手放す事をしない。

廊内を出た此の「あんぼつ」は下谷の長者町の方角を指して行くものらしいから、して見れば此の駕籠の中には當然主人の道庵先生であるべき筈なのに、其の當人の道庵先生は、やゝ正氣に立ち返つて、萬字樓に踏み止まつてゐるのであります。

萬字樓に踏み留まつた道庵は、相變らず其處で飲んでゐるかと思へば、決して其んな呑氣な沙汰ではありません。擔ぎ込まれた敵味方の療治と其の差圖で手んてこ舞をしてゐるのであります。萬字樓その者が野戰病院見たやうで、道庵先生は軍醫正といつたやうな格でありました。こゝに至る道庵先生の舞臺であります。外へ出しては骨無し見たやうな先生が、この野戰病院の中で縦横無盡に働く有様はほんざ別人の觀があります。打身は打身のやうに切創は切創のやうに、氣絶したものは氣絶したもの、やうに、繃帯を巻くべきものには巻かせたり巻いてやつたり、膏藥を貼るべきものには貼らせたり貼つてやつたり、上下左右に飛び廻つて、自身手を下し或は人

を差圖して、車輪に働いてゐる處は、さすがに響の音を聞いて眼を醒ます侍と同じことに、職務に當つての先生の實力と技術と勉強と車輪は轉た尊敬すべきものであると思はせました。

たゞ餘りに、勉強と車輪が過ぎて、火鉢にかけた藥罐の上へ膏藥を貼つてしまつたり、ピン／＼して働いてゐる男の足を取捉かまへて繃帯をしてしまつたりすることは、先生としては大目に見なければなりません。

「斯う忙しくつちやあ、トテも遣り切れねえ」

ブツ／＼云ひながら、先生は遂に諸肌脱ぎになつて、向ふ鉢巻をはじめました。その打扮でまた片づはしから療治や差圖にかゝつて、大汗を流しながら、

「こんな人にコキ遣つて十八文じゃあ、あんまり安い、五割位値上げをしる」

口ではサボタージュ見たやうな事を云ひながら、其の働きぶりの目ざましさ。

主人の道庵先生は、こんなにして働いてゐるのだから、先に返した駕籠に乗つて歸つた人が先生でないことは勿論であります。先生で無ければ誰、醫者が病人に限つて乗るべき筈の切棒の駕籠、それに醫者が乗つて歸らなければ病人に違ひない。

十三

酒井の市中取締の巡邏隊に追ひ崩された茶袋の歩兵は、彼處の路次に突當り、こゝの店の角へ逃

け込んだのを、彌次馬が此處ぞはかり追ひかけて、寄つて集つて石や拳で滅茶々に叩きつけて殺してしまひました。その屍骸が彼方此方に轉がつてゐるのは無残な事です。この騒ぎが、漸くすさまじくなりはじめた時分、丁度、宇治山田の米友が、屋根の上から飛び降りた時分の事です。若い武士が肩に一人の人を引掛けて、勿橋を跳り越えて、そつと龍泉寺の方へ逃げて行きます。若くは、前へ急いで行く面を見れば、それは宇津木兵馬です。その脊に引かれて振り返りながら、前へ急いで行く面を見れば、それは宇津木兵馬です。その脊に引かれてゐるのは神尾主膳に紛れもありません。兵馬はこの邊の道筋をよく知らないけれども、向ふに黒く見えるのが上野の森であらうその見當から、兎も角、あの上野の森を目ざして行かうとするつもりであるらしく思はれます。

「おや、お前達は、わたしを如何しようさいふんたい」

畑の中で金を切るやうな聲がしたから、兵馬は足を留めました。

「い、から、そんなに怒らないで駕籠に乗つてお戻んなさいませよ」

「乗らうと乗るまいと大きなお世話じやないか、退いておゐて邪魔をしないで、お通し」

「そんな判らない事を仰有るもんじやありませんよ、山下の立場から吉原まで二百五十の定まりの上に、多分の酒代まで戴いてあるんでございますから今更、さうの斯うのていふ譯じやございませんよ」

「何でもい、から、お通し、先の事が心配になつて、気が氣じやあ無いんだから、通してお呉れ」
「可けませんよ」

「この野郎」

女の方が腹を立つて、ヒシヤリと男の頬を撲りつけたやうであります。

「おや、打ちやがつたな、女だてらに男を打ちやがつたぜ、女の子に扱られるのは悪くはねえが、斯う色氣なしに打たれちやあ勘辨がならねえ」

「泥棒——」

「泥棒たつて云やがる、こいつは穢かでねえ、こいつは、さうも穢かでねえ」

「あれ——人殺し」

「おや、人殺し……なほ可けねえ、兄弟、その口をしつかり封じてやつて呉んねえ」

「あれ——この野郎」

「何を云つてるんだ、ヂタバタするだけ野暮じやねえか」

たしかに一人の女を、二人の駕籠昇が取つて押へて手込にし兼ねまじき事態を聞きつけた兵馬は、もう猶豫するわけには行きませんから、神尾主膳を脊中から下ろして其處へ、さし置いて今の金切壁の處は鷺神社の鳥居の前、二人の大的駕籠昇が、一人の年増の女を取つて押へようとしてゐる處。

「この馬鹿野郎奴が」

兵馬は横合から一人を蹴飛ばして一人を突き倒しました。その勢に怖れて雲助は霞の如く逃げてしまひました。

「危ない處をお助け下さいまして有難う存じまする」

「誰か、其處にゐるのは變だ」

兵馬は咎めて見るけれど、誰も返事をする者がありません。

「隠れてゐるな」

兵馬は進んで行き、

「今の駕籠屋共であらう」

「いゝえ、別の人のやうでございました、彼方からバタン／＼と駆けて来て、わたしに突き當ると直ぐに姿を見えなくしてしまひました」

「怪しい奴だ、併し心配なさらぬが宜い、そこまで送つてお上げ申さん」

兵馬はお角の先に立ちました、その時に、

「うーむ」

と人の唸る聲。

「あれ、人の唸つてゐるやうな聲が」

お角はさすがに氣味を悪がつて足を留めました。

「あゝ」

兵馬も其の唸り聲には驚かされないわけに行かなかつた様です。

「今の悪い奴でございませう、それとも、あの駕籠屋が、また其處いらに倒れてゐるのでございませうか」

「左様ではない、あれは……」

と兵馬は答へて、當惑しました。今、暗い中で唸り出したのは、最前追ひ飛ばした駕籠屋でもなく、今出合頭にお角に突き當つた怪しの者でもなく、それとは全く別の人、即ち、兵馬が吉原の茶屋から此れまで擔いで來た、神尾主膳が地上へ差置かれた處で、息を吹き返した爲にその唸り聲に違ひないから、それで兵馬はハタと當惑しました。

「うーむ、水を持って、水を」

正しく神尾主膳の聲であります。兵馬の爲に悪い駕籠屋を追ひ飛ばしてもらつたから女は其處へ手をついてお禮を云ひました。

「これは何方へお出でなさる」

「はい、吉原へ用事がありまして、山下から頼んで参りました駕籠が此の始末でございます」

「お送り申して上げたいが、拙者もちと急な用事がある……」

「もう、つい其處でございますから、ひそりで参ります」

「吉原は今、あの通りの騒ぎで浮き近寄れまいと思はれるが、用心してお出なさい」

「有難うございます、いづれ用事が漸み次第お禮に上らうと存じますが、あのお住居は何方様でございませう」

「ナニ、左様な御心配には及ばない、やあ、また吉原の騒ぎが大きくなつたやうぢや」

「何でございませう、あの騒ぎは」

「歩兵隊が入り込んで亂暴をはじめたのでござる」

「わたくしの知合の人が、丁度、吉原に行つてゐますものでございますから、気が氣ではありません、せん、それでは此の儘御免下さいまし」

女が其のまゝ、駆出すと、暫らくして、

「アツ」

「危ねえ、氣をつけやがれ」

又しても闇の中でバツタリと突き當つたものがあつて、女はよろよろをしました。さては逃げ去つたと見せた悪い駕籠屋共がまた其の邊に潜んでゐるのであらうと、兵馬は、

「如何なされた」

「誰か参りました、今わたしに突き當りました」

「おやあの聲は」

女は其聲を聞かぬまいわけには行きませんでした。

「あれは怪しいものではない、拙者の連の者」

兵馬は斯う言譯をしました。

「お連の方でございましたか」

女もそれだけは安心してゐると、

「あゝ、苦しい、水を持って、水を、女中共誰も居らぬか」

闇の中で、つゞけて斯う言ひ出したから、

「おや、あのお聲は」

兵馬は女を、さし置いて、

「お静かに、静かにさつしやい」

地上へ捨て置いた主膳の傍へ寄ると、

「早く水を持って申すに、女共何處へ行つた、拙者はもう歸るぞ」

「ん、は吉原ではござらぬ、静かにさつしやい」

兵馬は主膳を抱上げて耳に口をつけて、囁きました。

「吉原でない、吉原でなければ何處だ、暗い處だな、化物屋敷か、染井の化物屋敷か此處は、

主膳は人心地がなく物を云つてゐるやうであります。

「おやく、もし、貴方様、そのお方は誰方でございますか」

女は、立ち戻つて來ました、さうして兵馬の抱えてゐる人を、さしのぞかうしました。

「これは、拙者の連の者で、ちと酒の上の悪い男」

「もし、そのお方のお聲に、さうやら、わたくしは聞き覚えがあるやうでございます」

「何の、そなた達の知つた者ではない」

兵馬は隠した方が宜からうといふ心持であつたけれど

「誰が、拙者の斷りなしに此んな處へ連れて來た、こんな暗い處へ誰が連れて來たのじや、さあ

水を持って、水、誰も居らぬか」

兵馬は隱さうとしても、人心地のない主膳は、は言のやうに聲高く此んな事を云ひ出しました。

女は立つてゐる事が出来ません。

「あの、そのお方のお聲は……さうもわたくしは聞いた事のあるやうなお聲でございますが、もし間違ひましたら、御免下さいまし、そのお方はあの染井の殿様ではございませんか」

「染井……染井の化物屋敷、こんな陰氣臭い處へ、誰が連れて歸つた……」

主膳は切れ／＼に斯う云つて唸りました。

「お、そのお方は神尾の殿様」

「この人を神尾主膳殿と知つてゐる和女は」

「まあ、神尾の殿様でございますか、宜い處でお目にかゝりました、殿様をお迎への爲にわたくしは吉原へ飛んで參る處でございますよ、こゝでお目にかゝらうと存じませんでした」

女は喜んで兵馬の抱いてゐる男を神尾主膳と認めてしまひました。この女といふのは女輕業の角です。

「如何にも、この方は神尾主膳殿であるが、さういふ和女は」

兵馬は再びお角の身の上を尋ねました。

「これは御免下さいまし、つい慌て、しまひまして、申上げるのを忘れてしまひました、わたしは此の殿様の……此の殿様のお屋敷の奉公人でございます」

「あ、左様か、然らば此の神尾殿のお住居を御存じであらうがな」

「エ、それは申上げるまでもございませんが、それよりは此の殿様のお連のお方は……お連様は何方においでございませう」

「ナニ、この神尾殿に連があつたのか」

「はい、あの……」

お角は此處で龍之助の名を云はうとしました。その變名は時によつては吉田といつた。時によつては藤原といつたりする。その人の名をうっかり云つてしまはうとして、はつと氣がつきました。

「神尾殿は一人ではなかつたのか」

「はい、あのお友達でお目の不自由なお方が一人」

「目の不自由な友達が……」

その時宇津木兵馬は愕然として思ひ當る處がありました。

「その目の悪い人に逢ひたかつたのだ、さあ其の人を探しに行きませう、一緒に吉原へ引歸しませう」

兵馬が急ぎ込んでお角は煙に捲かれます。

その時に思ひがけなく築堀の陰から、

「宇津木様、早く行つてお出でなさいまし、神尾の殿様の處は、わつしが引受けますから随分御心配なく」

斯う云つてのそりさ出て来たのは金助の聲に違ひありません。

「金助ではないか」

「へえ、金助でございます、お思でもございませうが、お後を慕つて参りました」

金助は相變らず酒蛙々々としたものであります。

「今、わたしに打着つたのはお前さんかエ」

お角が斯う云つて咎めると、

「へえ、私でございます、飛んだ粗忽を致して申譯がございません、實は其の時、おわびを申上げてしまへは宜いのでございましたが、これには仔細がありさうでございますので、物陰へ忍んで御容子を窺ひましてございます」

十四

お角に代つて染井の化物屋敷へ神尾主膳を送り込んで其の間へ休ませた後金助は次の間へ入つて煙を吹かしてゐます。

「成程、こいつは化物屋敷だ、これだけの構へに主人の外には人つ氣が無えといふのが全く人間放れがしてゐる、何たか斯うしてゐるさソク／＼して淋しくて堪らねえ、身の毛がよたつやうたおやおや、この浴衣、吉原田圃で轉んだ拍子に、こんなに泥だらけになつてゐたのを今まで氣がつかかなかつたのは怖れる、氣がついて見れば此んなものは一刻も身につけてはゐられねえ、はてな、着換はねえかな、こんな場合たからお殿様のお召物であらうさも、お部屋様のお召替であらうさも、何でも構はねえ、手當り次第に御免を蒙つて……」

金助はあたりを見廻すと、衣桁に鳴海絞の浴衣があつたから、それを取つて引かけてなほも煙を吹かしてゐる耳許でブーンと蚊が唸ります。

「おやく、蚊が出やがつた、お、痒い、こいつは堪らねえ」

いつの間にか蚊に手の甲を、したゝかに食はれてゐました。その手を掻いてからヒシリと顔を打つて蚊をハタキ落し、

「世の中に蚊ほさうるさきものはなし、文武といひて夜も眠られず、さすがに寢惚先生、旨い處を云つたな、何處かにまた蚊帳があるたらう」

金助は立つて戸棚を開けると、そこに蒲團もあれば、立派な蚊帳も入れてありました。その蒲團を展べて蚊帳をつり、その中へ煙草盆を引寄せて、ふんぞり返つた金助は、

「だが、陰々こ湿つばい家だな、燈心をもう少し掻き立て、明るくしてやらう、殿様は、よくお休みのやうだ、お命に仔細はあるまい、成程、すやくと寢息が聞えるから、まづ安心、おや、何か音がしたぜ、風が出たんじやあるめえな」

耳をすますと、下駄を穿いて歩んで来るらしい人の足音。

「冗談じやねえ、人の足音だぜ、しかも暢氣に庭の中をカラコロと引摺つて歩いて来るのは只者じやあ無えぜ、あのお角さやらいふ女の言葉では、誰もぬえ留守の屋敷だと云つたが、誰かゝるじやねえか、此奴は堪まらねえ、化物屋敷の化物がお出なすつたんだぜ、人が悪いねえ拙者を臆病さ知りながら、此んな處へ送り込んで生きながら化物の餌食とするなんぞは、寧ろ、殿様をお起し申さうか、お起し申したつて、死んだも同やうに寢癖の悪い殿様だ、何にもなりやしねえ、おやく、いよく此方へやつて来るぜ、下駄の音がたんと近くなるぜ、あれもう飛石の

上あたりを歩いてゐるんだ、弱つたなあ、とても斯うしちやゐられねえ、何か獲物は無ねかな、獲物があつて見た處で、おれの腕じやあ納まりがつかねえ、殿様のお寢間の中へ潜り込んでしまはうか、さあ、大變、雨戸へ手をかけたぞ、雨戸には錠が下ろしてあるんたらうな、お角さん、忘れて錠を下ろさずに行くなんて、そんな抜かりのある女では無からう筈だが……化物の事だから、戸の隙間から入つて来て金助さんお怨めしいなんぞは有難くねえな、おやく、開けたく何の苦もなく雨戸をサラリと開けたぜ、さあ、いよく堪まらねえ、あれく廊下がミシリく云ふぜ、やつて来た、やつて来た、お出なすつた」

金助は驚き怖れて、蒲團を頭からスッポリ被つて息を凝らしてゐました。これは金助の疑心暗鬼ではなく、たしかに庭を歩いて、雨戸を開けて廊下を歩いて金助が今蒲團を被つてゐる部屋の障子の前に立つた者があるに相違ないのです。

「お角さん、もうお歸りなすつたの」

障子を開けて蚊帳の外に立つて斯う云つたのは女の聲であります。金助は黙つてゐました、蒲團を頭から被つてガタ／＼と慄えてゐました。併し、燈火はカン／＼とかがやいてゐることであるし、嗅みかけた煙管は其處に抛り出してあるのであるし、その煙草の吸殻の煙ものん／＼と立ち登つてゐるのであるから、外から見ても、内から見ても人が居ないとは言ひ抜けない有様であります。

「お角さんは如何しました」
蚊帳の外は再びこんな事を云ひました。金助は其れでも返事をしなかつたけれど、女は容易に立ち去らうともしないで、

「そこに寝んでゐるのは誰方」

「へえ、うーむ」

金助もつひに堪へ兼ねて、慄え聲で、今日が覺めたやうな作り聲をして、

「誰方」

同じやうな事を云ひ、蒲團の隙間からそつと目だけ出して蚊帳の外を見ました。立つてゐるのは寢衣姿の女らしい。

「お前さんは誰方」

「金助でございます」

「金助さんさ仰有るのは」

「へえ、只今、殿様のお伴をして歸つたばかりでございます」

「お角さんは如何しました、お前さんと一緒に歸りましたか」

「い、え、あの方は、また歸りませんで、吉原へ引返して參りました、わたくしはまた其の途中で頼まれて、此方様へ殿様をお届け申したついでに斯うして御厄介になつてゐるのでござい

ます」

「それでは歸つて来たのは、お前さんと、當家の主人の二人きりなの」

「左様でございます」

「も一人のその連の人は如何しました」

「それでございますよ、そのお連のお方の行方が知れなくなつたので、それでお角さんと、もう一人のお方が探しに上がったんでございます、わつしは後を頼まれて、殿様を、この屋敷へお連れ申したんでございますよ」

「其りや嘘でせう」

「如何して嘘なんぞを申しませう、本當の事でございます」

「嘘、嘘、お前さんと、あの御別家の奥さんやお角さんと、腹を合せてわたしを欺してあの人を隠したんでせう」

「おや、腹を合せて、私があの人をお隠し申すにもお隠し申さないにも、てんで其のお方にお目にかゝつた事は無いのでございますもの……」

「い、え、お前さん達の企みは、ちやんそわたしは心得てゐます」

「わつし共の企み……一體私は斯うして今晚初めてお屋敷へ上つたものでございますよ、それは彼方にゐる時分には、殿様に随分御恩を受けましたけれど、江戸へ參りましては昨晚計らずも吉

原で殿様にお目にかつたばかり、何も人様に怨まれるやうな企みを致しました覺えはございませんが」

「そんなら何故、あの人を残して、此方の主人だけを連れて歸りました」

「何故連れて歸つたか、それをわつしに仰有つても御無理でございませぬ、一體、貴方様は何方でございますか」

金助は、漸く少しは落着いて蒲團を押退けて、全く見當違ひの恨を自分に述べてゐるその女の人の何者なるやを見ようと思しました。

「や、大變、本物……」

金助は必死になつて蒲團にしがみついて、また其れを頭から被つて絶叫しました。

蚊帳の外に止つてゐるのは女は、に遠ひないけれども、女の姿をした鬼であります。臆病な金助には慥にさう見えませんでした。怖さ半分と、横着半分まで寒團を被つて應待をしてゐた金助は、こゝに至つて全くの恐怖に襲はれて齒の根が合ひません。

「吉原さ、ふのも、お前さん、そりや嘘だらう」

女は、いよくすさまじい聲。

「如何致しまして、嘘ではございませぬ」

「嘘を云ふのに違ひない、さうしてあの人を何處へか隠したのは、あれは御別家の奥さんといふ

人に頼まれて、お角さんが手引をしてわたしに知れないやうに隠してしまつたのだといふ事を、わたしは前から、ちやんと知つてゐる、お前さん、何處へあの人を隠したか、それを云つて下さい」

「ト、ト、飛んでもない事で、あの人にも、此の人にも、わつしが隠すなんて、お隣申すなんて、そんな事はございませぬ、ございませぬ、ございませぬ、ございませぬ」

「お前さん、若しお金が欲しいなら幾らでも上げるから、あの人を隠した處を教へて下さい」

「いゝえ、お金が如何しよう云ふんではございませぬ……まあ、何が何やら存じませんが、貴女様にお怨まれ申しても、わつしは損でございませぬから、よく事のわけを申上げてしまひます、あの吉原で、わつしは神尾の殿様にお目にかつたので、そのお連れの方には一向氣がつきませんので、あそこで承はれは其れはお目か……お目が悪い方ださうで」

「その人、その目の悪い人が何で吉原へ行つて見ようさといふ氣になるものか、それを傍から皆んなして連れ出して……」

「いゝえ、吉原へお出になつたのは本當でございませぬ、吉原は萬字樓といふ大きな店でございませぬ、其處へ、私も丁度お客になつて登り合せたんでございませぬ、さうするさ邊に吉原の中へ大騒動が起りましたんでございませぬ」

「そんな事はありませぬ、それはお前のこしらへ事です、成程この主人は吉原さやらへ行つた

かも知れないが、その前に、あの人を何處へか隠してしまつたのです、あの人を隠して置いて、この主人だけが吉原へ行つて遊んだものに違ひない、この主人はさういふ事をする人です、それだから一人で歸つて来たのです、一緒になつたものが、それに目の不自由な人を連れにして行つたものが、それを忘れて一人で歸るなんぞと、そんな事はありません、それはお前さんが、皆んなから頼まれた拵へ事でわたしを欺すのです」

「如何も恐れ入りました、それほどに疑ひ遊ばすなら論より證據、これから吉原へ行つてごらん下さいまし、わたしの云ふ事が嘘か本當か直ぐおわかりになりますから」

「吉原といふのは、これから遠い處かえ」

「遠いと云つた處で知れたものでございます、一里半と思つたら損はございません」

「お前、その吉原と云ふ處へ、わたしを案内してお呉れ」

「いゝえ……それは如何も」

「それ御覽、わたしを連れて行くことは出来まい、お前がつれて行かなければ、わたしは一人でいきます」

女は斯う云つて、スーツと出て行きました。

お角と共に宇津木兵馬が再び吉原の廓内へ引返した時分には騒動は鎮まつて、萬字樓の野戦病院も解散され道庵先生は何れへ立退いたか姿が見えません。

たしかに神尾主膳と共に此の樓へ送られて来たのは二人づれであつたといふ事、その一人は盲目の人であつたといふ事、その盲目の人が中は血を吐いて別室に移されたといふ事、騒動の時に誰も彼も逃げ出したけれども、結局、その盲目の血を吐いた人だけは一人別室へ取り残されたままでゐた事、それと氣がついて丁度近所へ來合せて飲んでゐた道庵先生を頼んで、その乗物で助け出して貰はうとした處から……その後の成行まで漸く聞き出すことが出来ました。その盲目の客が移されたといふ別室へ來て見れば夜具と蒲團がそのまゝにあるばかりで人の氣配はありません。この客は道庵先生が乗つて來た切棒の駕籠にうつされて、その駕籠側には梯子を持った小兵の男、天から降つたか地から湧いたか、遽に騒動の場へ現れて、多数の歩兵隊を相手に大格闘をした男が附いて門を出てしまつたのは、騒動が鎮まつたのと略同じ位の時刻たといふことでありました。

これだけの事を兵馬とお角が尋ね上げた時分にはもう夜が明け渡つてゐました。

そこでお角と共に長者町へ急ぐことに定めました。お角は兵馬が何故に自分と同じ人を深く尋ねるのたか、それを知ることが出来ませんけれども自分としては是非共に尋ね出して染井の屋敷へ歸らなければならぬと思つて、何處までも兵馬と行動を共に、土手から二挺の駕籠を雇つて長者町へ飛ばせました。

長者町へ着いて見ると道庵先生は歸つてゐるにはあるが寢込んでしまつて容易に起きないのを起

して容子をたづねると一向要領を得ません。
あんぼつに乗せて盲目の客を送り出したのは全く道庵の知らない事で、その駕籠傍についてゐた
小兵の梯子乗りが知つてゐるたらうこの事です。
それは近頃、浅草の廣小路へ出る梯子乗の友吉といふものであつたらしいこの事、よつて兵馬は
探の方針を此の梯子乗に向けなければならなくなりました。

十五

お君は帯をするやうになりました。その時にお松が、

「お君さん、お目出たうございます」

と云つて祝うと、

「否え……」

と云つて眞赧な面をし、

「お松さん、わたしは此の子がやつはり生れない方が仕合せだと思ひますわ」

「何を仰有います、此のお目出たい矢先に其んな事を」

「いゝえ、目出たい事ではありません、わたしに取つても少しも目出たい事ではございませんし

この子に取つても決して目出たい事ではございません、この子は父無し子と云はれて一生涯明る

い處へは出られませんもの」

「まあ、父無し、このお子さんは、あのお立派な駒井能登守様と仰有る親御様をお持ちではござ
いませぬか」

「否え、この子は駒井能登守の子ではございませぬ、わたくしの子でございませぬ、それ故にわた
くしは、さのやうな事があつても能登守の子としては育てません、わたくしの子として育て、参
ります、それよりか、わたくしは寧ろ難産で、此の子と一緒に死んでしまへば、それに越した事
は無いと思つてゐるのでございませぬよ」

「まあ、聞いてさへソツとします、わたしは其んな事を聞きたくありません、もつと面白い話
をしませうよ」

お松は力一杯にお君を慰めようと思つて、

「お君は何を考へたかハラ／＼と涙をおさしてゐたが、ふら／＼と立ち上がりました。

「お君さん、何處へあらつしやるの」

「はい、わたしは、問の山へ」

その腫の色が定まつて居りませんから、お松は怖ろしいほど心配になつて、

「まあ、お話がありますから、お坐りなさいませ」

強いて、お君の袖を引いて引き留めました。

それからお松はお君の爲に心配の餘り、神田の和泉町の能勢様といふのへ參詣をすることに
なりました。

和泉町の能勢様といふのは四千八百石の旗本で、そのお屋敷のうちにお稻荷様があつて、そのお
稻荷様から能勢の黒札と云ふお札が出る、お札の表には正一位稻荷大明神と書いてあつて、その
お札で撫でるとお醫者さんでも癒らない病氣が癒るさされてあるものです。ですから氣の變にな
つた人や、狐につかれた人の爲に能勢様へお札を貰ひに行く者が黒山のやうです。

そこでお松は能勢様へ行つて、お君の爲に稻荷様のお札を戴いて歸りに和泉橋の處へ出るさ笠を
かぶつて袈裟法衣に草鞋穿の坊さんが杖をついて、さつさと歩んで来る、それに引添うて、一匹
の眞黒い逞しい犬が威勢よく走つて来るのを見かけました。

「まあ、ムクだね、珍らしい、お前、今まで何處にゐたの」

甲州で別れて以來のムクはお松の傍へ来て、身體をこすりつけて尾を振つて勇み喜ぶのでありま
す。

「お前さん、此の犬を知つておゐるか、オホホホ」

笠の中からお松を見て笑つてゐるのは慢心和尚です。

「御出家さん、貴僧が此の犬をお連れ下さいましたのでございますか」

「はい、わしが連れて参りました」

「よく、お連れ下さいました、この犬の主人の居ります處をわたしがよく存じて居りますから御
案内を致しませう」

「それは、併し、わしは外に用事があつての、お前の方へ行つて居られないから持主に宜し
く申して呉れ」

と云つて此の出家は、ムク犬の頭を三遍撫でお松に名前を尋ねる隙も與へないで、さつさと行つ
てしまひました。

お松は呆氣に取られましたけれども、其れにしても笠の中から自分を見てゐた坊さんの面が丸い
ものだと思ひました。

十六

道庵先生は柳橋の萬八樓で開かれた書畫會へ出かけて行きました（其席で先生一流の漫罵や交ぜ
つ返しがあつたけれど略之）宴會の時に、誰の口からともなく、この正月にじくなつた高島秋
帆の噂が出ました。さうするさ席の半にゐた道庵先生が、しゃくり出て此んな事を云ひました。

「四郎太夫はエライよ、實は拙者も長崎の生れでね（註、道庵先生は此んな事を云ふけれど事實
長崎の生れであるや否やは怪しいものである）高島の事はよく知つてゐるよ、大開時代からの家
柄でね、先祖代々異國と御直商賣と云ふのをやつてゐたから中々金持よ、俸祿はたつた七十俵五

人扶持しきや貰つてゐねえけれど、五十萬石の大名と同じ位の金があつたさうだよ、さうでなきやお前、あれだけの仕事が出来ものかな、や、つこい大名ぢやあトモ高島の眞似は出来ねえね、それだからお前さうく謀叛人に見られちやつたのさ、あれでお前、ほんまに謀叛する氣であつて御覽じろ、大鹽平八郎なんぞより、ズット大仕掛の事が出来るんなね、だからお上でも怖くつて仕方がねえ、さうく謀叛人にされちやつてね、牢へまで打ち込まれて晩年は不遇さ云つたやうな譯さ、併しまあ、あの男なんぞは何にしても近世の人物さ」

道庵先生は友達氣取りで高島四郎太夫の話を初めながら懐中から取り出したのは千住の紙煙草入の安物であります。

「いや皆さん、これたく、これはその八十文で買つた拙者の安煙草入でけすがね……」

また初まつた。高島四郎太夫を友達扱ひはよかつたけれども、安煙草入を満座の中へさらけ出して、八十文の値段までプチまけるから其れでお里が知れてしまひます。

「この煙草入に就て四郎太夫を憶ひ起すんでございますよ、まあお聞きなさいまし、拙者が若い時分、四郎太夫に奢らせて友人兩三輩と共に深川に遊んだと思召せ、その席へ幫間が一人やつて来て云ふ事には、只今拙は途中で結構なお煙草入の落ちてゐたのを見て参りました、金唐革で珊瑚珠の緒、ちよつと見た處が百兩下のお煙草入ではございせん……てな事を云ふと、それを聞いた高島が吃驚して腰のまはりを探つた容子であつたが、やがて赤い面をして腰から自分の煙

草入を抜き取つてね、中の煙草を出して丁寧にハタいて、それを幫間の前へ置いたものさ、幫間が吃驚して、そんな譯じやございせん、且那樣をカツいたわけではございせん、なんて言譯をするのを、高島が云ふ事には、何もお前等にカツがれた處が恥と思ふおれでは無い、たゞ煙草入を落したものがあつて聞いて自分の腰を撫で、見たおれの心が恥しいと云つたものさね、それで幫間に其の煙草入を呉れてしまつた、それが薄色珊瑚の緒に古渡りの金唐革さいふわけだ、その後は此の通り八十文の千住の紙の安煙草入、おれの持つてゐる此れと同じやつ、これより外にあの男は持たなかつた筈だ、たからおれは此の煙草入を見るさ高島の野郎が懐しくつて堪まらねえ、そりや高島が二十臺の時分の事でしたよ……如何いふわけでお前、おれが高島とそんなに惡意であるか云つた處で、お前、あれも今いふ通り長崎の生れなたらう、それにお前醫者の方であの男は打捨つて置けねえ男なんだよ、今でこそ種痘瘡と云つて、誰もそんなに珍らしがらねえが、あれを和蘭から聞いて、日本でためして見たのは、高島が初めたらうよ、そんなわけであの男は金があつた上に、おれよりも少し頭がい、から世間から騒がれるやうになつたのさ、拙者なんでも、この上金があつて頭がよくつて御覽じろ、直に謀叛を起して日本の國を引繰返してしまふ、さうなる事事が穰かだねえから、斯うして皆んなに馬鹿にされながら貧乏してゐるのさ、つまり人助けの爲に貧乏してゐるやうなわけさ」

道庵が此んな事を云つて一座をながしく思はせてゐるうちに、やはり高島秋帆の事が話題に

なつて次に江川太郎左衛門の事、それから砲術の門下の事にまで及んで遂に、

「時に、あの駒井甚三郎は……」

と云ふ者がありました。

「成程、駒井能登守殿、その後は一向お沙汰を聞かぬ」

「左様、駒井氏」

「駒井甚三郎か、成程な」

「甲府から歸つて以来、さつぱり消息を知らせぬ、あの駒井能登守」

と云つて一座は駒井能登守の噂になりました。これ等の連中は能登守が、何によつて預いたかをよく知らないものと見えます。よし内々は聞く處があつても公開の席へは遠慮をしてゐるらしく見えます。

「不思議な事もあればあるもので、拙者此の間意外な處で駒井殿らしい人を見かけ申したよ

これは道庵先生の隣席にゐた遠藤良助といふ旗本の隠居でありました。

「遠藤殿には駒井甚三郎を見かけたさ申されますか、して何れの處で」

然るべき大身の隠居らしいのが遠藤に向つて尋ねました。

「實はな、先日、手前は舟を嵜うて芝浦へ投網に参りましてな、その歸り途でござつた、濱御殿に近い處で、見慣れぬ西洋形のバッテリーが石川島の方へ波を切つて行く、手前の舟がそれと擦

り違ひざま、何気なくバッテリーのうちを見ますと、笠を被つて羅紗の筒袖を見て、手に巻尺と分銅のやうなものを持つて鑑先に立つてゐた人、それが如何も駒井甚三郎殿さしか見えないのぞござつた、手前も一目見たゞけで、言葉をかけたわけではなし、しかした事は申上げられんが、今でもあれは駒井甚三郎に相違ないと思つてゐますな」

「成程、バッテリーに乗つて、海を測量する、駒井のやりさうな仕事じゃ、事によるとあの邊に隠れて、何か海軍の仕事をして居るのではないか」

「何しても、あれが生きて居れば結構、あれだけの人材を今むざ／＼葬るのは真に惜いものじゃ」
「一體、駒井が甲州を罷めたのは、神尾主膳との間が面白くない爲か、それとも他に何か仔細があつてか」

「駒井としては神尾などは眼中にあるまい、主膳と勢力争ひでもしたやうに見られては駒井が可哀相じゃ」

旗本の隠居や諸士の間に駒井の噂が漸く問題になつてゐたけれど、道庵先生は能登守の事を餘りよく知りませんから、八十文の千住の安煙草入から煙草を出して吹かしてゐました。

この遠藤良助といふ旗本の隠居は投網が好きで上手で且自慢でありました。駒井の噂がいゝ加減の處で消えるを、それから魚の話に返つて行きました。遠藤老人は、人からそのかされて、得意の投網の話をはじめると、孰れも謹言しました。

道庵先生は、そんな事にさまで興を催さないから、思はず大欠伸をする。遠藤老人は道庵先生の席を顧みて、

「これは、道庵先生、久しくお見えなさらんな相變らずお盛んで結構、ちと遣つて來給へ」
 「遠藤の御隠居、暫らくでございましたな、相變らず投網の御自慢、最前から面白く拜聴して居りますよ、實は拙者もあの方は好きで、ついお話に聴き惚れて夢中になつて大欠伸をしてしまひましたよ」

「は、は、は、併しまあお世辭にも先生が我が黨の士であつて呉れるのは嬉しい」

「處が、拙者は投網の方はあんまり得手ではございませんよ、その代り釣を來たら、御隠居の前だが、恐らく當今では稀人の部でござんせうな」

「は、あ、先生、釣りをおやんなさるか、ついぞ聞き外れ申したが其れは頼もしい事」

「君子は釣して網せずでございますな、一旦釣の細かい處の趣味を味はつた者には、御隠居の前だが、網なんぞは大味で食べられません」

「成程、それも一理」

「拙者はまた天性釣上手に出來てるんでございますよ、拙者が輪を垂れると魚類が争つて集まつて參り、是非道庵さんに釣られたい、わたしが先に釣られるんだから、お前さん傍へ寄つておめでといふやうな具合で、魚の方から釣られに來るんでございますから感心なものです」

「そりや左様あるべきもの、不發の中といつて釣にもせよ、網にもせよ、好きの道に至ると迎へずして獲物が到るものぢや」

「全くその通りでございます、だから世間の釣られに行く奴が馬鹿に見えて堪らねえんでございます」

「其處まで至ると貴殿も中々話せる、是非一夕、芝浦あたりへ舟を同じうしてお伴を致したいものでござる」

「結構、大賛成でございます、是非お伴を致しませう」

「然らばそのうちこいはず、今夕、この會が済み次第、舟を命ずる事に致さう、お差つかへはござらぬか」

「エ、今夕、今日でございますか差支へは無えやうな者だが……」

道庵先生はハタと當惑しました。實は先生行きが、り上、釣が上手であるやうな事を云つてしまつたけれども、釣竿の持ち方も怪しいものです。けれども事ここに至ると、今更後は見せられない破目になつてしまひました。遠藤老人はワザと道庵先生を困らせるつもりか如何か知らないが先生を斷り切れないやうに仕向けて置いて女中を呼んで漁の用意をすつかり命じてしまひました。

斯うなる道庵も亦腹意地を張らないわけには行きません、血の出るやうな聲をして、

「宜うガス、芝浦であらうと上總房州であらうと何處へでも行きませう、拙者も男だ」
道庵先生は餘計な口を利いた爲に、この會が果て、から、遠藤老人に誘はれて芝浦へ出漁せねばならぬ事になりました。

道庵を誘ひ出した遠藤老人は、船頭を雇ひ家來をつれて濱御殿の沖あたりまで舟を漕がせ、得意の投網を試みて腕の冴えた處を見せました。

道庵は元より口ほどの事は無かつたけれども、まんざら心得が無いでも無いらしく、ちよい／＼二三寸位の處を引かけては鼻をうごめかせて、その度毎に天地をうごかすやうな自慢であります。遠藤老人はもとより道庵に口ほどの事は期待してゐないし、やがて竿で水を掻き廻すやうな事になつたら、ミツチリ油を取つてやらうと構へてゐたものを海の中には可なり暢氣な魚もあると見えて、たゞへ一匹でも二匹でも道庵の針にかゝるやうなものがあるから、其の自慢を聞かせられ

ても苦笑ひしてゐるはかりです。
それでもこの一夕は可なり暢氣な氣分になつて、また萬八へ歸り、そこで道庵と別れて亀澤町の隠宅へ歸つたのは夜も可なり更けてゐました。

この人は旗本の隠居でもそんなに大身ではありません、三百石ほどの家督を俵に譲つて隠居の身だけれども、若い時分から家の經濟が上手でありました。それ故に、今の身分になつても裕福であります。

こんなに夜が更けて歸つても寝る前に、ちやんと其の日の算盤を置いて見なければ寝られない癖がありました。他へ廻して貸付けさせた金の利廻りや、地面家作の取立てや、知行所の上り高といふやうな事を、俵に代つて一々算當して、帳面を記して置かねば寝られない癖です。當時、大名にも旗本にも、内緒の苦しいのが多く、上へは大身に構へても、町人に借金があつて首が廻らなかつたり、また札差をさん／＼強請るやうな事が、少くとも己れの家に限つては其の憂ひの無い事さ、利が利を産んで行く未來の算をして見ると、いつも一種の得意に満たされて云はん方なき快感を催すのであります。その快感に浸されながら枕について夢を結ぶのが十年一日の如く此の老人の習慣でありました。

さうか云つて、此の老人は音階おとだいらと罵られるほどに汚い貯め方をするのでもありません。相當の事だけはして誰にも其んなに見糞られもせずには仲はして行くところは中々上手なものです。

今も老人はその算當をしてしまつて、幾片かの金を封じにかゝると、その窓の下でバタ／＼と人の走る音がしました。

「はて、今時分」

と封じ金をこしらへる手を休めて老人が小首を傾けました。老人も可なり夜が更け渡つてゐることは知つてゐるし、また此の時分は江戸市中が何處もなく物騒で夜更なんぞは減多にひこり歩きをするものもない事などは心得てゐるのであります、それを今窓下でハタ／＼人の足音がするから

腰に思ひました。

「あれー、助けてエ」

綱を裂ぐやうな一聲、それは確かに女の聲で、その聲と諸共にバツタリと人の倒れる音、それが自分の坐つてゐる窓の下で起つたのだから、金を封じては居られません。

すつくさ立つて窓を押し開いて外を見ました。

未申のあたりに月があつて、外面を可なり明るく照してゐましたから、老人の眼にもはつきりとわかります。

その窓の下の溝の處に、確かに人が斬られて横たはつてゐます。斬られたのは、たつた今で、聲こそ立てられないけれど、手足はまたピクピクと動いてゐるものらしくあります。

老人は愕然として、その道筋の左右を見廻すさ、お竹藏の塀について、榛の木馬場の方へふらふらと歩いて行く一個の人影を認めないわけには行きません。その人影は頭巾で覆面をした武士の姿に相違ないことも、お倉の壁に反射した月の光りで明かに認めることが出来るのであります。然も、それが悠々としていふよりは、ふらふらとして足許危く歩いて行くのは或は傷ついてゐるのかとも思はれるほごです。けれども、ガラリと窓を明けた途端に、その覆面の武士はひらりと何處へか身を隠してしまひました。

遠藤老人は其のまゝにして置けば宜かつたのだけれども、實は宵からの酒氣がまた去らないのに、

此の老人は若い時から槍が多少の得意でありました。だから長押にかけてあつた槍を取つて、酒氣に驅られて、ひさりで表へ飛び出したのは年寄に似氣なき事でした。

「待て、曲者」

その槍を構へて、今辻斬の狼藉者のふらふらと歩いて行つて、ふと隠れたと覺しい榛の木馬場の前まで追ひかけました。

寢静まつてゐた老人の家の者は誰もそれを知りません。また近處の人までも、更にそれを知つて出會ふ容子も見えないほご夜は更けてゐました。若しまた其れを知つた者があつても斯様な際には、心ならずも空寢入をして聞き逃すのが例でありました。遠藤老人とても酒の氣さへ無ければ、さうしてゐたに違ひないけれども、酒は、恰恠を以て聞こえた此の老人をも斯程な無謀なものにしてしまひました。辻斬の狼藉者は、たしかに老人の聲に驚いて榛の木馬場を後へ逃けたやうです。然も其の逃げぶりが踏々跟々として頼りないこゝろ築立の鳥のやうな歩きぶりでありました。手を伸ばせば、羽撞占になりさうな逃げぶりでありましたから老人は、

「奴め、怪我をしてゐるな」

と一圖に、さう思つてしまひました。だから勇氣はいよゝゝ増して一息に追ひかけた時に辻斬の狼藉者は、ふいご角を曲つて榛の木馬場の稻荷の社の中へ逃げ込んだものと認められます。

「逃げようとして逃がさんぞ」

稻荷の前に並んでゐた様木の間に狙つて槍をエイと一聲突き込んだけれ共槍は流れました。手許へ繰込んで、二度突き出した時に、様木の蔭にゐた辻斬の狼藉者は、ふら／＼と二足はかり前へ出ました。

二度突き損じたと思つた老人は二三歩飛び下がりました。其處へ全身を現はした覆面の辻斬の狼藉者は、刀を抜いて腰の處へ當がつて腰から上を屈めて此方を見てゐます。

三度、突きかけようとした遠藤老人は、如何したものか、突くことが出来ません、ハツ／＼と息が切れ出しました。槍がワナ／＼と顛え出しました。突くことが出来ないのみならず、引くことも出来ないらしくあります。

「エイ！」

覆面の辻斬の狼藉者の一聲が氷の上を走るやうに聞えました。それと同時に血煙が立つて可哀相に遠藤老人は槍を投げ出して二つになつてのめりました。

十七

その翌日、彌勒寺橋の長屋の中で、

「さあ、お飯が出来たよ」

と二枚折の屏風の中を見込んだのは宇治山田の米友であります。

「ぞれ起きようかな」

屏風の中で、蒲團から半身を起したのは机龍之助であります。以前よりはまた瘦せて、色は一層の蒼白さを加へてゐるものゝやうです。

「如何もよく寝られるぢやねえか俺等などは宵の中は早く寝て朝は早く起きてえんたが、お前は宵に寝て朝もまた寝て……尤もお前には夜の明けるさいふ事は無えんたらうな」

と云つて米友は苦笑ひしました。

「友吉さの、色々とお世話になつて濟まんな」

龍之助はまた全く起き上りはしません。

「お世話になるのならねえの、そんな事は如何でもいゝが、俺等は些こはかりお前に聞きてえ事があるんだ」

「何を」

「何をじゃ無えんた、斯うして見てゐるさ俺等には、如何もお前の仕方に合點の行かねえ事があるんだ」

「合點の行かない事、何もこれほど世話になつてゐるお前に、迷惑をかけるような事をした覚えはないつもりだが」

「別に俺等も、お前から迷惑をかけられたとも思はねえが、今朝起きて見て、如何も些こはかり

「フカしい事があるんだ」

「そのフカしい事は」

「それだ、お前は、俺等に斷り無しで、昨夕夜中に何處へか出かけやしねえか」

「其んな事は無い」

「無え？、無えとするに如何も變たぜ、まあ宜いや、無けりや無えで宜いけれど、お前、何事があつても、また當分外へ出ちやならねえ事は知つてるだらう」

「そりや承知してゐる」

「お前が外へ出て悪いのみならずだ、俺等も當分は外へ出られねえ事も知つてるだらうな」

「それも知つてゐる」

「二人を、そつと此處の長屋へ隠して呉れた鐘撞堂の親方の親切の事も、お前にや判つてるだらうな」

「それも判つてゐる」

「何だか委しい事は知らねえがさうして眼が潰れて、その上に身體が弱くて憊んでゐるお前の命を取りてえと祝つてゐる奴があるさうだから、俺等は頼に觸つて、それでお前の爲に力になつてやりてえと思つてゐるんだ、眼が見えなくなつて身體の悪い人間を苛めようてのは、これより上の卑怯な仕業は無えからそれで俺等は、出来ねえながらも、お前の爲に力になつてやりてえと思

ふんだ、さうは思ふんだけれども、その力になつてやりてえ俺等も同じやうに、當分明るくは外へ出られねえんだ、何でも此の間淺草の廣小路で撲つてやつた侍の組たの、吉原で喧嘩をした茶袋たのさいふのが俺等の素性を知つて、俺等を取捉めようとして探してゐるんださうだ、だから當分、ほごぼりの冷めるまでは、お前と一緒に隠れてゐるが、さいふから、それで隠れてゐるんだ、そのうちに、ほごぼりが冷めたらお前を連れて、お前の行きてへさ云ふ處へ、連れて行つてやりてえと斯う思つてるんだ、だからお前、そのほごぼりが冷めるまでは、お互ひに窮屈でも、凝り斯うして隠れてゐなくちやならねえ、何か用があるんなら、夜になつて俺等が、そつと出かけて上手に用を達して來てやるから遠慮なく云つてお呉んなせえよ、俺等に氣の毒なんぞと、餘計な氣兼ねして、拙な事をやつて呉れるとお互の爲にならねえんだからね」

米友は何か心が、りの事があるさ覺しく、神妙な念の押し方をしました。また起き上がらない龍之助は黙つて其れを聞き流してゐます。龍之助が顔を洗ひに椽側へ出たあまで米友は、そこちを片づけながら、二枚折の屏風の中へ入つて行きました。

敷きはなしにしてある蒲團の枕許に形ばかりの刀架が置いてあつてそれに大小の一腰が置いてあります。

ふと米友は其の大劍の柄の處に觸れて見て

「はてな」

其の刀を手にとつて屏風の外れの明るい處へ持ち出し、柄に手を當て、撫で、見ました。柄は水で洗つたもの、やうにピツシヨリです。

「をかしいぞ」

米友は暫らくその刀を見てゐたが、柄に手をかけて、引抜いて見ようと思氣込むところを後から

「危ない、危ない、怪我をするからよせ」

手を伸ばして、その刀を取り上げたのはいつの間にか後に立つてゐた龍之助でありました。

「は、は、は」

米友は何さなく定まりの悪さうな笑ひ方をして引込みました。朝飯が済んでしまふと、龍之助は少しの間、日當りのよい縁側の處に坐つて日光を浴びてゐましたが、また屏風の中へ隠れてしまひました。

米友は爐の傍で、大きな鐵瓶の中へ粟を入れて煮てゐます。粟を煮ながら眼をクリ／＼させて黙然と考へ込んでゐると、

「友吉どの」

と云つて屏風の中から龍之助の聲でありましたから

「何だい」

「お前は、たつた今、この刀の中身を抜いて見たか」

「抜いて見やしねえ、抜いて見ようとした處だ」

「それならば宜いけれども、この後もあることだから、氣をつけて刀には觸らぬやうにして呉れ頼む」

「其りや可けねえ、この狭い處でお前と二人つきりの暮した、いつ如何いふハズミで刀に觸らねえとも限らねえや」

「其れを云ふのではない、今のやうに刀を抜いて見ようとしては困る」

「抜いて見たからつて宜いじゃねえか、お前と俺等の中なもの」

「左様じゃない、刀は切れるものだから、お前に怪我をさせては悪い、それでワザ／＼頼むのじゃ」

「御冗戯でせう、斯う見えても子供じやございませぬ、子供がおもちやのサーベルをいぢるのとは違ふんたぜ」

「だから頼むのだ、玩具のサーベルならば怪我をしても知れたものだけれど、刀によつては血を見なければ納まらぬ刀があるからな」

「面白いね、血を見なければ納まらねえ刀さいふやうな奴にお目にかゝつて見てえものだね、權現様の大嫌ひな村正の刀さいふのが其れなんだつてね、お前の持つてゐるのは、そりや村正か」

「村正ではないけれど……よく切れる刀だ」

と云つて龍之助は、さうやら横になつて寢込んでしまつたもの、やうです。米友はなほ黙つて顔

りに粟をゆで、ゐたが、粟も可なりゆたつたさ見たから、大鐵瓶を下けて流しもこへ、その湯をこぼしに行きました、湯をこぼして小瓮の中へ粟を入れてそれと鐵瓶の水を入れ換へたのを両手に持つて

「粟がゆたつた、一つ食はねえか」

と云つて屏風の中を覗いて見ると、病人さながらの龍之助が、首をうづめて寝てゐた横面が痛ましいほごにやつれてゐます。その癖、刀は濡れた柄を心持斜にして、あご云へはさご鞘を抜けるばかりに置いてあるのが殺氣を流すのであります。

夜になるさ風が銀杏の木の葉をひらくと落ちて來ました。彌勒寺の鐘が九ツを打つた時分に屏風の蔭に寝てゐた机龍之助はウンと寝返りを打ちました。

こちらの爐の傍に寝てゐた米友は、その寝返りの音を聞くさ、蒲團から首だけを出して屏風の方を見てゐました。屏風の中はそれつきり靜かなもので、すやくと夢を結んでゐるものらしくあります。それで米友も首を引込めて、また枕に就きました。それから、しばらくして屏風の蔭から、すつくさ立つた人のあつた時には、もう米友は眠つてしまつたものと見えて、動きません。屏風の蔭から、そつと忍び足に出た龍之助は、いつの間にか身仕度をしてゐます。面には覆面をして、羽織を引かけて、例の刀を左に提げて、ソロソと屏風の麓を拔足して歩き出したのは、甲府にゐた時と同じやうな姿であります。たゞあの時よりは一層、足許が危なく、屏風から手を

放した時は倒れさうに見えました。それでもよろ／＼として細目につけてあつた行燈にも、爐端に置いてあつた煙草盆にも突き當らず、さぐり／＼米友の枕許を通り越して蒲團の一端を跨がうとした途端に

「ウーン」

と云つて寢像の悪い米友は足を出しました、その足を避けようとした龍之助は、よろ／＼とよるめいて、行燈に片手をかけました。さては眼を醒ましたかと思つた米友は、案外にも眼を醒ましたのではなく、やはりよく寝てゐるのであります。

行燈の處で、米友の寢息をうかがふらしい龍之助は、左の親指を刀の鐔に當がつて立つてゐます。看し、米友が狸寝入をしてゐるものならば、龍之助はこれを斬つてしまふつもりでせう。幸にして米友は熟睡してゐます。足を一本蒲團の外へ食み出しても知らない位によく寝てゐます。

ほんごに米友が此の場合によく寝てゐることは幸でした。それは米友の爲に幸であるのみならず龍之助の爲にも幸です。一體、龍之助は米友を米友と知らないでゐるやうに、米友も亦龍之助を龍之助と知らないでゐるのであります。お互に知らないでゐるけれども、米友が龍之助を疑ふやうに、龍之助も亦米友を疑はないわけには行きません。話をしてゐるうちに、ちやんぼんになつてゐた話が或處へ行つてヒタリと合ふことのあるのが不思議でありました。この前の日に、米友は何か急に思ひ當つたらしく、龍之助に向つて

「おい、お前は、本當の盲目かい、盲目の眞似をしてゐるんじや無えかな」
と云つた事がありました。何のつもりで米友が斯う云つたのたか、その時に龍之助は思はずヒヤリさせられました。米友が龍之助に疑ひを懐きはじめたのは蓋しこの時からの事であります。けれども、此處で熟睡してゐたから、その疑ひも何の事はなく米友が寢像の悪いまゝで恣まゝに寢てゐるを、行燈に片手をかけてゐた龍之助も、やゝ暫らく立つてゐて、やがてまた一足歩き出した途端に行燈の火が消えました。

細目にしてあつた行燈の火が消えた事と消えない事は、龍之助に取つては、大した障りではありません。それと共に裏の雨戸が一枚音もなく開きました。龍之助は其の極めて僅かの間から外へ出てしまひました。

龍之助が外へ出るに共に、むつくりと蒲團を刎退けたのが米友であります。

暗い中から短氣なる米友としては悠々壁に立てかけてあつた手槍を取つて同じく外へ飛び出しました。

十八

この眞夜中過ぎた晩に兩國橋の上を、たつた一人で渡つて行く女の人があります。女一人で今時分この橋を渡つて行くことでさへが、思ひもかけない事であるのに、その女の方は長い襦袢の裳

を引いてきながら長局の廊下を歩むやうな足ざりで悠々寛々足運んでゐることは、尋常の沙汰とは思はれません。

お化粧をしてゐた面は繪に見るものゝやうに美しくありました。襦袢の肩が外れて、着物の襟も裾もハラ／＼と亂れてゐました。見れば眞白な素足に冷々する露の下りた橋板の上を踏んでゐます。

さすがに賑はしい兩國橋の上も下も天地の眠る時分には眠らなければなりません。

「ムクや、お前、わたしと一緒にゐて、離れちや忌やよ」

その女の方は云ひました。それは間の山のお君であります。お君の歩くのと一緒にムク犬も亦此の橋の上を歩いてゐました。

橋の真中へ来た時分に、お君は欄干に寄り添うて水の流れをながめながら

「ムクや、お前離れちや可けないよ、今度こそは間の山へ歸るんたから、これからお前、その間の道中が長いことから、お前がついてゐてくれないと、わたしは、さても間の山までは行けやしない、それにお前は、さうかするさ途中で、わたしを捨てたがるんだもの、……随分お前は薄情な犬だこそ、わたしよりもお前は、あのお松さんが好きになつたのでせう、だからお前はわたしの處へは來ないで、お松さんの處へ尋ねて來るやうになつたのでせう、お松さんは誰にも好かれず、兵馬さんにも好かれず、御老女様にも好かれず、また出入のお武士たちも皆んなお松

様を好い人と云つて賞めてゐます、それなのに、わたしは誰にも好かれませんが、皆んなわたしを嫌ひます、駒井能登守様も、わたしを捨て、舟で逃げて行きました。お前、さうしておめで、お前を逃がさないやうにこれから、どんな事があつても、お前とわたしは離れないやうにちやんと鎖くさりでつないで上げるから」

お君は犬に向つて、こんな事を云ひながら扱しご帯を解いたものと見え、その扱しご帯の端でムク犬の首をグル／＼と巻きました。ムクは掛念かねんに堪へやらぬ面おもてをして主人を見上げながら主人のする通りになつてゐるさ

「さあ、斯うしてお出で、かうして行きさへすれば大丈夫、これから後は、お前とわたしが離れることはない、二箇ふたつ一緒に間の山へ歸れるから」

扱しご帯の一端を自分の手に持つて橋の上を歩きはじめました。お君は、やはり氣が變になつてゐます。

草も木も眠つてゐるのだから、何人も此の主従の異形な夜行を見てあやしむものはありません。少しばかり歩き出した時に、悄々せうせうと歩いてゐたムク犬が後ろを見返りました。

「何をしてゐるの、早く歩かなければ夜が明けてしまひます」

お君は扱しご帯の端を強く引張りました、けれどもムク犬にはこたへませんでした。

「早くお歩きよ、夜が明けると少し都合が悪い事があるんだから」

それでもムク犬は動きませんでした。

「あれはお前向ふ兩國で、左へ曲ると駒止橋、真直に行けば同向院、それを左へ曲ると一の橋、一の橋を渡らないで堅川かたがは通を真直に行くさ相生町」

お君は、こんな事を繰返してぼんやりと越し方をながめながら立つてゐました。

「おや、誰か人が来るのたね、人が来るからお前は其れを待つてるのかい」

この夜は真夜中過ぎさはいへ、月のない夜ではありませんでした。鎌かまよりは少し幅の廣い月が、たしか愛宕の山の上あたりに隠れてゐなければならぬ晩でありました。だから九十ノ間の兩國橋の上に物の影があるとき、其が全く認められない程の晩ではありません。この時分に橋の左の方の側をふら／＼と歩いて行く黒い人影がありました。さてこそムク犬が、それに感づいたのは不思議ではありません。

その黒い人影さいふのは頭巾をかぶつて竹の杖をついた辻斬の人であります。米友を出抜いて彌や勒寺長屋せいちやうを出た龍之助は何時の間にか斯うして此處まで来てゐました。

お君はソツとして、

「まあ、何だか怖くなつてしまつた。早く行きませう、お前は誰に見られても構はないか知らないが、わたしは左様は行かないの、夜の明けない中に此の橋を渡りきらないさ、後から追手がかかるかも知れないから」

お君は強く扱帯を引張りながら西へ向いて歩き出しましたけれど、犬はいつかな身動きもしません。頑として主人の意に従はないのみか猛犬は却つて猛然として牙を鳴らしました。

犬が牙を鳴らした時に人が近づいてゐます。駒止橋を渡つて右手の處に辻番があるにはあるのです。併し、この番人は晝のうちお葬式が橋の上を幾つ通つたかといふことを數へてゐれば其れで役目の濟む番人でしたから、深夜眠い目をこすつて、メソツコを賣る必要は無かつたかも知れません。

お君もムク犬も無事に此の橋を渡りかけたやうに、此の人影も無事に橋を渡つて此處まで來ました。

お君主従が行けは行く、留まれは留まるのだから、慥にそのあさを跟けて來たものと見られないではありません。

「誰方」

と云つたけれども返事がありません。お君は犬に向つて、

「それ御覽、お前が早く歩かないから、人が來てゐるじやないか、相生町から、お前さわたしを追蒐けて誰か來たんでせう、誰でせう、御老女様でせうか、お松さんでせうか、誰方」

とお君は犬に向つて此んな事を云ひました。けれども犬は答へず、やがて一聲高く吠えました。何時しか杖を捨てた黒い人影は刀を抜いてゐます。

云ひ知れぬ恐怖に襲はれたお君は其處に立ち竦んでよろ／＼と倒れかゝつた片手を橋の欄干に持たせた途端に、

「あれ！、誰かお前の前におゐる、お前を殺さうとしてゐる、危ない！」

十九

彌勒寺橋の長屋から机龍之助のあさを追うて出た宇治山田の米友は、そのあさを追ふことに可なり苦しみました。

何故ならば、外は月の光が暗いので、たしかに目星をつけて行く當の人影は、さながら煙のやうに現れたり消えたりして行くからであります。人さほりは丸つきり絶えてはゐたけれども彌勒寺橋の長屋を出て西へ向いて眞直に行けば六間堀に淺野の辻番があります。右へ行くさ小濱の辻番があります。

それを眞直には行かないで、少し後戻りをして林町の方へ出ました。林町の河岸地を二の橋まで來た時に、不意に龍之助の姿が見えなくなりました。米友は焦き込んで小走りに走つて見たところ、やはり何れにも其の姿が見えませんが、残念がつて立つてゐる時に、二の橋の欄干の側をフラ／＼と歩き出したのがやはり其の人でありました。

占めたと思つて米友が、そのあさを拔足で追つかけるさ、龍之助は煙のやうに橋を渡つてしまひ

ました。米友がつよいて二の橋を渡らうとする時に、行手から六尺棒を持った大男の體が見え出しました。

「やあ、彼奴が向ふ河岸の辻番だ」

さ米友は驚感して小戻りして林町の町家の天水桶の蔭へ隠れるさ鈴木の辻番は二の橋を渡つて、米友の隠れてゐる天水桶の前を素通りして行つてしまひました。

それを遣り過ぎた米友が、天水桶の蔭から出て二の橋を渡りきつて、相生町四丁目の河岸地へ來た時分には、不幸にして又も龍之助の姿を見失つてしまひました。

「チエツ」

米友は舌打ちをして忌々しがりました。さて何方へ行つて見たら宜からう、たしかに橋を渡つて眞直には行かないたらうと思ふ理由があります。それは、つい目の先に鈴木木の辻番があつて、それを通り越してもまた直に關播磨守の辻番に突き當ります。だから、夜分何の用事か斯うして出歩く人が故さらに關所の多い處を押んで通る筈は無からうと思つたからであります。

それで米友は左手の相生町の角を眞直に行きました。氣のせいかな今夜の辻番はいつもと變つて、何さなく穩かでないらしく、相生町四丁目の向ふ角にある本多の辻番等は何か聲高に番人の話しが聞えます。それでもまあ無事に辻番の眼を潜つて、相生町の三丁目から二丁目へかゝつたけれど、何れへ向いても人らしいものゝ影を見ることは出来ません。

「チエツ」

二丁目の河岸を通りかゝると、其處に一軒の大きな構の家の表だけが開いてゐました。そして其の前に提灯を持った人が二三人出入をしてゐるので米友は立ち留まつて、はつと氣がつきました。この家は箱窓の家であります。前に自分が留守をしてゐた事のある家、そこで浪人を追拂つた事のある家、また此の間は其處の井戸で子供を水中から救ひ出したことの覚えのある其の家だけが物種かでないから、米友はギツクリと立ち留まつて暫らく容子を見なければなりません。

その家の前に提灯を提げて、二三人の人を差圖をしてゐるらしいのは、また若い女でありました。

「お秋さん、お前は臺所町の方へ廻つて下さい、お前さんと榮助さんが彼方から廻つて辻番で一 お聞申して見て下さい、さうしてやはり兩國橋へ出て此方の組と落合ふやうにして下さい、わたしは如何しても兩國を渡つたものさしか思はれない、でも途中で辻番に留められてゐるかも知れないから、よく聞いて下さい」

この差圖をしてゐる若い女の人の聲、それが、正に聞いたことのある人の聲でしたから。

「おい／＼、お前はお松さんじゃねえか」

「おや、誰方」

女は振り返つて

「まあ、お前は米友さんじゃないか」

「うむ、俺等だ」

「如何して此の夜更に、お前さん、此んな處へ……それでも宜い處へ来て下すつた、今お前、お前さんが行方知れずになつてしまつた處なの」

「誰が如何したんだ」

「あ、米友さん、お前はまた知らなかつたのね、お君さんは此の家に、すつと前からわたしと一處に暮らしてゐたの、そのお君ちゃんも今夜見えなくなつてしまつたの、此の頃、古市へ行きたいくさ口癖のやうに云つてゐたから、その氣になつて出かけたのかも知れない、い、處へ米友さん来て下すつた、お前さんも直に探しに出かけて下さい、ほんごに折角お出なすつて早々、お使立をするやうな事を云つて濟みませんけれど外の人と違つて、あの方の事ですから。お前さんも、喜んで行つて下さるでせう、早くして下さいまし」

「俺等は別に尋ねる人があつて来たんだ、酔興で歩いて来たんじやねえや」

「ちよいと、お待ち、米友さんお前、何か腹を立てゝゐるの、それでまあ手槍を持つて、此の夜中を一人で歩いて……提灯も持たないで、何かお前にも急用がお有りならば此の提灯を持つておゐて下さい。提灯を持つて歩かないと辻番がやかましいから」

お松は米友を追蒐けて自分の手にしてゐる提灯を持たせようと思つた。その提灯のしるしには五七の桐がついて居りました。

お松の手から極めて無愛想に、提灯を受取つた米友は、さつと相生町の河岸を駈抜けて本所元町まで来てしまひました。それまで来て一向、机龍之助の姿を認むることは出来ません。丁度、此の時に米友は、何處からともなく一聲高く吠える犬の聲を聞きました。それは深夜の事で、こゝまで来る間には犬が吠えないではありませんでした。けれどもこゝで一聲の犬の聲を聞いた米友は、思はずブルツと戦慄しました。

此處に於て米友は、たつた今、お松の云つた言葉を思ひ合せました。今吠えた犬の聲がムクであつて見ると、米友は其處に何か異常なる出来事が起つた事を想像しなければなりません。ムクに逢はざること久しい米友は、その異常なる出来事を路傍の事として閑却する譯には行かないのであります。

米友は其の二聲目を聞かうとして兩國橋の橋の手前へ現れました。目の前にやはり番所がありません、小五月蠅また辻番かと思つた米友は、ふと自分の手に持つてゐる提灯を見ると、これたなと思ひました。お松の手から受取つた提灯を今更のやうに見廻すと、物々しい五七の桐の紋に初めて氣がつかしました。

丁度その時であります。行手の兩國橋の上で

「あれ——危ない」
といふ聲。

一六六
柳の蔭へ槍を隠して橋を渡らうとした米友は、この聲を聞くと共に、その槍を押取つて驀然に駆け出しました。

この時に方つての米友は、最早辻番の咎めを顧慮してゐる邊がありません。隼のやうに兩國橋の上を飛びました。其の時に、橋の真中のあたりの欄干から身を躍らして……川を目がけて飛び込んだものがあるらしい。

「助けて——」

絶叫と共に、洶然と水の音が立ちました。米友は橋の欄干に一領の衣類が引か、つてゐるのを見ました。それは身分ある女の着るべき襦袢でありました。

「おい、如何したんだ」

提灯をかざして橋の下を見る。波の上に慥に物影があつて頻りに浮きつ沈みつしてゐることを認めました。

「はい、ムクがあるから助かります、此の犬が、わたしを助けて呉れます」
水の中から人の聲。

「ナニ、ムクたつて、犬がお前を助けるんだつて、それじゃあお前は君公たな」
米友は橋の板を踏み鳴らしました。

「チエツ」

槍を橋板の上へさし置いて、

「馬鹿にしてやがら、此の尾上岩蔵のお化見たやうな奴が頼に觸らあ、何たつて、今頃、兩國橋をうろついでるんだ、駒井能登守さいふ野郎に欺されて、それから善い加減の處で抛り出されて身の振方に困つて此處へ身投に來たんだらう、ザマあ見やがれ、俺等は知らねえぞ、第一、このピラシヤラが頼に觸らあ、この尾上岩蔵が氣に喰はねえ、ザマあ見やがれ」

米友は斯う云つて罵しつて、欄干に引か、つてゐる襦袢を蹴飛ばしたが、それでも提灯をすつと下けて川の中を見下ろし

「馬鹿野郎」

堪まり兼ねた宇治山田の米友は提灯をさし置いて帯を解きにかゝりました。

それから兩國橋の上へ數多の提灯が集まつたのは、久しい後の事ではありません。

それを外にして、矢の倉の河岸本多隠岐守の中屋敷の塀の外に立つてゐるのは例の頭巾を被つた机龍之助であります。龍之助は竹の杖をついて其の塀の下に立つてゐました。こゝから見れば、兩國橋の側面はその全體を見ることも出来るし、橋の上の人の提灯も橋の下の舟の提灯も、繪に描いたやうに見えるけれども、それを眺めてゐるではありません。

暫らく斯うして塀の際に立つてゐた龍之助は、息を吐いてゐるのであります。隠岐守の屋敷の隣は一橋殿で、その向ふは牧野越中守の中屋敷、つゞいて大岡酒井、松平因幡守等の屋敷、それ

ら新大橋であります。

一六八

此處へ来て立つてゐる龍之助は血に濁かいてゐました。たつた今は兩國橋の上で、斬つて捨つべかりし人を斬り損ひました。そこには慥に邪魔物があつた。その邪魔物は人でなくて動物でありました。その動物は無論犬であります。

その犬が……龍之助が此處へ来て、なほ不審に思ふのは其の犬が猛然として其の主らしいのを防いでゐたけれど、然も自分に向つて何等かの親しみが無かつた犬とは思はれないことあります。こゝへ来て、はじめて思ひ起すやう、伊勢から出て東海道を下る時、七里の渡しから濱松までの道中を、自分の爲に道案内して呉れた不思議な犬があつた。自分が全く明を失つたのは、あの犬と離れた後の事である。犬と離れて自分はある女の世話になつて東海道を下つたが、あれから犬は何處へ行つたやら、今出逢つた犬が、さうも其の犬であるやうな氣がしてならぬ。

斬らんとして斬り損じた事が今宵に限つて、また疑問として殘されてゐたけれど、それが爲に血に濁かいてゐる心の濁かは癒いされたものと思はれません。

犬と人とを諸共に橋の下へ斬り落して、否斬り損じて落して、直に刃を納めて、橋上を西へ走りました、幸にして橋番にも怪しまれずに一氣に廣小路から元柳橋を越えて、こゝに堀下に立つて見ると、病み上がりの身には、ほこんと堪へ難い息切れがします。

併し、兎も角、此處まで来たのは、これから河岸を新大橋へ廻つて、新大橋を渡つて彌勒寺橋の

長屋へ歸るつもりと思はねはなりません。けれども其れは此のまゝ、すんなりとは歸れません。市中の見廻りや辻番が怖いならば、其れは出て来た時も同じこと。此のまゝで歸れないのは、途中のそれ等の心配ではなくて、人を斬らんとして斬り損じたことは、水を飲まんとして飲み損じたものと同じことあります。人を斬らうとして家を出たものが斬らずに歸ることは水を飲まんとして井戸へ行つたものが、水を得ずして歸ることと同じことあります。

斯うして龍之助は本多隱岐守の中屋敷の堀の下に立つて河岸に向いて立つて居りました。龍之助が此處に立つてゐることは知らず、後から靜かに歩いて来る人があります。それもたつた一人で歩いて來ます。提灯も點けずに此の夜中を一人で歩いて來るのは、不思議に似て不思議にあらず、これは矢張り杖をついた按摩でありました。笛を吹かないのは此のあたりが、いづれもお屋敷の堀であること知つての事でせう。

「もし」

龍之助が其の按摩を呼び留めました。

「はい」

按摩は驚いたやうにヒタリと杖を留めました。

「あの本所へ參りたいのだが、その道筋はこれを如何參つて宜しいか教へて貰ひたい」

「本所へお出でなさるのでございますか、本所は何方へ」

「彌勒寺橋に近い處まで」
 「彌勒寺橋、それならば、兩國へお出でなすつた方がお得でございます、これから少々戻りに
 はなりますがね」

「その兩國へ出ないで、新大橋を渡つて行きたいと思ふのだが」

「新大橋、左様ならば、これを真直にお出でなさいまし、わたくしも其方の方へ参りますから何
 なら……」

と云ひながら按摩は静かに歩いて龍之助の前を通り過ぎて行きます。

「今、兩國に身投があつたさうでございますね、でも助かつたさうでございますよ」

按摩は自分の氣を引立てる爲めに、わざと此んな事を云つて

「米澤町のお得意へ参りましたな、つい此んなに遅くなつてしまひましたな、先方では泊つて行
 けさ仰有つて下すつたんですがね、ナニ夜道は按摩の常たと云つて、斯うして出て参りました
 よ、送つて下さるさいふのを断りましたな、自慢じやありませんが、これが勘のせいで……
 わたくしも新大橋を渡つて本所へ参るんでございます、これからまた一軒お寄り申す處がありま
 すから、それへ寄つて、本所の二ツ目まで歸るんでございます、按摩でございますから二ツ目へ
 歸ります、當節は世の中が物騒でございますから、浮つかり夜道は出来ませんけれど、そこは按
 摩でございますから……おや危なうございますよ、ここに水溜りがございますから」

恙う云つて按摩が振り返つた時にヒヤリと冷たい風。音もなく下りて来た一刀。

「えッ、目の見えない者を斬つたな！」

可哀相にまた年の若い按摩でありました。振返つた途端に右の頬けたから上下の齒を併せて斜に
 切つて、左のあはらの下まで切り下けられて二言ともありません。

宇治山田の米友が彌勒寺橋の長屋へ歸つて来たのは曉方の事でありました。戸を開けて内へ入つ
 て見ると、家の中はまた暗いけれども、夜前と別に變つた事ありません。土間を見ると、龍之
 助の穿いて出た草履がちゃんど脱ぎ揃へてあります。

そろ／＼と座敷へ上つた米友は、そつと屏風の中を覗いて見ると龍之助は右枕になつてよく眠つ
 て居りました。その蒼白い面が薄暗い中で、何とも云へず痛々しげに見えるのであります。

「うーむ」

と云つて米友は、それを覗きながら腕組をして唸りました。さうかき云つて、よく眠つてゐるも
 のを起さうとするでもありません。枕許の刀架を見ると、夜前見て置いた處よりは心持前へ進ん
 であるかと思はれるだけで大小一腰は少しの變りもなく、米友は昨日の朝したやうに、強いて其
 の刀を取つて調べて見ようでもありませんでした。

恙うして屏風の上から暫らく眺めて唸つてゐた米友は、思ひ出したやうに爐の近い處へ来て火を

焚きつけました。

「チエツ」

火がよく焚きつかないので舌打をしました、漸く火が燃え上がった時分に米友は、ぼんやりと其の火をながめてみました。暫らくぼんやりと火をながめてゐた米友が、また急に思ひ出したやうに立ち上がつて、流し元へ行つて二升焚の鍋を下けて來ました。鍋の中には昨夕のうちに仕掛けて置いた米があります。

その鍋を自在鍵にかけて米友は、またぼんやりして鍋を見つめました。折角の焚火が消えかゝるのに驚いて、また慌てて薪を加へました。再び盛んに燃え上がる火の前に米友は、またぼんやりとして、その火の色と二升焚の鍋の底さを見つめてみました。

そのうちに火が威勢よく燃えて鍋の中の飯が吹き出すと米友は慌て、鍋の蓋を取つて、また其の鍋を見つめて、ぼんやりとしてみました。その時に屏風の中で寝返りの音がして、さも苦しさを呻く聲がしました。その聲に驚かされた米友は、眼をギョロ／＼させて屏風の方を見返りました。

「眼の見えない者を斬つた！」

屏風の中の人ば夢かうつゝか慄う云つた言葉に思はず身ぶるひして

「ハ、」

米友は眼を光らせました。それから尾を引いたやうな長い唸りが續きました。

矢庭に其の席を立つた米友は、また屏風の處へ行つて覗いて見ました。さきには右枕になつてゐた龍之助が、今度は左枕になつて寝てゐました。蒼白い面には苦悶の色があり／＼と現はれてゐました。氣のせい、一筋の涙痕が頬を傳うて流れてゐるもの、やうに見えますけれども、やはりよく眠つてゐるには睡つてゐるに違ひありません。

また爐邊へ歸つた米友は火を引いて、鍋を自在から心持揺り上げました。

こゝに米友は不思議の感に打たれてゐます。昨夜、この人を追うて出て遂に行方を見失つたが、それとは別に計らざる人を助けて來ました。

相生町の老女の家へ人と犬を送り届けて、昨夜出た人の行方を心許なく歸つて見れば其の人は、極めて無事に斯うして眠つてゐるのであります。

抑も、この人は昨夜何の爲に何處まで云つて何時歸つたかといふ事が米友には測り切れない疑問でありました。それよりも眼の見えない筈の人が、目の見える自分を出し抜いて無事に歸つてゐる、こゝが奇怪千萬に思はれてなりません。

此奴は偽言目じやないかと、米友は此の時にも亦さう思ひ出しました。

多分石川島の造船所から乗出したと思はれるバッテリーが、此の眞暗な中を無提灯で濱御殿の沖へ乗り出しました。

「何處へお出なさるんでございます」船を押してゐた若い男が尋ねました。

「西洋へ」

と答へたのは駒井甚三郎の聲であります。

「エ、その西洋へ此んな小ぼけな船で」

「此れで行くんじやない、沖へ出るゝ大きな船がある」

「へえ、一體、貴方様は、さうして其んなお心持におなりなかつたんです、何の御用で西洋へお出なさるのでございます」

バッテリーを漕ぎ出したのは此二人。人足の寄場であつた石川島。敵や追放に處せられたもので引受人が無くて、放してやるゝまた無宿人になつてしまひさうなものを此處に集めて仕事をさせて置いたから、恐らく此處に駒井甚三郎の爲にバッテリーを漕いでゐるのは其の中の一人と思はれます。二人共同じやうな陣笠を被つて羅衫の羽織を着てゐました。

「吉田寅二郎の二の舞だ」

と云つたまゝ多くを語らず、それをわからないなりで船を探つてゐる若い男は駒井甚三郎に盲目的に信従してゐる者を見なければなりません。

やがて此のバッテリーが神奈川へ近くなるゝ間の方にきらめく星のやうなものが幾つも見え出しました。

「清吉、あれを見る」

甚三郎が指さす處に三本マストの大船が海を歴して浮んでゐます。

世相は様々であります。一方には尊王攘夷が盛であるゝ共に一方にはまた西洋を見なければならぬゝ悟る者も多くありました。駒井甚三郎は斯うしてコッソリと抜け出したけれども、此の年、幕府からは向山準人正が正使として田邊外國奉行支配組頭がこれに添ひ、別に徳川民部大輔は山高石見守をお傳として佛蘭西の萬國博覽會を視察に出かけるやうな世の中になりました。その隨行としては杉浦愛蔵、保科俊太郎、澁澤篤太夫、高松凌雲、養作貞一郎、山内元三郎等をはじめ水戸、會津、唐津等から、それゝの人材が出かける事になりました。

それとは、また別に、長者町に妾宅を構へた龜八大盡も御多分に洩れず洋行する事になりました。これは政治向の視察よりも商賣向を調べたいのですから數十人の番頭を召連れて顧問として各種の商人に同行して貰ひ、それに大盡も可なり年を老つてゐるから、途中萬の心配の爲醫者から看護人から、花のやうな女中まで連れ、其の上に外國へ行つての氣候や食物の變化を慮かつて、日本の食料品を充分積み込み、腕の冴えた料理人を召し抱え、その他、衣類から酒類から萬事抜

かりなく、向うへ行つて附ける味噌まで用意して行かうといふ騒ぎでありました。

その前祝ひの爲に、この妾宅で立振舞がありました。それはまたなかく盛んなる景氣でありました。餘興には美人を集めて鬼ヶ島の征伐をするといふ事でありました。案内を受けた朝野の名流はソロソロと定刻から此の妾宅へ詰めかけて來ました。

この朝野の名流といふのが、いつも大抵定つた面振なのであります。何か事があるにソロソロ口を出て來てズラリと面を並べて設けの席に着きます。

それから、主人側と來客が鹿爪らしい聲、外行の口調を出してお互に、おテンタラの交換をするのであります。主人側は斯く朝野の名流の御來場を賜はりました事は不肖身に取つて光榮とする處でございませうと云ふのであります。さうするに來賓側も負けない氣になつて、主人が老いて益壯にして海外雄飛の志を遂げんとするは商業界のみならず我々後進の爲に無上の教訓であるテナ事を云ふのであります。

そのおテンタラの交換が済むとそれから主客が打ち解けての宴會がはじまります。その宴會の前には餘興が行はれました。

餘興も例の鬼ヶ島の征伐に至ると、もう主客共に大童であります。美人連を鬼に仕立て、朝野の名流が其れを追蒐け廻つてキャツ／＼と云ふ騒ぎでありました。

さて、此の隣家に控へてゐるのが外ならぬ道庵先生であります。これを其の儘で置いては、これ

こそ道庵先生健在なりやと云ひたくないのであります。處が先生、如何したものが一向振ひませぬ。不在でもあるかと思ふと、立派に在宅してゐるのだから、子分の中でも氣の早いデモ倉といふのが堪まり兼ねて、

「先生、あれで宜いですが、長州征伐の兵隊達は艱苦のうちに引くことも進むことも出來ねえで困つてゐるのに、あんな泰平樂な旅立をしていゝもんですか、随分巫山戯てるじゃございませんか、先生として、あれをあのまゝにして置けますか」

眼の色を變へて詰め寄せて來ました時に、道庵先生は泰然自若として盃を舉げ、

「まあ、打捨つて置け、萬事はおれの腹にある」

腹の大きい處を指さしました。けれどもデモ倉には先生の腹の大きい處を理解するだけの頭がありませんでした。

「先生いやに濟ましてるねえお腹が如何かしたんですかい」

南條カミ五十嵐甲子雄の二人は上方の風雲を聞いて急に江戸を立つ事になりました。宇津木兵馬は其れを送つて神奈川まで行きました。

神奈川の宿の背後の小高い丘の上で三人は休みました。眼の前には神奈川の沖、横濱の港が展開されてゐます。秋の空は高く晴れ渡つてゐます。

兵馬の眼を驚かしたのは、眼の前の沖に見慣れぬ三本櫓の大船が横はつてゐることであり、その當時の漁船や番船やまた幕府の御用船等も其の大きな黒船の前では巨人の周囲を取巻く小兒のやうにしか見えません。兵馬が其の巨船に向つて頻りに驚異の眼を睜つてゐるのを南條力は莞爾として傍から申しました。

「あれは和蘭でフレガットと呼ぶ種類の軍艦だ、噸数は三千噸、馬力は四百馬力といふ處たらう。毛唐はあれ以上の軍艦を何百も持つてゐる。日本にはあれだけの船を見ることも珍らしいのだ、残念な事だ、日本の船であれど競争するのは大砲へ弓矢を以て向うのと同じことじや、大砲といへば、あの位の船であれに三十ドイムの施條砲が二十六門は載つてゐたらう、それに小口徑のやつも十門以上はあるたらう、乗組か、左様、五百人は大丈夫だな、日本でも早くあの位の船で此の神奈川の海を埋めて見たいものじや、船と大砲の事を考へると、拙者はいつても駒井甚三郎の事を思ふ、あの男を西洋へやつて、充分に船と大砲の研究をさせて置けば國家の爲に大した働らきを爲すのだが惜しいものだ、あの男は一體今何處にゐるか知らん、瀧の川以來、もう一度會つて話したいと思つてゐたが遂に其所在を知ることが出来なかつた、これも残念」

南條力は一種の感慨と軒昂たる意氣を眉宇の間に現はして斯う申します。神奈川の宿の外れまで二人を送つて別れた宇津木兵馬は其の歸りに神奈川の町の中へ入つて見ると、其處にも目を驚かすものが多くありました。今まで京都や江戸で見聞した氣分とは丸つきり

違つた氣分に打たれないわけには行きませんでした。神奈川の七軒町へ來ると大きな一構への疎築を見出して屋根の上をながめるご横文字で、No. 〇と記してあります。兵馬はそれを見て、はあこれが有名なナンバーナインといふものだなと思ひました。兵馬は此處で岩龜樓の喜遊といふ遊女が、外國人に肌を觸れることを忌やがつて「露をたに厭ふ大和の女郎花、降るあめりかに袖は濡らさじ」といふ歌を詠んで自害したといふ話を思ひ出しました。併し此處へ來て見ると、降るアメリカも、意氣なイギリスも、揚々と出入して、遊女達も露を厭うやうな、しほらしい風情はあんまり見受けないうやうでした。岩龜樓とは何處だか知らないが、兵馬もあの話は誰かのこしらへ事ではないかと思ひました。

兵馬の頭は此の新しい開港場へ來ると、いたく動揺してしまひました。何か大きな渦の中へでも捲き込まれて行くやうな心持で町の中を去つて、また小高い丘へ登りました。そこで松の木蔭に坐つて横濱の港と東海筋とを、しんみりと眺めました。大きな渦へ捲き込まれさうであつた頭の動揺が此處へ來ると、また靜かになりました。さうして松の木蔭でゆつくりと休みながら海を見てゐると、此の時に彼の大きな船が煙を吐きはじめました。やゝ暫らく見てゐるうちに、徐々にして其の船が動き出しました。

黒煙を吐いて本牧の沖に消えて行く巨船の後影を見送つてゐるうちに兵馬は壯快な感じから一種の悲痛な情が湧いて來るのを禁ずる事が出来ません。

誰を送ることもなしに、あの船の行方に名残が惜しまれるやうになりました。その船が見えなくなつた後に、自分は敵を打たねばならない身だと思つて、雄々しくも腰の刀を抜き上げて立ちました。

黒業白業の巻了

一八 安房の國の巻

この巻は安房國から初めます。御承知の通り此の國はあまり大きな國ではありません。

信濃、越後等の八百方里内外の面積を有する、それと並び立つ時には、僅に三十五方里を有するに過ぎない此の國は哀れなものであります。寧ろ其の小な方から云つて、壹岐國の八方里半といふのを筆頭に、隱岐の國が廿一方里、和泉の國が卅三方里といふ計算を間違ひのないものとすれば、第四番目に位する小國が即ち此の安房國であります。

小さい方から四番目の安房國、そこにはまた小さいものに比例して雪を戴く高山もなく、大風の動く廣野もないことは不思議ではありません。源を嶺岡（たかね）の山中に發し、東に流れて外洋に注ぐ加茂川が當に此の國第一の大河であつて——其の源から河口までの長さが實に五里といふことは、何となく滑稽の感を起す位のものであります。

されはにや、昔の物の本にも、此の國には鯉が棲まないと書いてありました。鯉は魚中の靈あるものですから一國十郡以下の小國には棲まないのださうです。さうして見れば一國四郡（今は一

國一郡)の安房の國に魚中の靈魚が來り棲まないといふことも不思議ではありませんまい。

斯うして今更、安房の小さいことを並べてるのは、脊の低い人をわざと人中へ引張り出して、その身の丈を測つて見せるやうな心なき仕業に似て居りますが、安房の國の人よ、それを憤り給ふな。近世浮世繪の大宗匠菱川師宣は諸君のその卅五万里の間から生れました。源頼朝が石橋山の合戦に武運拙く身を以て逃れて諸君の國に頼つて來た時に、諸君の先祖は、それを温かい心で迎へ育て、遂に日本の政權史を二分するやうな大業を起させたではありませんか。それからまた形に於ては此の大菩薩峠と兄弟分に當る里見八犬傳は、其の發祥地を諸君の領内の富山に求めてゐるし、それよりもこれよりも亦、諸君の爲に嬉し泣いて起つべきほどの事は、日蓮上人がやはり諸君の卅五万里の中から湧いて出でたことでもあります。

日蓮は日本國東東條安房の國海邊の旃陀羅が子なり。いたづらに朽ん身を法華經の御故に捨てまゐらせん事、あに石を金にかふるにあらずや

日蓮自ら刻みつけた銘の光は朝な朝な東海の上のぼる日輪の光と同じやうに、永遠にかゞやくものでありませう。

その日蓮上人は小湊の濱邊に生れて、十二歳の時に、同じ國、同じ郡の清澄の山に登せられて其處で出家を遂げました。それは昔の事で、この時分は例の尊王攘夷の時であります。西の方から吹き荒れて來る風が強くと東の方の都では、今や屋臺骨を吹き折られさうに氣を揉んでゐる世の中

でありましたけれど、清澄の山の空氣は清く澄んで居りました。九月十三日のお祭りには、房總二州を東西に分けて、我と思はんもの、素人相撲があつて山上は人で埋まりましたけれどそれは三日前に済んで、後片づけも大方終つて見ると、一きはひつそりしたものであります。

周圍四丈八尺ある門前の巨杉の下には、お祭りの名残の塵芥や落葉が堆く掻き集められて、誰が火をつけたか、火焰は揚らずに淺黄色した煙のみが濛々として杉の梢の間に立ち迷つて西へ流れてゐます。その煙が夕霧と溶け合つて峰や谷をうづめ終る頃に、千光山金剛法院の暮の鐘が鳴りました。

明徳三年の銘ある此の鐘、たしか方廣寺の鐘銘より以前に「國家安康」の文字が刻んであつた筈の鐘、それが物靜かに鳴り出しました。その鐘の聲の中から生れて來たもの、やうに、一人の若い僧侶が山門の石段を踏んでトボ／＼と歩き出しました。

身の丈に二尺も餘るほどの金剛杖を右の手についで、左の手に下げた青銅の釣燈籠が半は法衣の袖に隠れて、その裏から洩れる白い光が白蓮の花びらを散らしながら歩いてゐるやうです。身體は斯うして人並より、すつと小柄であるのに、頭部のみが優れて大き過ぎるせいか、前こゝみに歩いてゐると、身體が頭を引きずられさうで、殊に其の頭が法然頭——と云つて、前丘は低く後丘は高く、その間に一凹の谷を隔てた形は、さう見ても頭だけで歩いてゐる人のやうであります。

「え、何ですか、誰方か、わたをしお呼びになりましたか」

この頭の僧侶は急に立ち留まつて、四邊を見廻しました。見廻したけれども、そのあたりには誰も居りませんでした。ゐない筈です、實は誰も呼んだ人は無いのだから。それにも拘はらず、感のせいか知らん、頻りに其の異様な頭を振り立て、聞耳を立て、ゐました。さうも、此の人は眼よりは耳の働く人であるらしい。いや、眼が全く働かない代りに耳が一倍働く人であるらしい。

「辨信さん」

今度は、たしかに人の聲がしました。姿はやつぱり見えないけれども、それは焚火の燃え残つてゐる四丈八尺の巨杉の幹の中ほざから起つたことは體かであります。

「エ、茂ちやんたね」

頭の僧侶はホツと息をついて、金剛杖を立て直して巨杉の上のあたりを打ち仰ぎました。

杉の枝葉と幹との間に隠れてゐる聲の主は誰やらわからないが、それが子供の聲であることだけはよくわかります。

「辨信さん、お前また高燈籠を點けに行くんだね、近いうちに大暴風雨があるから氣をおつけよ」

木の上の主が斯う云ひました。

「エ、近いうちに大暴風雨があるつて、茂ちやん、お前、さうして其れがわかる」

「そりや、ちやんと解るよ」

「ちやうして」

「蛇が澤山此の木の上に登つてゐるからさ」

「エ、蛇が」

「あ、蛇が木へのぼるさね、さうすると近いうちに雨が降るか、風が吹くか、さうでなければ大暴風雨があるんださ、それで、こんなに澤山、蛇が木の上へのぼつたから、きつと大暴風雨があるよ」

「忌やたね、わたしや蛇は大嫌ひさ、そんなに澤山蛇があるなら、茂ちやん、早く下りておめな」

「可けないよ、辨信さん、おいらは、その蛇が大好きなんだから、それを捉まへようと思つて、此處へ上つて来たんだよ、また三つしか捉まへないの」

「エ、三つ！、お前、そんなに蛇を捉まへてさうするの、食ひつかれたら、さうするの、氣味が悪いじゃないか、氣味が悪いじゃないか、およしよ、およしよ」

「三つ捉まへて懐に入れてるんだよ、食ひつきやしないさ、慣れてるから食ひつくものか、あたいの懐の中で、いゝ心持に眠つてゐらあ」

「あゝ、思た、聞いてもぞつとさする」

盲法師は木の上を見上げながら、ぞつと立ち竦みました。